

上大利北土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ

牛頸本堂遺跡群Ⅸ

～ 第14次調査 ～

大野城市文化財調査報告書 第83集

2008

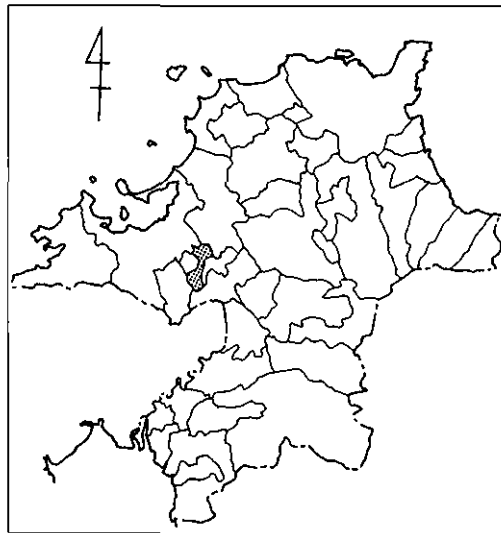
大野城市教育委員会

上大利北土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ

うし くび ほん どう い せき ぐん
牛頸本堂遺跡群Ⅸ

～ 第14次調査 ～

大野城市文化財調査報告書 第83集



2008

大野城市教育委員会



SX02出土須恵器



(1) 灰原出土須恵器



(2) 灰原検出状況

序

今回報告する牛頸本堂遺跡は、九州最大の須恵器窯跡群「牛頸窯跡群」の一角に位置する遺跡ですが、第14次調査は、上大利北土地地区画整理事業に伴い平成17年に実施したものです。牛頸窯跡群では、これまで300基を超える窯跡が調査され、具体的な姿が明らかにされてきました。そのような本格的調査の先駆けとなった昭和44年の野添窯跡群の調査では、6号窯跡が牛頸窯跡群内では最古の窯跡であることが確認され、操業開始期の様相が判明して牛頸窯跡群の重要性が世に広められることとなりました。

それから約40年を経た今回の調査では、これをさかのぼる最も古い段階の良好な資料が見つかり、牛頸窯跡群の操業開始の時期や様相について新たな知見を得ることができました。

今後、このような成果を研究者だけではなく広く市民に知らせ活用することで地域の歴史の素晴らしさを再確認していただき、地域愛護につないでいきたいと思います。そのためにも本書が広く活用され、文化財への理解と認識を深める一助となり文化財愛護の精神が高揚する手掛かりとなれば幸いです。

最後になりましたが、上大利北土地地区画整理組合をはじめ㈱大成建設、工事関係者及び地元の方々にご理解とご協力をいただきましたことに、対し厚く御礼申し上げます。

平成20年9月30日

大野城市教育委員会
教育長 古賀 宮太

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が上大利北土地地区画整理事業にともなって発掘調査を実施した、大野城市大字上大利所在の本堂遺跡第14次発掘調査の報告書である。なお上大利地区は牛頸窯跡群の範囲に含まれており、こうした歴史事象を踏まえたことから本書の表題を『牛頸本堂遺跡群』とした。
2. 発掘調査は、大野城市上大利北土地地区画整理組合の委託を受け大野城市教育委員会が実施した。
3. 遺構写真は、早瀬賢が撮影した。
4. 遺物写真は、(有)文化財写真工房（岡紀久夫、埋蔵文化財写真研究会員）が撮影した。
5. 遺構平面実測図は、全体図を(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託し、遺構平面実測図・個別の実測図・地形測量図は早瀬・久住愛子（旧姓井上）・森田安哉子（福岡大学学生）が作成した。また上大利地区旧地形図は、(株)写測エンジニアリングに委託した。なお、地形測量図のコンターは25cm間隔である。
6. 遺構実測図中の方位は磁北を表し、図上の座標は国土座標（第Ⅱ系）を示す。
7. 遺物実測図は、久住・北川貴洋・城門義廣（現福岡県教育委員会）・井上理香が作成した。
8. 製図は、遺構図を渡部美香・中島圭が作成し、出土遺物は(株)埋蔵文化財サポートシステムに製図を委託した。
9. 拓本は、北川・城門・井上が作成した。
10. 観察表は、(株)埋蔵文化財サポートシステムが作成し、中島・遠藤茜が編集した。
11. 本書に掲載した遺跡分布図は、国土地理院発行の1/25,000地形図『福岡南部』『太宰府』を使用したものである。
12. 遺物の名称の内、須恵器蓋杯については平城宮分類による呼称を用いる。
13. 本書の遺物・実測図・写真はすべて大野城市教育委員会が管理・保管している。
14. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修を使用した。
15. 本書の執筆・編集は早瀬がおこなった。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査経過	1
2. 調査体制	1～8
II. 調査の結果	
1. 調査概要	9
2. 遺構と遺物	9～50
III. まとめ	
1. 遺構の変遷	51
2. 灰原出土須恵器の時間的位置付けと牛頸窯跡群開窯期の様相	51～57

図版目次

図版1	(1) 調査地全景 (南から)
	(2) 灰原検出状況 (北から)
図版2	(1) 灰原1・2区間土層 (南から)
	(2) 灰原2・3区間土層 (B-B') (南から)
図版3	(1) 灰原3・4区間土層 (C-C') (南から)
	(2) 灰原8・9区間土層 (C-C') (南東から)
図版4	(1) 灰原5・6区間土層 (D-D') (南から)
	(2) 灰原9・10区間土層 (D-D') (南東から)
図版5	(1) 灰原3・7区間土層 (A-A') (東から)
	(2) 灰原5・9区間土層 (A-A') (南東から)
図版6	(1) SX02遺物出土状況 (北から)
	(2) SX02下層粘土出土状況 (北から)
図版7	(1) 調査区2区全景 (南から)
	(2) SB01・SD01全景 (南西から)
図版8	(1) SB01・P19柱痕完掘状況 (北から)
	(2) SB01・P19土層 (北西から)
図版9	(1) SB01・P20柱痕完掘状況 (北から)
	(2) SB01・P20土層 (北西から)
図版10	(1) SB01・P03柱痕完掘状況 (北東から)
	(2) SB01・P21柱痕完掘状況 (北東から)

- 図版11 (1) SC01全景 (北東から)
(2) SC01カマド全景 (北東から)
- 図版12 (1) SD01土層 (A-A'・B-B') (南東から)
(2) SD01土層 (C-C') (南東から)
- 図版13 (1) 灰原出土須恵器
(2) SX02出土須恵器
- 図版14～22 灰原出土遺物①～⑨
- 図版23 灰原出土遺物⑩・SX02出土遺物①
- 図版24・25 SX02出土遺物②・③
- 図版26 SX02出土遺物④・灰原下面ピット出土遺物
- 図版27 SC01、SD01・02・05出土遺物
- 図版28 表土・耕作土出土遺物、出土遺物当て具痕①
- 図版29 出土遺物当て具痕②
- 図版30 出土遺物シッタ痕・粘土紐巻き上げ痕
- 図版31 出土遺物ヘラ記号
- 図版32 調査地周辺航空写真 (平成16年11月撮影)

挿 図 目 次

第1図	平成16年度上大利北土地区画整理地内調査地位置図 (1/5,000)	2
第2図	上大利区画整理地周辺地形図 (1948米軍撮影) (1/5,000)	3
第3図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	5～6
第4図	調査地地形全体図 (1/200)	7～8
第5図	灰原区割図 (1/200)	10
第6図	灰原土層実測図 (1/80)	11
第7図	灰原3区出土遺物実測図 (3は1/2、その他は1/3)	12
第8図	灰原4区出土遺物実測図① (1/3)	13
第9図	灰原4区出土遺物実測図② (1/3)	15
第10図	灰原5区出土遺物実測図 (1/3)	15
第11図	灰原6区出土遺物実測図 (51は1/2、その他は1/3)	16
第12図	灰原7区出土遺物実測図 (1/3)	16
第13図	灰原8区出土遺物実測図 (1/3)	18
第14図	灰原9区出土遺物実測図① (1/3)	19
第15図	灰原9区出土遺物実測図② (1/3)	20
第16図	灰原9区出土遺物実測図③ (1/3)	22
第17図	灰原9区出土遺物実測図④ (1/3)	24

第18図	灰原10区出土遺物実測図①（1／3）	25
第19図	灰原10区出土遺物実測図②（180・192は1／6、その他は1／3）	27
第20図	灰原各ベルト出土遺物実測図（1／3）	28
第21図	土坑（S X 02）実測図（1／40）	29
第22図	土坑（S X 02）出土遺物実測図①（1／3）	30
第23図	土坑（S X 02）出土遺物実測図②（1／6）	31
第24図	灰原下面ピット出土遺物実測図（1／3）	32
第25図	灰原・S X 02出土置き台・切削物実測図（1／3）	32
第26図	S B 01実測図（1／60）	33
第27図	S B 01出土遺物実測図（1／3）	34
第28図	S C 01実測図（1／60）	34
第29図	S C 01カマド実測図（1／40）	35
第30図	S C 01出土遺物実測図（1／3）	35
第31図	S D 01土層実測図（1／40）	36
第32図	S D 01・02・05出土遺物実測図（1／3）	37
第33図	表土・耕作土出土遺物実測図（1／3）	38
第34図	灰原出土須恵器器種一覧図（1／6）	53
第35図	重留窯跡・野添6号窯跡出土須恵器（1／6）	55

表 目 次

表 1～11	本堂遺跡14次調査出土遺物観察表①～⑪	40～50
--------	---------------------	-------

巻 頭 図 版 目 次

巻頭図版 1	S X 02 出土須恵器
巻頭図版 2	(1) 灰原出土須恵器
	(2) 灰原検出状況

I. はじめに

1. 調査経過

上大利北土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の調査経緯については『牛頸梅頭遺跡群Ⅰ』（大野城市文化財調査報告書第60集）に、また平成17年度の調査経過については『牛頸本堂遺跡群Ⅶ』に詳述しているが、以下では、改めて本堂遺跡14次調査についてまとめておきたい。

本堂遺跡14次調査対象地周辺については、本市教育委員会が1987年に刊行した『野添窯跡群』の「Ⅱ位置と環境」で、過去にⅢA期の須恵器が表採されていることから（註1）、当概期の窯跡の存在が確実視されていた場所であった。さらに平成11年7月に実施した上大利区画整理事業地内分布調査においても遺物の散布が認められた。平成16年度に実施した丘陵の上部にあたる本堂8次調査でも表土、攪乱土中から当概期の須恵器が出土したため、丘陵斜面裾部にあたる調査対象地において窯跡が存在する可能性はより高まり、窯跡の確認が期待されていた。

対象地については、平成17年6月22日～7月29日に上大利区画整理事業地内における埋蔵文化財調査として、試掘調査（63次）を実施した。調査方法は、調査地全体を重機により表土剥ぎを実施し、遺構の有無を確認した。現状は大きく削平され、一時は釣堀として利用されていたため旧状を残すところは少なかった。窯体については確認することはできなかったが、斜面下方において灰原を確認した。灰原は相当の攪乱を受けるが、広く確認でき、採取できた遺物から牛頸窯跡群では最古段階にあたることが判明した。このため対象地を本堂14次調査として、本調査を実施した。本調査実施期間は平成17年8月3日～11月30日である。整理・報告は平成19・20年度に実施した。

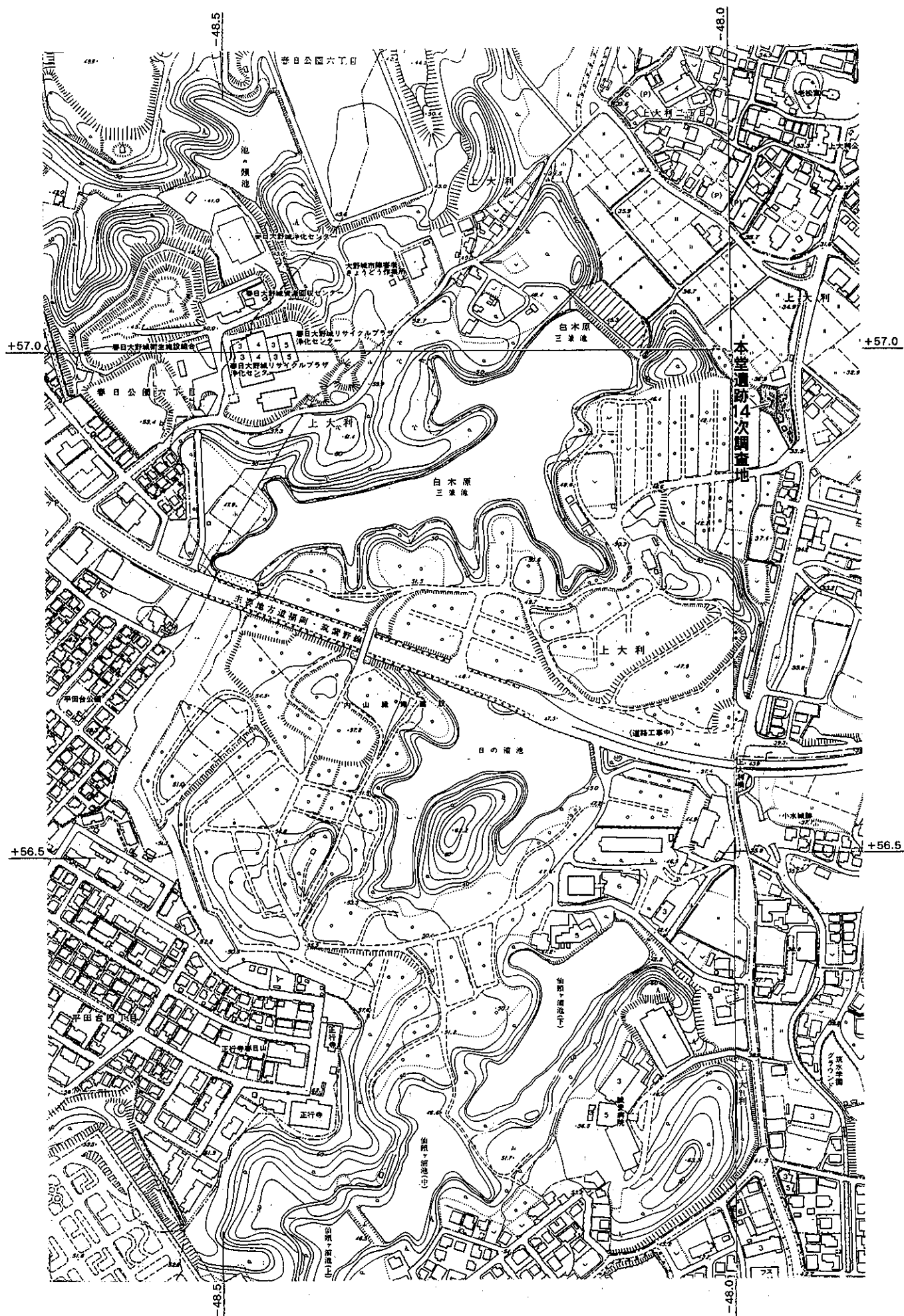
また調査終了後の平成18年、下大利南ヶ丘線を挟んだ東側において、独立行政法人産業技術総合研究所活断層研究センターにより警固断層調査が実施され、約4500年前に活動した断層が確認された。この調査に伴い、本堂14次調査地北壁において、花崗岩と阿蘇4火砕流堆積物が接する西上がりの逆断層露頭が確認できるとの報告を受けた。

2. 調査体制

平成14～20年度における発掘調査ならびに整理作業における調査体制は以下のとおりである。なお、整理作業は平成20年度に完了した。

[大野城市教育委員会]

教 育 長	堀内貞夫（～15年6月）	古賀宮太（15年6月～）
教 育 部 長	鬼塚春光（14年3月～17年3月）	小嶋 健（17年4月～20年3月）
	森岡 勉（20年4月～）	
社会教育課長	秋吉正一（14年4月～17年3月）	水野邦夫（17年4月～18年3月）
ふるさと文化財課長	舟山良一（18年4月～）	
文化財担当係長	舟山良一（～18年3月）	中山 宏（18年4月～）
主 査	徳本洋一 石木秀啓	緒方一幹（16年4月～18年3月）



第1図 上大利北土地区画整理事業地内調査地位置図 (1/5,000)



第2図 上大利土地区画整理地周辺旧地形測量図（1948年米軍撮影）（1/5,000）

丸尾博恵

主任主事 大道和貴（～16年3月）

主任技師 林 潤也 早瀬 賢（16年4月～）（調査・整理担当）

技 師 上田龍児（19年4月～）

嘱 託 平島義孝（～16年3月） 上田 恵（14年4月～15年4月）

島田 拓（14年4月～15年6月） 岸見泰宏（14年4月～16年3月）

一瀬 智（15年11月～17年7月） 西堂将夫（15年4月～18年3月）

井上愛子（16年4月～20年3月） 北川貴洋（16年4月～19年3月）

城門義廣（18年4月～19年8月） 岡田裕之（18年5月～19年3月）

田尻義了（19年4月～6月） 遠藤 茜（19年4月～）

石川 健（19年7月～） 大里弥生（19年10月～）

甲斐康大（20年4月～） 中島 圭（20年4月～）

栗津剛史（16年4月～18年6月） 能塚由紀（18年8月～）

整理作業員 松岡信子 町井裕子 鬼塚穂子 白井典子 村山律子 井上理香

渡部美香 城真奈美 橋本悦子 渡辺直美 仲村美幸

発掘作業員

原田敬子 大海雅子 高木幸子 満富スエコ 吉岡波津子 岩切ふえ 前田チエ子

西田幸子 那波幸子 高木冴子 藤田和子 三原ひろみ 吉田香織 岡本妙子 馬場孝子

田中照子 寺垣みゆき 中垣 親 松山洋子 日野律子 小林敏子 坂本泰子

渡辺久美子 小林久美子 西村清子 貞包由起子 広渡隆子 穴井和子 立石律子

船越桃子 樋之口浩一 深野人美 大藺英美 仲前富美子 井口るみ子 倉富倫子

釣屋種利 飯田三治 溝口 忍 金澤好子 田浦秀子 小川ケイ子 三善公子 山下隆子

團野ハマ子 篠崎繁美 東島真弓 安里由利子 中山文子 牧野和美 川村真樹子

村岡真由美 榎坂陽子 原口美奈子 山口文代 大島五津子 大浦旗江 清成健悟

高木由佳 木村奈津子 織田 徹 松田和美 戸渡京子 野崎美智子 倉住孝枝

稲富久子 山田賢治 松尾純子 末永 勝 安達はるみ 西本福雄 田中悦子 田野和代

吉村秀子 宮原ゆかり 尾ノ口英晴 碓井ふき子 木室友希 川岸昌子

[上大利北土地区画整理組合]

理 事 長 伊藤雅都

副 理 事 長 樋口敬記 林 尚司

事 務 局 長 平川松丸

技 術 職 吉次俊二（～19年3月） 林 圭一（～18年3月）

山下 健（16年4月～） 濱本泰司（18年4月～20年3月）

事 務 職 伊藤衆子

註1 三島肇1969「上大利住居址調査報告」『都久志』第3号 福岡県立筑紫中央高等学校歴史部



第4図 調査地地形全体図 (1/200)

II. 調査の結果

1. 調査概要 (第1・2・4図、図版1)

第14次調査地は、事業対象地内の下大利・南ヶ丘線に面する宅地部分にあたる。大野城市大字上大利626、627他にあたり、調査面積は約1,300㎡である。調査地は、現状で段状に造成され旧地形を留めていなかったが、牛頸山から北へ派生した丘陵から東側に向かって張り出した低丘陵の斜面裾部に位置し、東へ向かって緩やかに下る緩斜面に立地する。前述のとおり、牛頸窯跡群最古段階にあたる窯跡の存在が注目されていたほか、周辺の調査結果から奈良時代・中世の集落も想定される場所であった。

試掘調査は重機により調査地全体を表土剥ぎする方法で進めた。調査地は、高低差が約2mの2段になっており、南側の一部は花崗岩バイラン土を、他は阿蘇4火砕流堆積物に由来する黄灰色・黄橙色土ローム層を遺構検出面としていた。上段では散漫ながらピット・溝跡が確認され、須恵器・土師器等の遺物も出土した。下段では斜面下方において灰原が確認された。灰原は激しく攪乱を受けるが、須恵器が多数含まれており、採集した遺物は牛頸窯跡群では最古段階にあたる事が判明した。このことから本調査を実施することとなった。本調査は平成17年8月3日～11月30日に行った。調査は下段を1区、上段を2区とし、下段の一部を3区として1区から順次行った。

調査の結果、灰原・掘立柱建物1棟・竪穴住居1棟・溝5条・土坑1基・ピットが確認された。遺物は、須恵器、土師器、弥生土器、白磁、石器、瓦、土製品などがある。

2. 遺構と遺物

(1) 灰原 (第5・6図、図版1～5)

灰原は、東側へ幅広く張り出した小丘陵の東側緩斜面裾部に位置する。丘陵は田畑と宅地造成により階段状に削平されており、灰原の上には削られた丘陵の土に由来する土が被り、灰原本体も攪乱を受けていた。調査は灰原を10区に分割して裾から上方に向かって順次掘り下げをおこなった。灰原は長さ2m×幅6.3mの範囲に広がる。灰層は厚いところで30cmを測り、斜面裾に向かって薄くなっていく。灰層の中からは須恵器が多量に出土した。灰層の上には、斜面上方にあった灰層や後世に堆積した土などが流れて二次堆積したと考えられる褐灰色土・灰褐色土と丘陵の土に由来する明黄褐色土・黄灰色土が堆積しており、須恵器の他に土師器・陶磁器・瓦などが含まれていた。灰層の下には窯の掘削土の可能性のある粘質土が堆積しており、層中より須恵器が出土した。また、後述するように、灰原の下で土坑・竪穴住居・ピットが検出された。

出土遺物

1～200は、灰原からの出土遺物である。灰原は第5図のように1～10区に分割し、各区ごとに掘り下げをおこなったため、本報告では現場段階での所見にしたがって、区・層ごとに報告をおこなう。ただし各区の層名は灰原全体を通観するように努めて付けたが、前述のように灰原は広範囲にわたり攪乱を受けていたため、必ずしも同じ層名を用いても層の性格や堆積時期が



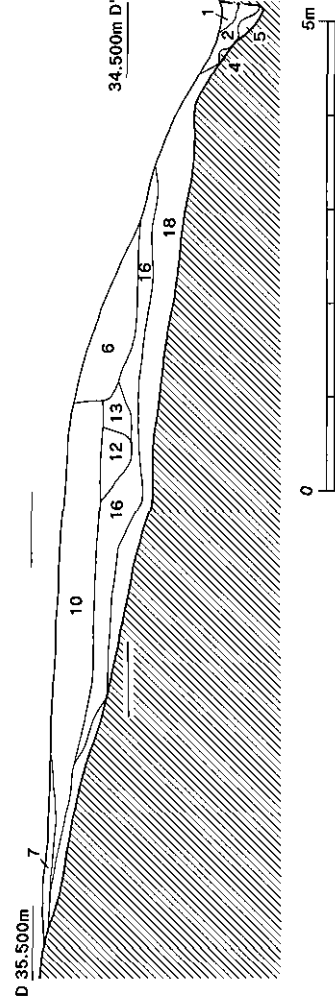
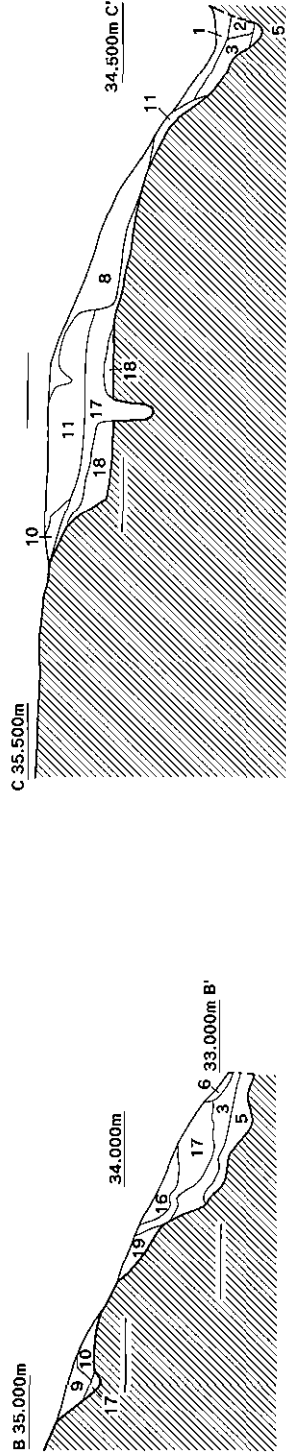
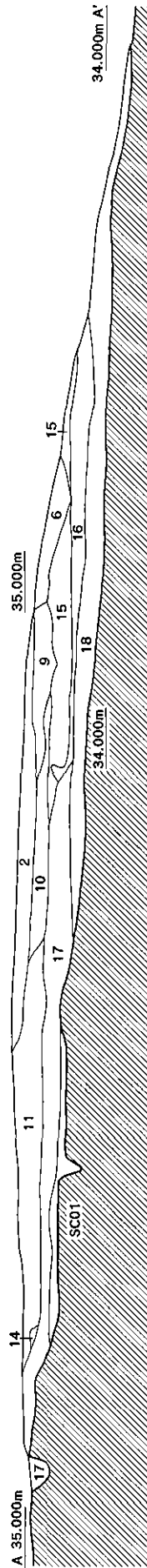
第5図 灰原区割図 (1/200)

同一であるとは限らない場合がある。

灰原3区 (第7図、図版14・30)

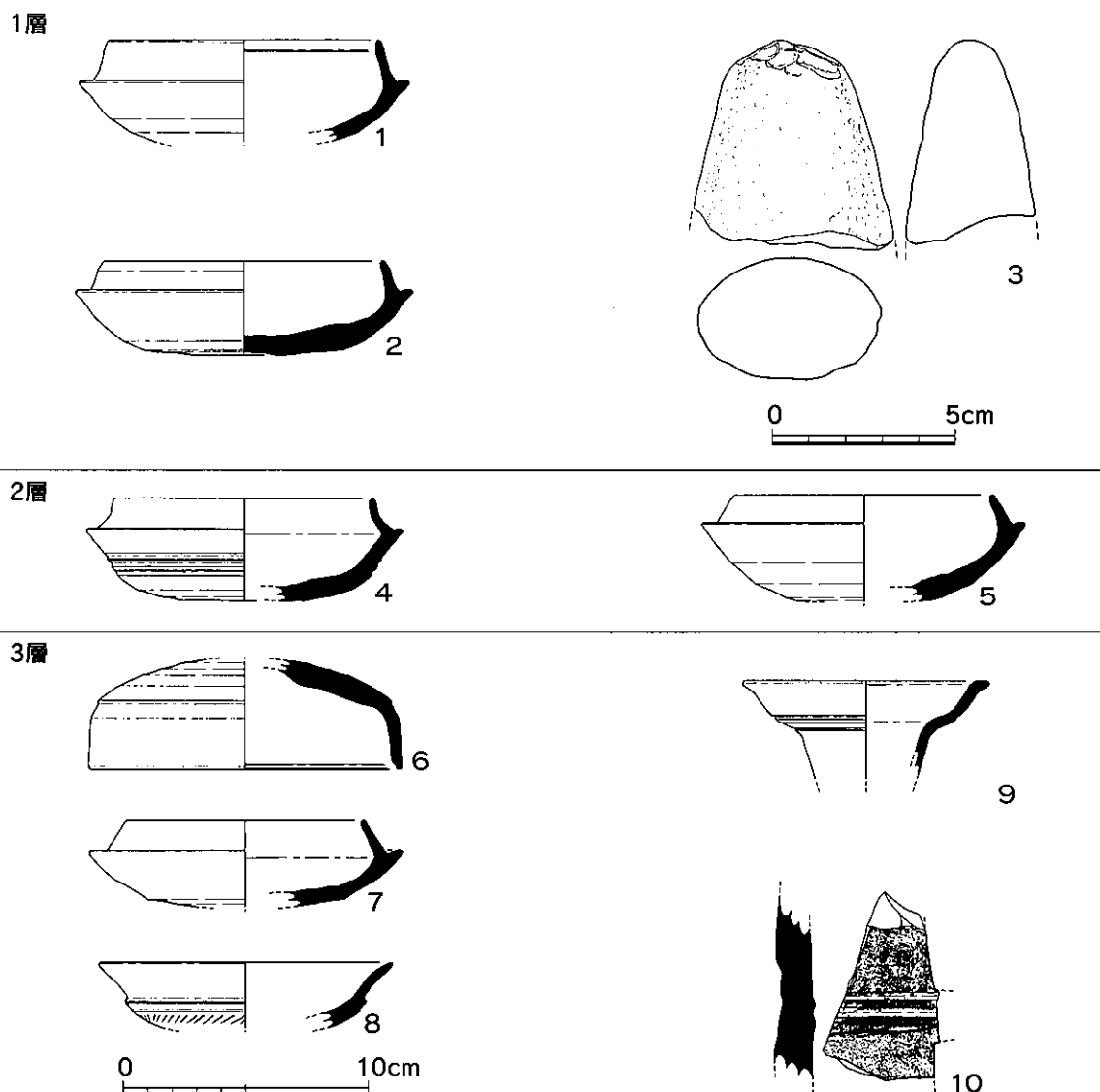
須恵器 (1・2、4～10) 1・2は1層出土。いずれも杯H。口径11.2～11.5cm。底部は比較的平らで浅く、外面1/2にケズリを施す。2は頂部にケズリが施されず、底部内面に同心円当て具痕が残る。

4・5は2層出土。いずれも杯Hで、口径10.7cm。底部は比較的深めである。外面1/2にケ



1. にぶい黄褐色砂質土10YR5/3
しまりあり。砂粒を少し含む。酸化鉄目立つ。
2. 黄灰色粘土2.5Y4/1
しまり弱い。酸化鉄目立つ。(4層)
3. 黒褐色粘土2.5Y3/1
しまり弱い。
4. 黄褐色砂質土2.5Y5/4
しまり弱い。砂粒を多く含む。(4層)
5. 黄灰色粘質土2.5Y5/1
しまりあり。炭化物を多く含む。(4層)
6. 黒褐色灰塵10YR3/1
現代からん層
7. 灰黄褐色砂質土10YR5/2
しまり強い。暗褐色土7.5YR5/6混じる。
8. 褐色土10YR5/1
しまりあり。炭化物を多く含む。(2層)
9. 灰黄褐色土10YR5/2
しまりあり。粘性あり。灰層をブロック状に含む。(2層)
10. 灰黄褐色土10YR5/2
しまりあり。粘性あり。砂粒・炭化物を少し含む。(2層)
11. 明黄褐色土10YR6/6
しまり強い。砂粒を多く含む。(1層)
12. 黒色土10YR2/1
しまり弱い。灰層。
にぶい黄褐色土10YR6/4が互層状に入る。(3層)
13. 黒色土10YR2/1
しまり弱い。灰層。焼土を少し含む。(3層)
14. 褐色土10YR5/1
しまりあり。炭化物・焼土を多く含む。
15. 11層と同じ。
16. 黄灰色土2.5Y4/1
しまりあり。砂粒・炭化物を多く含む。(1層)
17. 黒色土10YR2/1
しまりあり。灰層。焼土を多く含む。(3層区層)
18. にぶい黄褐色粘質土10YR5/4
しまりあり。褐色粘質土10YR6/1を少し含む。(5層)
19. 黄褐色土10YR5/6
しまり強い。
20. 灰黄褐色粘質土10YR5/2
しまりあり。炭化物を多く含む。黄褐色粘質土10YR4/3をブロック状に含む。(SC01埋土)

第6図 灰原土層実測図 (1/80)



第7図 灰原3区出土遺物実測図（3は1/2、その他は1/3）

ズリを施す。4は立ち上がりりが内傾し、口縁部は直立気味に立ち上がる。体部中位外面に3条の沈線が施される。5は立ち上がりりが内傾する。底部内面にシッタ痕あり。

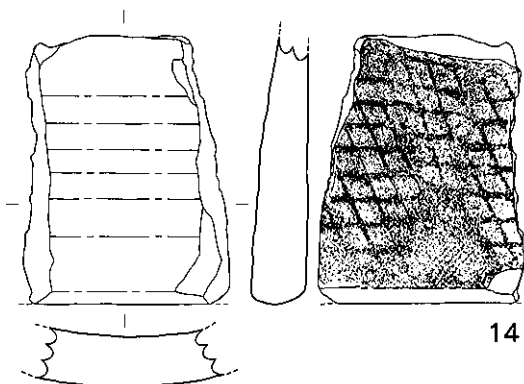
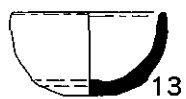
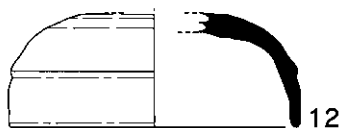
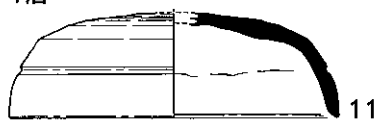
6～10は3層出土。6は杯H蓋。口径12.8cm。天井は比較的高く、天井部・体部境にわずかに段をもつ。天井部内面に同心円当て具痕が残る。7は杯H。口径9.8cm。底部は浅く、底部外面の1/3にケズリを施す。立ち上がりは内傾して直線的に延びる。8は高杯の杯部。底部・体部境の段直下に1条の沈線が巡り、底部外面に連続刺突文が施される。9は甕。頸部は直線的に開き、口縁部が屈折してさらに外へ開く。屈折部の上下に1条ずつ沈線が入る。口縁端部内面にはナデを施し面をなす。10は器台の脚部。外面には突線2条が配され、上下に波状文が入る。縦方向に長方形と推定される透かし窓を有する。

石器（3） 3は1層出土。石斧の破損品。端部に敲打痕があり、破損後叩き石に転用か。

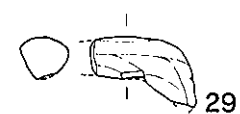
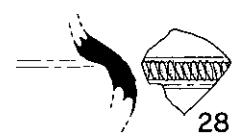
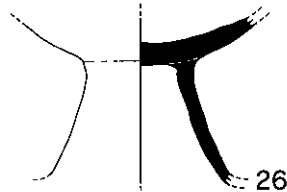
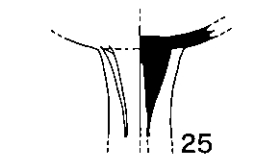
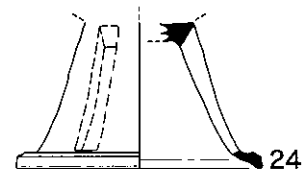
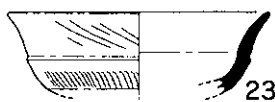
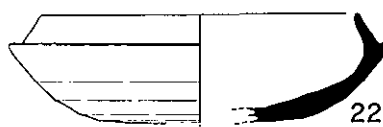
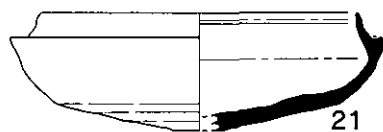
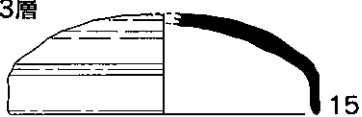
灰原4区（第8・9図・図版14～16・30）

須恵器（11～13・15～30） 11～13は1層出土。11・12は杯H蓋。11は口径13.1cm。天井部は比較的低く平らで、外面1/2にケズリが施される。内面にシッタ痕あり。天井部・体部境

1層



3層



0 10cm

第8図 灰原4区出土遺物実測図① (1/3)

に沈線を巡らせる。口縁端部に段をもつ。12は口径11.6cm。天井部は比較的高く、天井部・体部境はわずかに段をもつ。13は小型の椀。口径6.2cm。底部外面にケズリが入り、他はナデ調整。

15～30は3層出土。15・16は杯H蓋。天井部は比較的低く平らで、外面1/2以上にケズリを施す。天井部・体部境に沈線を巡らせる。16は口縁端部に細い沈線が入る。器壁は均一で薄く全体的に丁寧な作りである。15は天井部内面に同心円当て具とシッタ痕が残る。17～20は杯H。17～19は口径10～11cm。底部は深く、器壁が分厚い。底部外面1/2以下にケズリが入る。立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸く仕上げられる。17・18は底部中央にケズリが施されず、やや粗雑な作りである。20～22は口径11～13cm。体部は比較的深度、底部外面の1/2～2/3にケズリを入れる。立ち上がりは内傾して若干外反しながら立ち上がる。端部は浅い沈線が入るものと丸く仕上げられるものがある。器壁が薄く丁寧な作りである。23～26は高杯。23は杯部で、底部・体部境に段がつき、底部外面に連続刺突文が施される。24～26は高杯脚部。24・26は基部が太く直線的に開き脚端部が一旦外へ折れてから下方へ折れる。25は基部が細く、非常に細い透かしを入れる。27は短頸壺。体部外面にカキメが入る。28は臚。体部中位に2条の沈線が施され、間に連続刺突文が入る。30・32・35は高杯形器台。口縁端部に刺突文と1条の沈線が施される。口縁部上位外面には沈線と波状文の組み合わせが2段以上施される。外面中位がカキメ、下位は擬格子タタキ。内面は口縁から台部中位はナデ、下位には同心円当て具痕が残る。33・34は器台の脚部。33は沈線の間に波状文が施され、四角い透かし窓を入れる。34は脚裾部で、短く外反しながら開く。端部は丸く仕上げられる。外面に波状文が入る。31・36は甕。31は口縁端部が下方へ肥厚して口唇部が面をなし、波状文と1条の沈線が施される。口縁部外面には波状文が施される。36は口縁部が大きく外反し、端部付近で折れて外上方へ延びる。口唇部下位に沈線が1条巡り、口縁部には1条の沈線施文後、上下に細かな波状文が入る。

38は4層出土。杯H蓋。口径12.1cm。天井部は高く、体部はやや内に入りながらまっすぐ延びる。天井部・体部境に沈線あり。

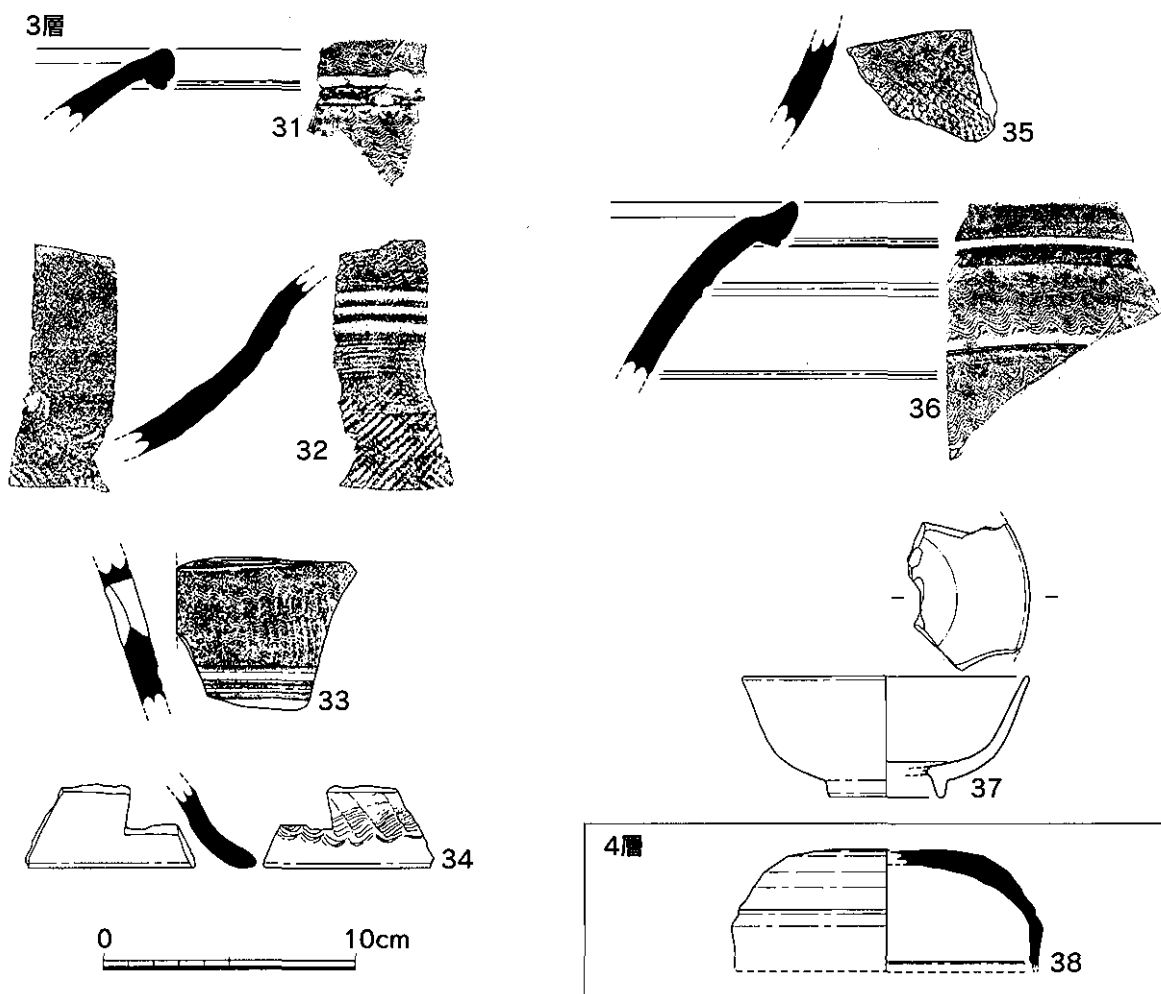
白磁 (37) 37は白磁椀である。体部は下位で丸みをもち、口縁部に向かって外上方に延び、直口縁をなす。高台は短く直立する。内面見込み部分の釉は掻き取られる。太宰府陶磁器分類の椀Ⅷ類にあたるか。

土製品 (29) 鉤状の把手の形を呈す。調整は摩滅が激しく判然としないが、ナデか。ミニチュアの煮炊き具模倣品か。

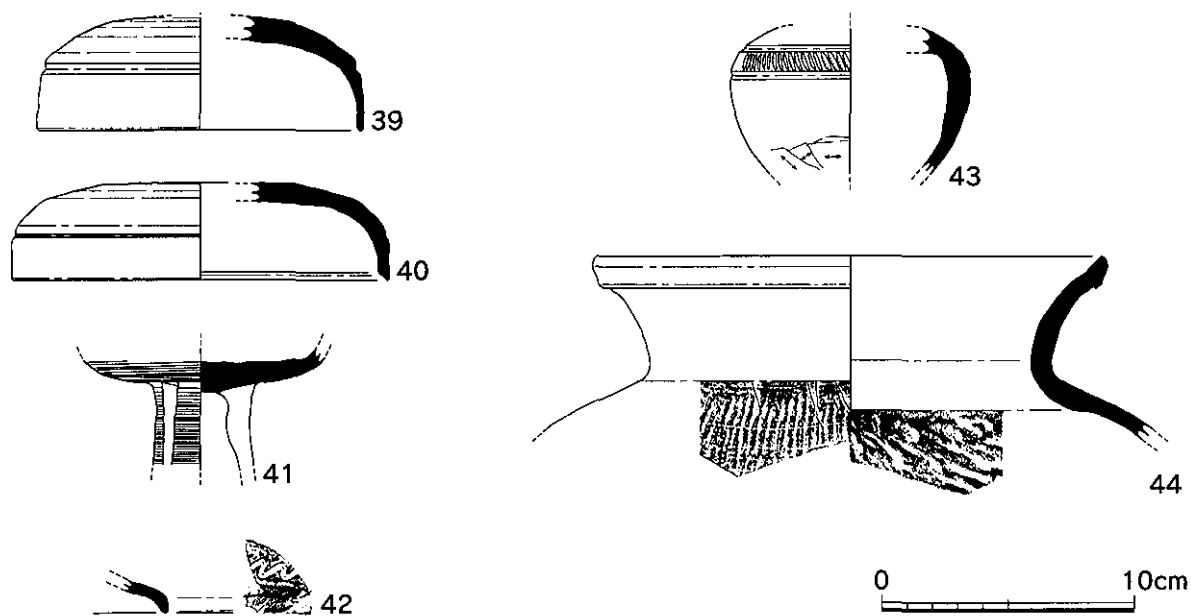
灰原5区 (第10図、図版16)

須恵器 (39～44) 41は3層出土の高杯。脚部の基部は太い。幅の狭い1段透かしが入る。杯部底部は平坦である。杯部底部外面から脚部外面にカキメが入る。

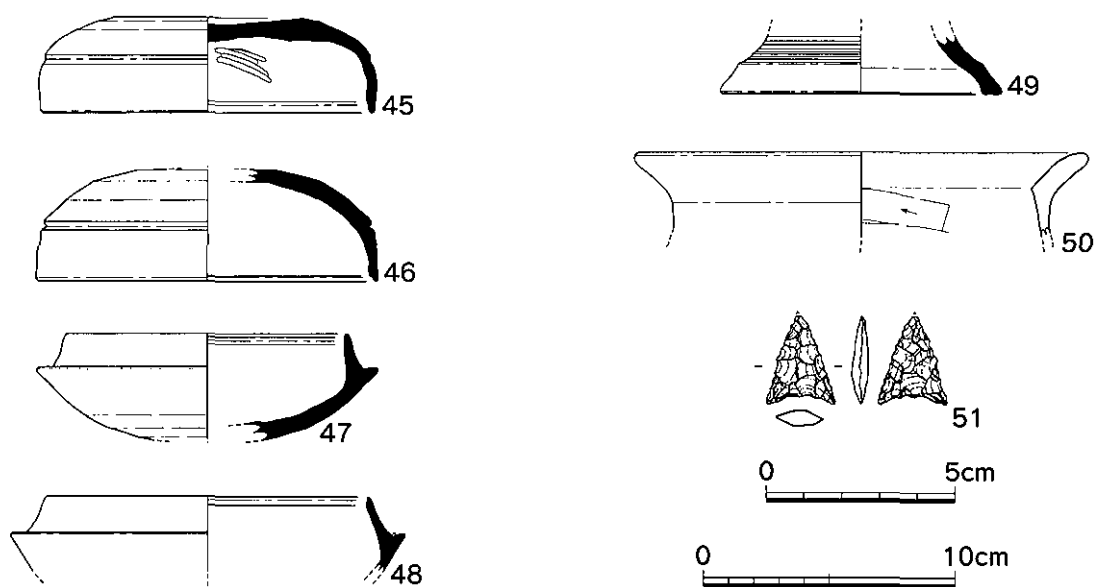
39・40・42・44は4層出土。39・40は杯H蓋。口径13cmと15cm。天井部は浅く平らである。体部は直線的に下がる。口縁端部は、39が丸く仕上げられ、40は内傾する段をなす。天井部外面の1/2にケズリを入れる。器壁が薄く丁寧な作りである。42は高杯脚部か。端部が下方へ短く折れる。裾外面にヘラ描きの波状文が入る。43は臚。体部上位外面に沈線2条施文後、沈線間に連続刺突文を施す。体部下位外面は手持ちヘラケズリ。44は甕。口縁部は大きく外反し、端部外



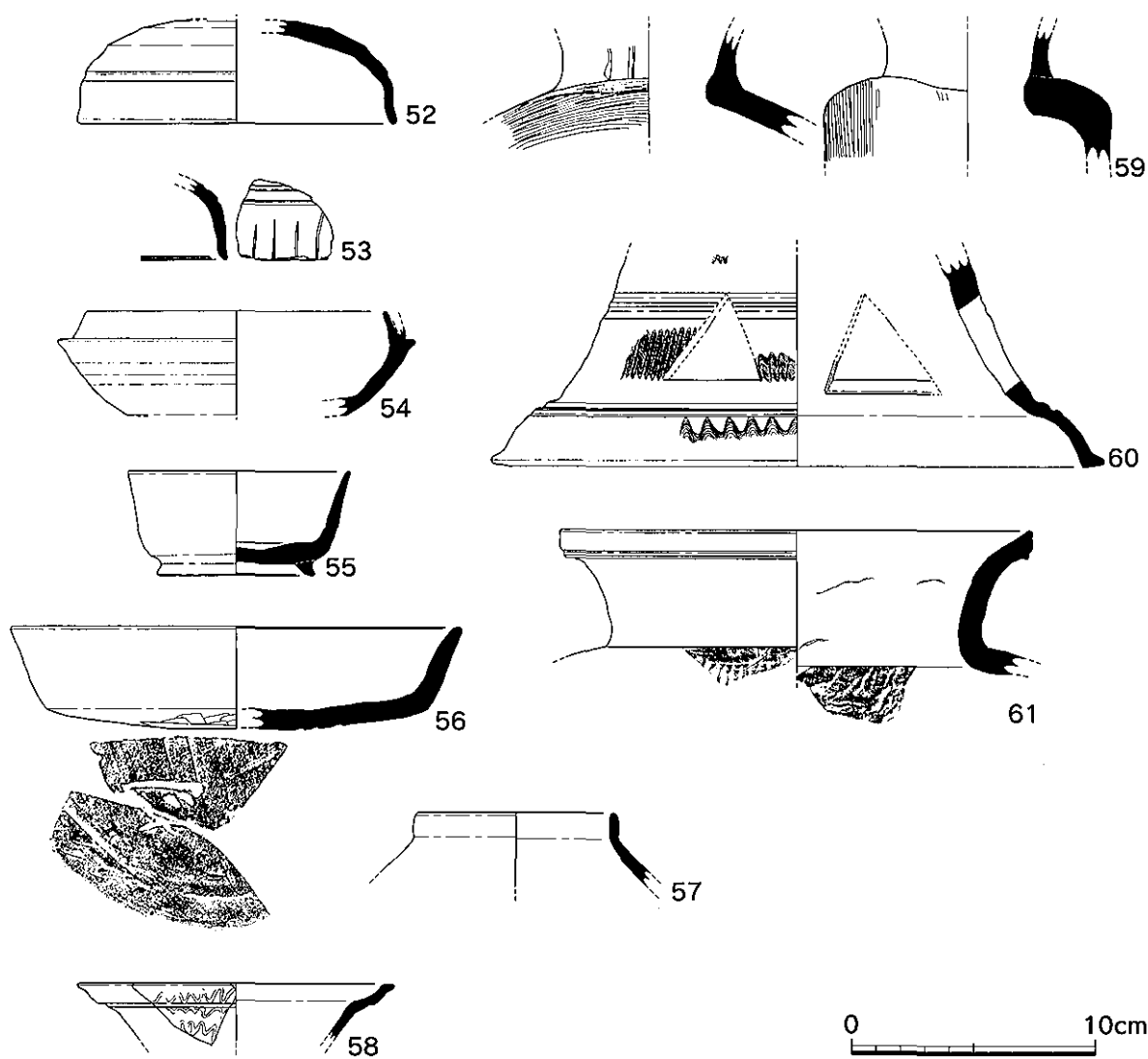
第9図 灰原4区出土遺物実測図② (1/3)



第10図 灰原5区出土遺物実測図 (1/3)



第11図 灰原6区出土遺物実測図 (51は1/2、その他は1/3)



第12図 灰原7区出土遺物実測図(1/3)

面が肥厚する。体部外面に平行タタキ、内面に当て具痕が入る。

灰原6区（第11図、図版16・30）

須恵器（45～49） 45～49は1層出土。45・46は杯H蓋。口径13.2～13.6cm。45は天井部が低く平らで、体部はわずかに内湾しながら下に延びる。口縁端部は非常に浅い段をもつ。内面の一部にヘラナデが入る。46は天井部が比較的高く丸い。体部はまっすぐに下がり、端部に凹線状の内傾する段をもつ。天井部外面1／2にケズリを施し、内面に当て具痕が残る。丁寧な作りである。47・48は杯H。47は口径11.1cm。底部が比較的浅く、立ち上がりはほぼ直立する。口縁端部内面に沈線が巡る。底部外面1／3にケズリを入れる。48は口径12.9cm。立ち上がりは内傾して比較的長く延び、端部に浅い段をもつ。49は高台付壺の高台か。裾に向かって外反し、端部付近でわずかに折れて稜をなす。端部は平坦な面をなす。屈折部より上位の外面にカキメが施される。

土師器（50） 口縁部は頸部で折れて大きく外反する。頸部内面は稜をなす。口縁部と体部外面はヨコナデ、体部内面はヨコ方向のケズリが入る。

石器（51） 2層出土の打製石鏃。凹基式で先端部をわずかに欠損する。

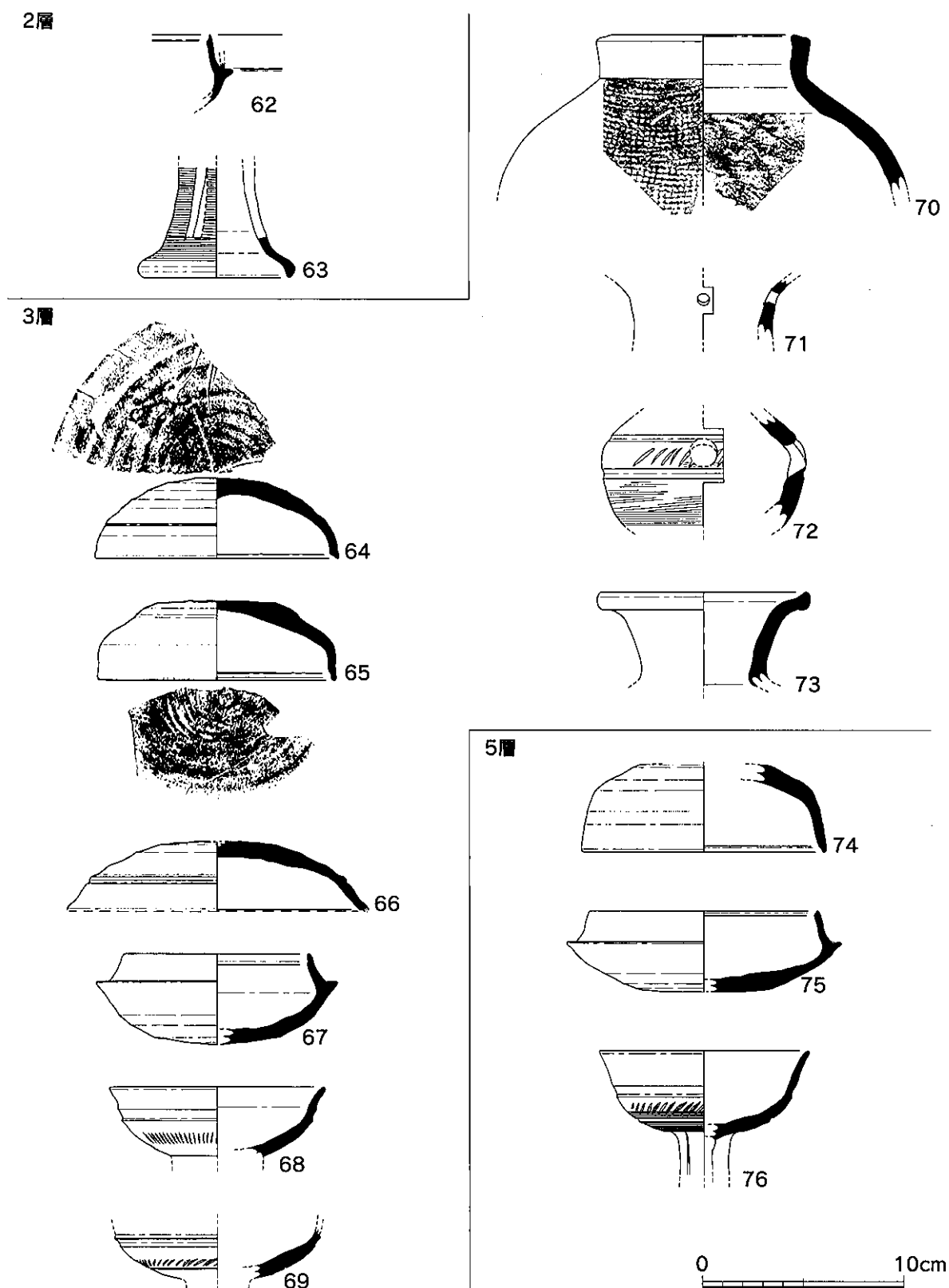
灰原7区（第12図、図版16・17・31）

須恵器（52～61） すべて3層出土。52・53は杯H蓋。52は口径13.1cm。天井部はやや平らで、体部はわずかに外反しながら下がり、端部に沈線が入る。天井部・体部境に沈線を巡らせる。53は天井部・体部境に2条の沈線が入り、体部は内湾気味に下がり、口縁端部は丸い。口縁部外面に縦位の沈線が施される。54は杯H。口径12.4cm。底部は深く、立ち上がりは内傾してやや短い。口縁端部は丸い。55は杯B。口径9.1cm。底部から体部がまっすぐ立ちあがり、口縁部がわずかに外反する。高台は底部のやや内側につく。56は盤。口径18.6cm。底部外面は手持ちヘラケズリが入る。底部外面にヘラ記号あり。文字か？57は短頸壺。口頸部は短く直立し、口縁端部を丸く納める。58は甕。頸部は大きく外反し、口縁部が屈折してさらに外上方へ延びる。端部付近でわずかに外反し、口唇部は面をなす。口縁・頸部境に沈線、口頸部にヘラ描き波状文を施す。59は提瓶。口頸部は回転ナデ、体部外面はカキメが入る。頸部外面に縦に平行するヘラ記号が施される。60は器台。脚部は緩やかに外反しながら広がり、裾付近で屈曲して内湾しながら脚端部へいたる。端部外面は短く外へ折れて、端部は面をなす。脚部下位と屈曲部に沈線2条を施し、間に波状文を施す。屈曲部の上に三角形の透かし窓が入る。61は甕。頸部はやや外反しながら開き、口縁部は大きく外反する。端部は下へ拡張されて面をなし、下位に沈線が巡る。体部外面に平行タタキが入り、内面に当て具痕が残る。

灰原8区（第13図、図版17・18・28・30・31）

須恵器（62～76） 62・63は2層出土。62は杯H。受部はやや内傾して細く長く延び、端部に浅い段を有する。63は高杯。脚部は長脚化している。わずかに外反しながら開き、端部で下方に曲げられる。3方向に透かしを入れる。

64～73は3層出土。64～65は杯H蓋。口径12cm前後。64は天井部が比較的高く丸く、内湾しながら短く体部が延び、口縁端部は内傾する段をなす。天井部・体部境に細い沈線がめぐる。

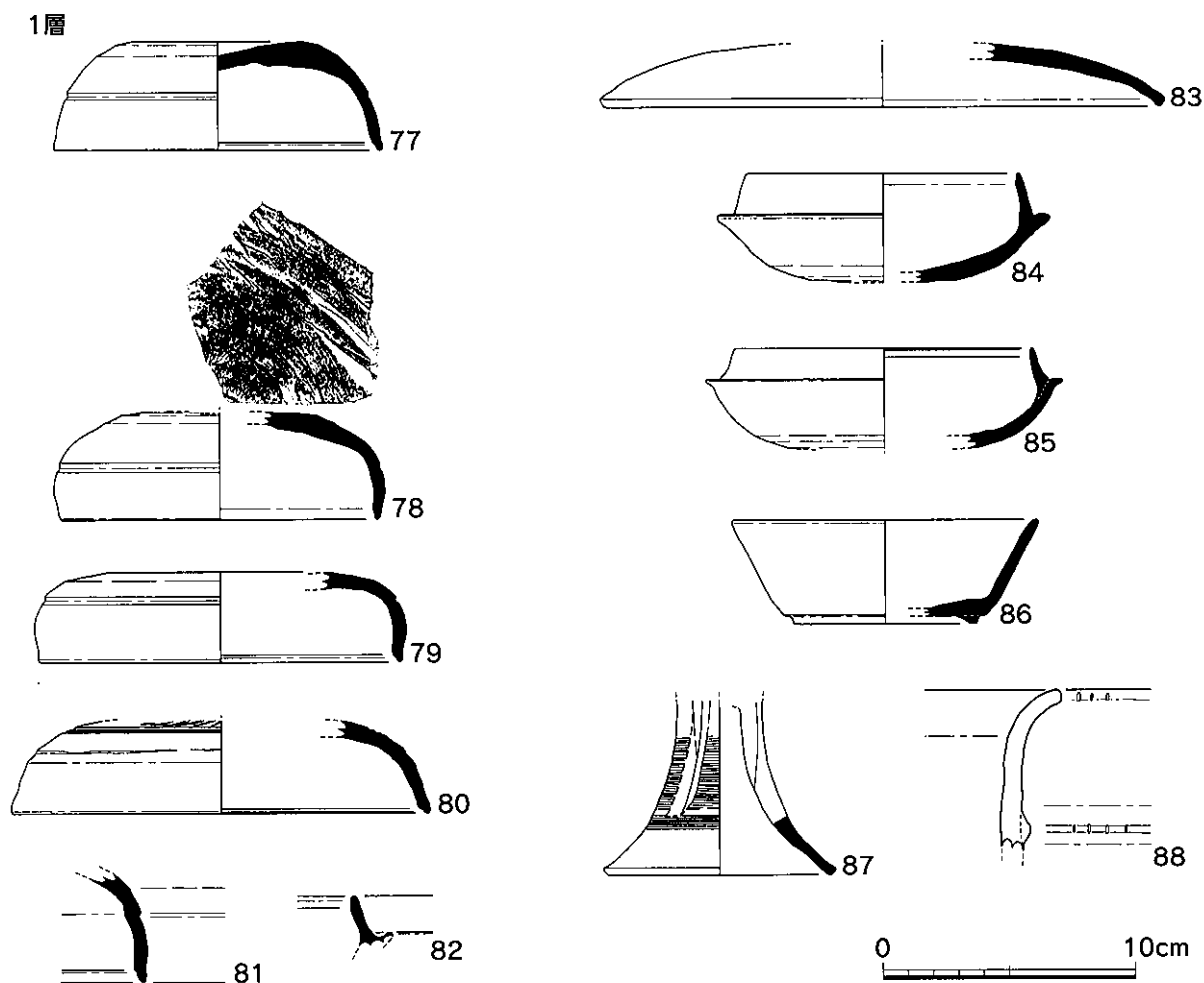


第13図 灰原8区出土遺物実測図(1/3)

天井部外面の2/3にケズリを施し、ヘラ記号を入れる。65は天井部中央が平らで分厚い。体部は直線的に短く延びる。口縁端部に細い沈線を巡らせる。天井部内面に当て具痕が残る。66は天井部が低く、体部はまっすぐ外へ開く。口縁端部に浅い段を巡らせる。天井部・体部境に沈線を

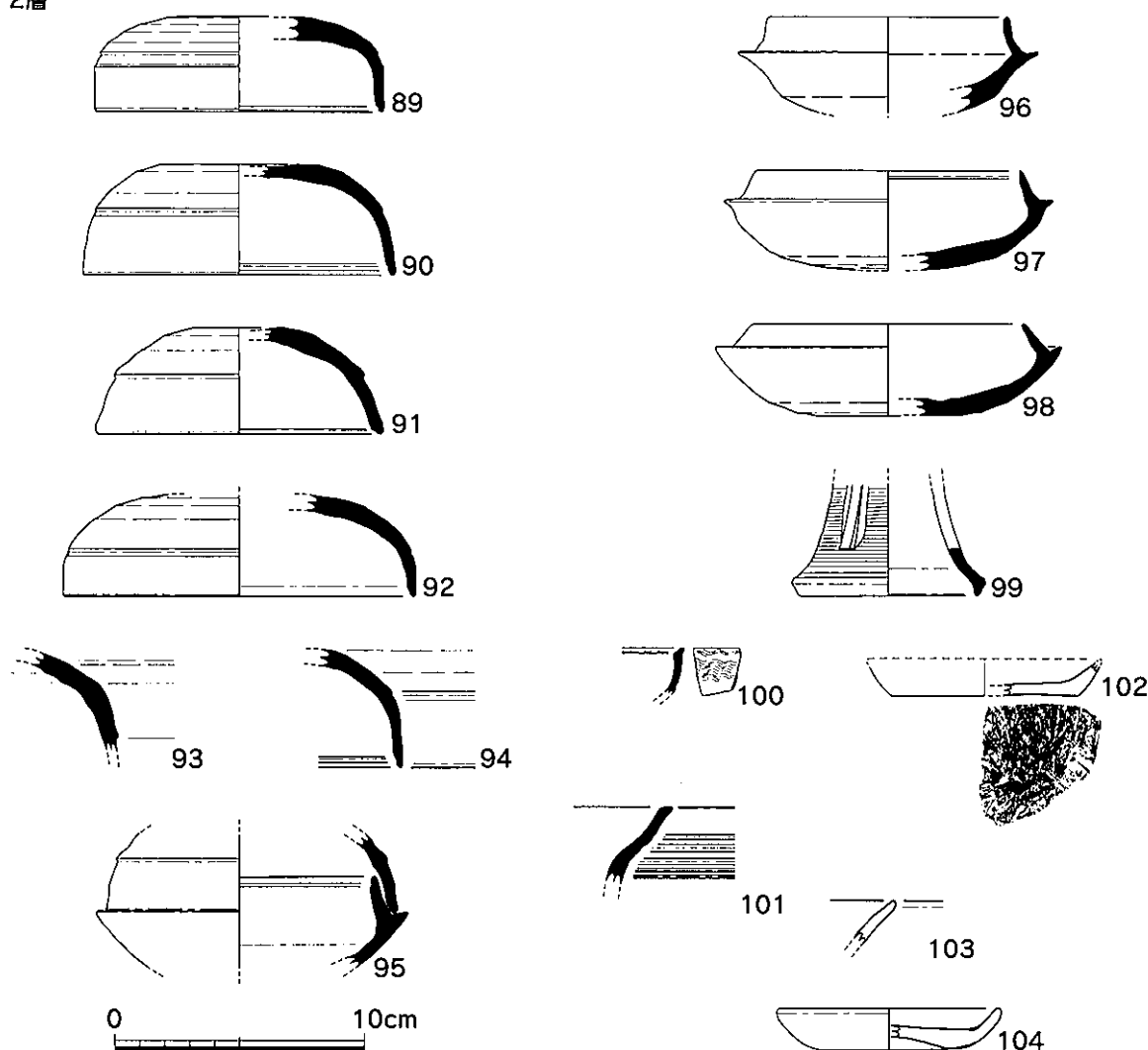
巡らせる。天井部外面 1/2 にケズリが入る。67は杯H。口径9.6cm。底部は深く、立ち上がりは内傾して、わずかに外反しながら立ち上がる。口縁端部に浅い段を有する。底部外面 1/2 にケズリ、内面にシッタ痕が入る。68・69は無蓋高杯。68は体部がわずかに外反しながら開く。底部・体部境に幅の広い沈線を巡らせ、底部外面に連続刺突文を施す。脚基部は太いと推定される。69は底部・体部境に沈線2条が巡らされ、底部下位外面に幅の細い沈線、沈線間に連続刺突文が施される。70は短頸壺。丸い体部から口頸部はわずかに開きながら直立する。口縁端部はわずかに外傾する面をなす。口頸部はナデ、体部は外面格子目タタキの後一部にカキメが入り、内面は当て具痕で上位はナデ消される。71・72は甕。71は口頸部。頸部は比較的太く、口縁部にかけて大きく外反する。頸部中位に穿孔する。72は体部が丸く、中位に沈線2条施文後、沈線間に連続刺突文を施す。体部中位に穿孔する。73は提瓶。頸部はわずかに外反しながら開き、口縁部が屈曲して大きく開く。端部はわずかに上へ延び、丸く仕上げられる。

74～76は5層出土。74は杯H蓋。口径12.1cm。天井部は比較的高く、器壁が分厚い。体部はやや開きながら下がる。口縁端部に浅い段を有する。天井部外面 1/2 にケズリ、内面に同心円当て具痕が見られる。やや粗雑な作りである。75は杯H。口径11.5cm。浅めの底部から、立ち上がりは内傾して立ち上がり、中位でわずかに屈曲する。口縁端部に段を巡らせる。76は高杯。深



第14図 灰原9区出土遺物実測図① (1/3)

2層



第15図 灰原9区出土遺物実測図② (1/3)

い杯底部から、体部はわずかに外反しながら開く。底部・体部境と底部中位にそれぞれ沈線1条を施す。さらに底部上位に連続刺突文が施される。脚部は基部が細くやや長脚で、3方向に1段透かしを入れる。

灰原9区 (第14～17図、図版18～21・28～31)

須恵器 (77～87、89～101、105～146) 77～87は1層出土。77～81は杯H蓋。77・78は口径12.6～13.0cmで、天井部が高く、天井部・体部境に沈線を入れる。口縁端部に浅い段を巡らせる。77は体部が外に開きながら直線的に下がり、天井部外面1/2にケズリ、内面に同心円当て具痕が残る。78は体部が内湾しながら下がり、天井部外面にへラ記号を入れる。79・80は口径14.4～16.6cm、天井部が低く平らで、天井部・体部境に沈線を入れる。口縁端部に非常に浅い段、沈線を巡らせる。79は体部が内湾しながら下がる。天井部外面の1/3にケズリを入れる。口縁端部に内傾する段を有する。80は体部がやや外に開く。天井部外面に連続刺突文が施される。口縁端部に段を巡らせる。81は体部が内湾しながら下がり、口縁端部に段を巡らせる。天井部・体部境に沈線を入れる。83は杯B蓋。口径22.4cm、口縁端部がわずかに折れる。82・84・85は杯H。84・85は口径11.0～12.0cm。82は立ち上がりが内傾して短く延びる。端部に浅い段を入

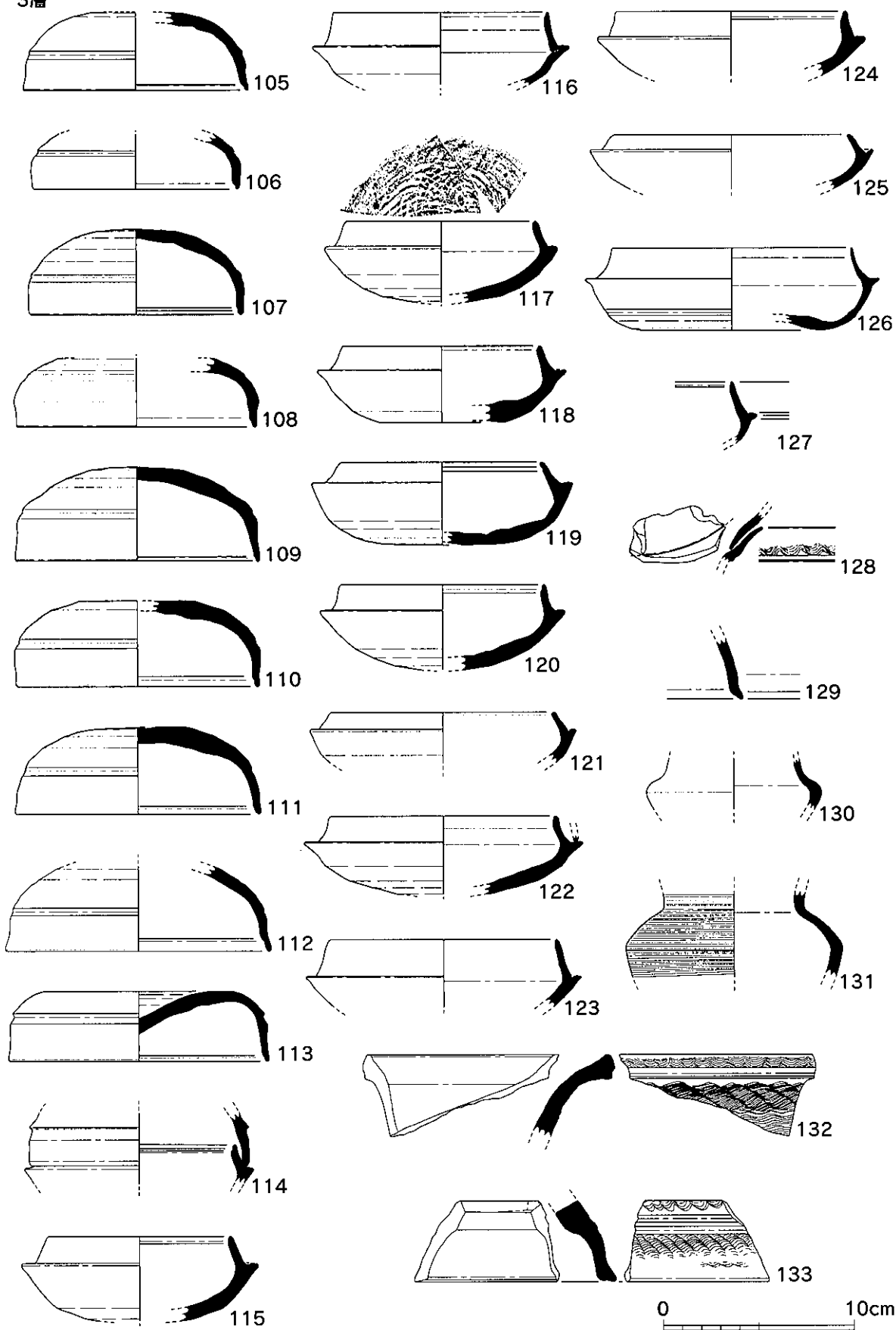
れる。84は深い底部から立ち上がりが直立気味に長く延びる。口縁端部に非常に浅い段を入れる。天井部外面の1/3にケズリを施す。85は底部が深く丸みをもつ。立ち上がりはわずかに外反しながら延びる。口縁端部に段あり。底部外面の1/3にケズリを入れ、内面に同心円当て具が残る。86は杯B。口径12.2cm。体部はまっすぐに外へ開く。高台は低く底端部よりやや内側につく。87は高杯。脚部は長脚化しており、裾が緩やかに外反する。外面はカキメ。3方向に1段透かしを施す。

89～101は2層出土。89～94は杯H蓋。89～91は口径11.6～12.6cm。天井部は高く、比較的平らである。89・90は天井部・体部境に沈線を巡らせ、体部は長めで、口縁端部に沈線を施す。天井部外面の2/3以上にケズリを入れる。91は天井部・体部境に段がつき、体部は外に開いて長い。口縁端部に段を巡らせる。92は口径14.2cm、天井部は低い。体部は内湾しながら短く下がり、口縁端部を丸く仕上げる。天井部外面の1/2にケズリが入る。94は天井部が比較的高く、体部はまっすぐ長めに下がり、口縁端部に沈線を入れる。天井部・体部境に沈線を巡らせる。天井部外面にケズリを施し、内面に当て具痕が残る。95は杯H蓋・身の釉着資料。蓋は体部がやや内湾しながら外へ開いて下がる。天井部・体部境に段をもつ。口縁端部に沈線あり。身は比較的深い底部から、立ち上がりはやや外反しながら直立気味に立ち上がる。口縁端部に沈線を入れる。96～98は杯H。口径9.7～11.0cm。96は立ち上がりが内傾して、外反しながら上へ延び、端部は丸い。97は底部が深く、立ち上がりは内傾して上へ延び、口縁端部に浅い段をもつ。98は底部が浅めで、立ち上がりは強く内傾して短い。口縁端部は丸い。99は高杯。脚部は比較的太く、裾にかけて緩やかに外反する。脚端部が下方内側へ短く折れ、稜をなす。3方向に透かしを入れる。100・101は甕。100は口縁部が内湾し、端部が短く外へ折れる。外面に波状文が施される。101は大きく外反する頸部から口縁部が上方へ折れる。端部は平坦な面をなす。頸部外面に5条の沈線が施される。

105～133は3層出土。105～113は杯H蓋。105～107は口径10.8～11.8cm。天井部は高く丸みをもつ。体部は直線的に下がる。天井部・体部境に沈線を巡らせる。口縁端部に105・106は浅い段、107は沈線を入れる。天井部外面の広い範囲にケズリを入れる。108～112は口径12.6～12.8cm。天井部は高く丸みをもつ。体部はわずかに外反するもの、直線的に下がるものがある。108は天井部・体部境は折れて稜がつく。109～112は天井部・体部境に沈線を入れ、口縁端部に段を有する。112は天井部内面にシッタ痕が残る。113は口径13.6cm。天井部は焼き歪んで窪む。体部は直線的に延び、比較的長い。口縁端部に浅い段をもつ。天井部・体部境に沈線を巡らせる。

114は杯Hの蓋身釉着資料である。蓋は口径11.5cm。体部はわずかに内湾しながら長く延びる。天井部・体部境には明瞭な段をもつ。身は立ち上がりがやや内傾して短く上に延びる。口縁端部に沈線を巡らせる。115～126は杯H。115・117～120は口径9.7～10.8cm。底部は比較的深く丸みをもつ。立ち上がりは内傾して直線的に延びるもの（115・117～119）とやや外反しながら延びるもの（120）がある。口縁端部は浅い段を巡らせるもの（115・120）、沈線を施すもの（119）、丸く仕上げるもの（117・118）がある。120は底部内面にシッタ痕、119は底部内縁に粘土紐巻き上げ痕跡が明瞭に残る。118は底部が分厚くやや粗雑な作りである。116・121～126

3層



第16図 灰原9区出土遺物実測図③ (1/3)

は口径11.4～12.5cm。底部は平坦である。立ち上がりが高く丁寧な作りのもの（116・123・126）と、立ち上がりが低めで、内湾あるいは外反しながら延びるもの（121・122・124・125）がある。口縁端部は116・124に浅い段がつき、その他は丸く仕上げられる。126の底部外面には沈線が1条施される。122は底部内面に同心円当て具痕が残る。128は臙。口縁部外面に波状文、口頸部境の屈折部に沈線を施す。口縁部内面に別個体が釉着。129は壺蓋か。口縁端部は外側へ短く折れて、端部は内傾する面をもつ。130・131は短頸壺。体部は肩が張って稜をなす。130は外面にナデ、131は外面にカキメが入る。132は甕。口縁部は端部付近で強く屈曲し、端部は上方へ肥厚する。口唇部の下位に幅広い沈線を施し、中位以上に波状文を施す。口縁部にも波状文が施される。133は器台。脚部は裾部付近で強く内湾して直立気味に踏ん張る。端部は外側へ肥厚して広い面をなす。屈曲部外面に沈線2条、その上下に波状文が施される。

134～146は5層出土。134・135は杯H蓋。134は口径12.4cm。天井部は高く丸みをもつ。体部はわずかに外反しながら下がる。口縁端部に内傾する段を有する。天井部・体部境に幅の細い沈線をつける。135は、口径15.6cm。天井部は焼き歪んで窪む。体部は長く延び、口縁端部に浅い段がつく。天井部・体部境に沈線が巡る。丁寧な作りである。136は杯Hの蓋身の軸着資料である。蓋は低くやや平らで、体部は外下方へ長く延びる。口縁端部に浅い段がつく。身は底部がやや浅く、立ち上がりは外反しながら短く延びる。口縁端部は丸く仕上げられる。底部外面2／3にケズリを入れる。137は高杯蓋。天井部中央に中心が窪むつまみが付けられる。天井部内面に同心円当て具痕が残る。138～142は杯H。138～140は口径9.4cm～11.2cm。底部は深く丸みをもつ。138は立ち上がりがやや外反しながら延び、口縁端部は先細りとなる。底部内面に同心円当て具の痕跡を残す。139は立ち上がりが内傾して短く延び、口縁端部に浅い段を巡らせる。底部外面1／3にケズリを入れる。140は立ち上がりが内傾して短く延びる。口縁端部は丸く仕上げられる。底部外面2／3にケズリ、内面にシッタ痕を残す。141は口径12.8cm。底部は浅く平らである。立ち上がりは内傾して短く延びる。口縁端部は丸く仕上げられる。底部外面1／3にケズリ、内面に同心円当て具の痕跡が残る。底部外面にヘラ記号を入れる。142は口径9.8cm。天井部は低く平らで、かえりは非常に短い。天井部外面はヘラ切り後ナデである。143は椀か。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚して口唇部が平坦な面をもつ。口縁部外面に波状文が施される。144は高杯。底部は比較的深く平らに近い。体部は直立気味に開き、杯部が角張る。底部に連続刺突文、体部下位に沈線2条を施す。脚部は基部が細く長脚化している。3方向に透かしを施す。145は高杯蓋か。天井部は低く、体部境で強く屈折して稜をなす。体部は直立気味に開きながら下がる。口縁端部は丸く仕上げられる。146は壺。頸部は太く、口頸部が直線的に開く。体部は最大径を中位にもつ球形をなす。体部外面中位以下にカキメが入る。頸部外面に波状文、体部外面中位に沈線を2条配し、沈線間に連続刺突文を施す。

弥生土器（88） 1層出土。甕。口縁部は緩やかに外反する。口縁端部下端に細い刻みを施す。頸部からやや下がった位置に断面三角形の突帯が貼り付けられ、細い刻みが施される。調整不明。

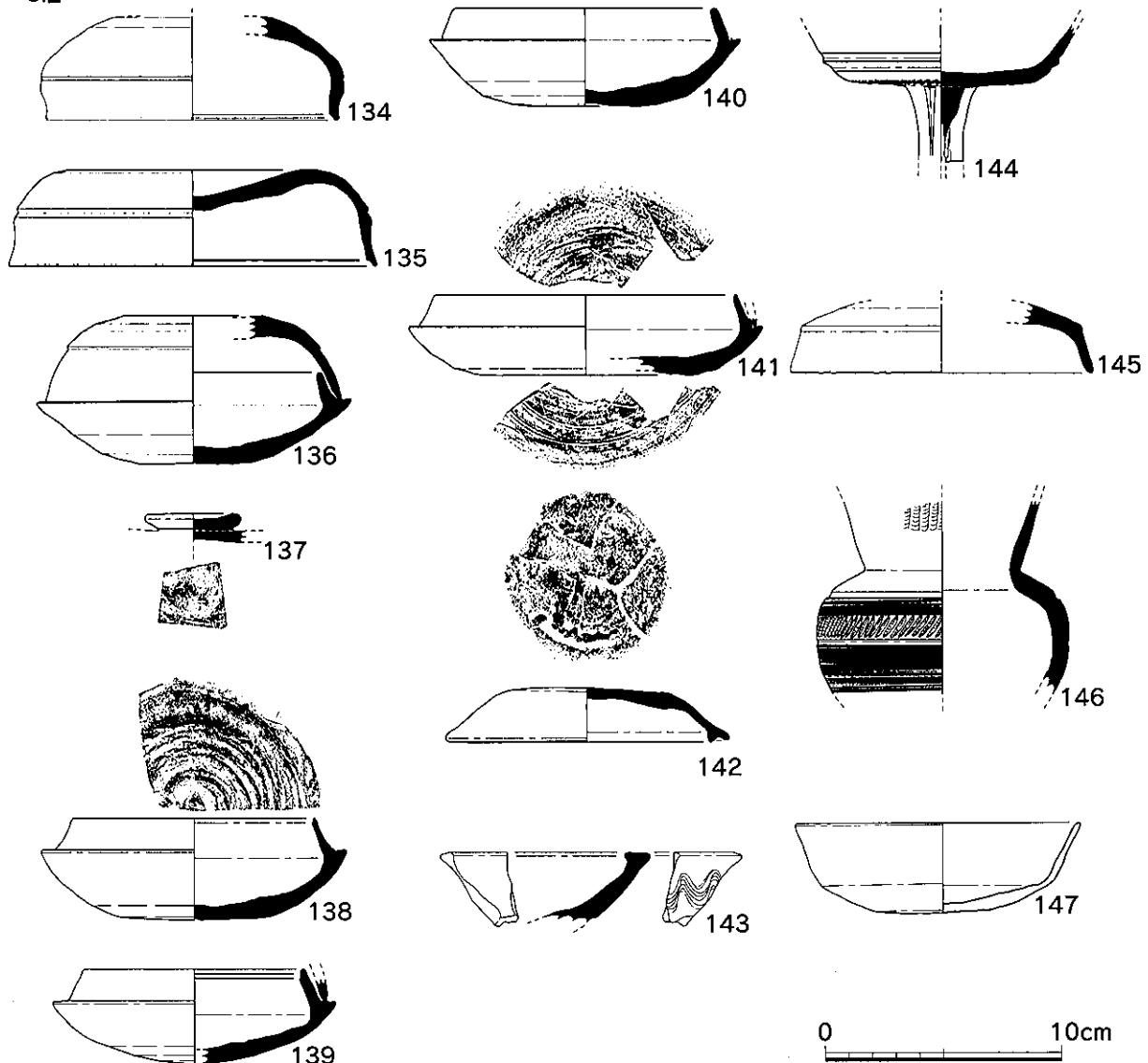
土師器（102・147） 102は1層出土。小皿で、底部糸切り。底径7.5cm。147は5層出土。杯で、口径12cm、器高3.8cm。底部は丸みをもつ。

白磁(103・104) 2層出土。103は椀。施釉後、口唇部の釉を剥ぎ取り口禿げとする。太宰府陶磁器分類白磁椀Ⅸ類か。104は皿。口縁は直口で、体部は緩やかに屈曲する。底部は平底。太宰府陶磁器分類白磁皿Ⅶ類か。

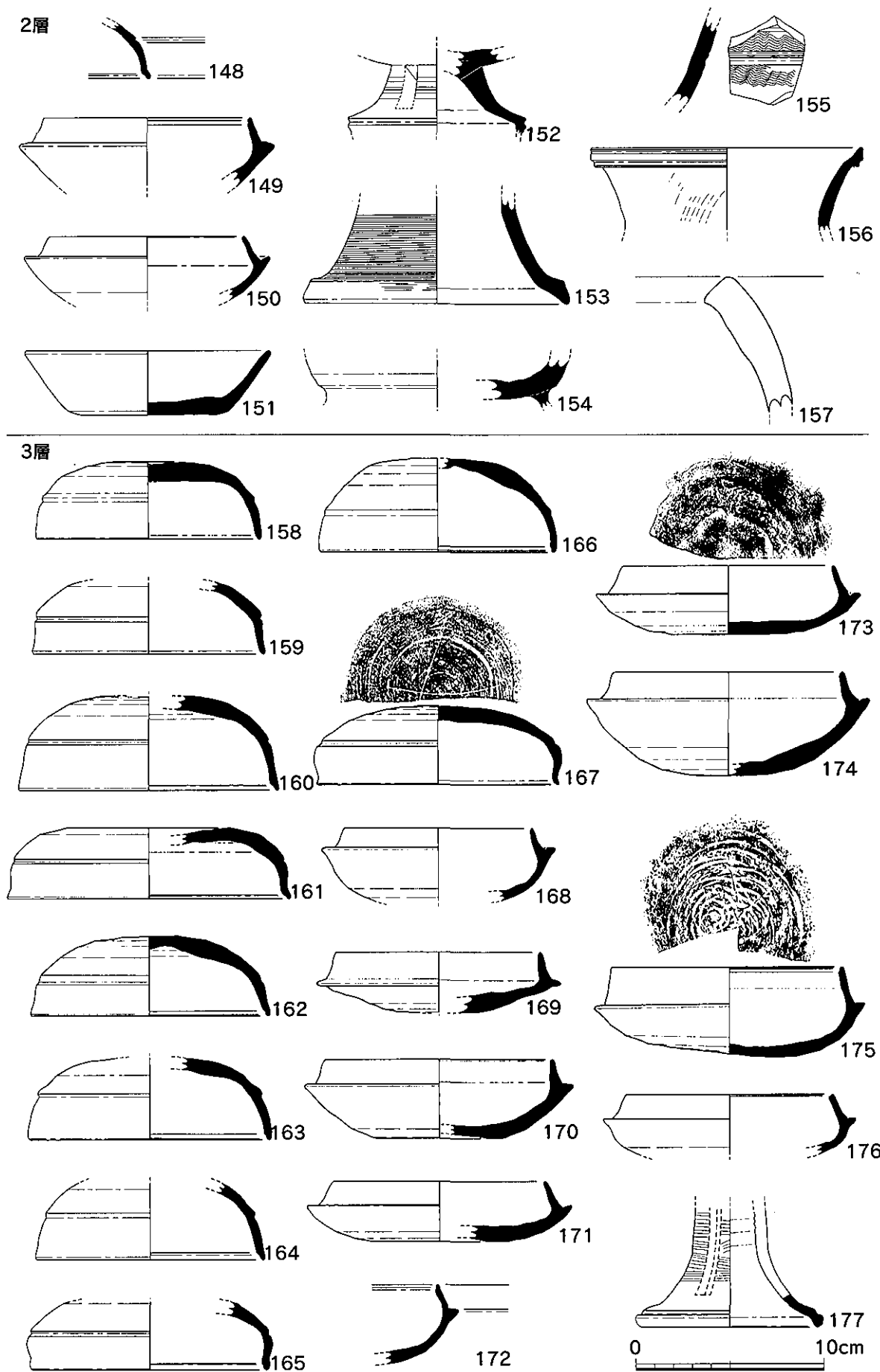
灰原10区(第18・19図、図版21～23・29～31)

須恵器(148～156・158～192) 148～156は、2層出土。148は杯H蓋。体部は内湾しながら下がる。口縁端部に浅い段を有し内傾する面をもつ。天井部・体部境に沈線を巡らせる。149・150は杯H。立ち上がりは内傾して直線的に延びる。149は口縁端部に沈線を巡らせる。151は杯。底部から体部が直線的に開く。底部外面はヘラ切り後ナデ。152・153は高杯脚部。152は基部が太く短脚で、緩やかに外反しながら開き、裾部で下方内側へ鋭く折れる。屈折部に沈線を1条施す。長方形の透かしを入れる。他の高杯に比べ、古い型的特徴をもつ。153は脚部が緩やかに大きく開き、端部が短く外下方へ折れて稜をなす。脚部外面にカキメを入れる。154は壺か。底部から屈曲して丸みを持ちながら体部が立ち上がる。底部に外側へ踏ん張る高台が付けら

5層



第17図 灰原9区出土遺物実測図④(1/3)

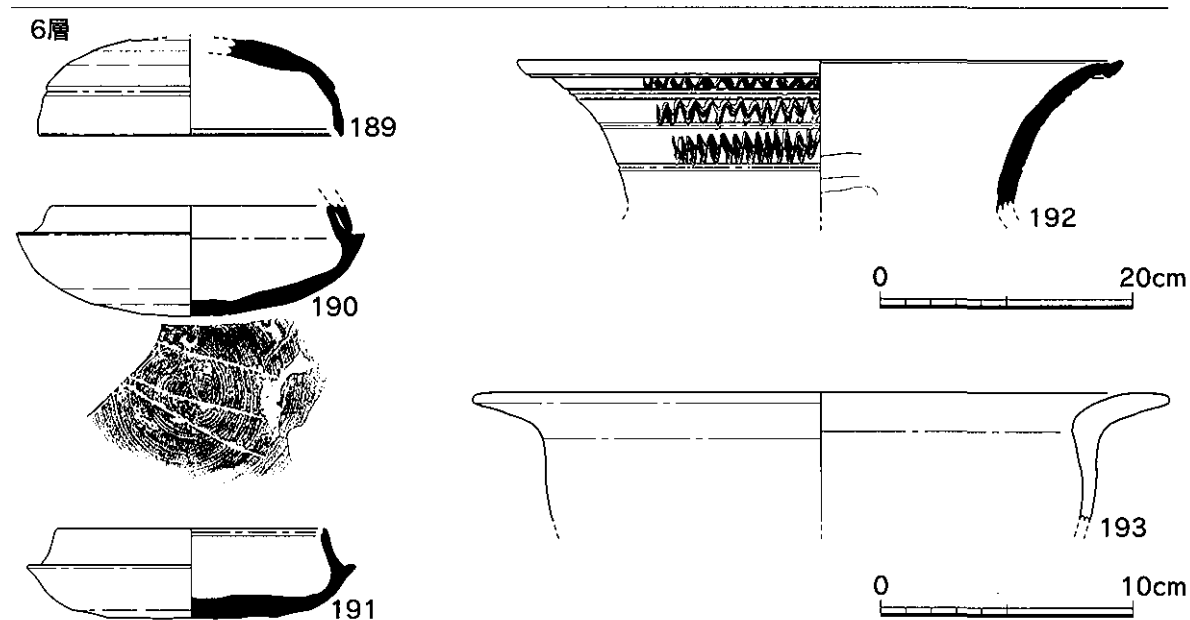
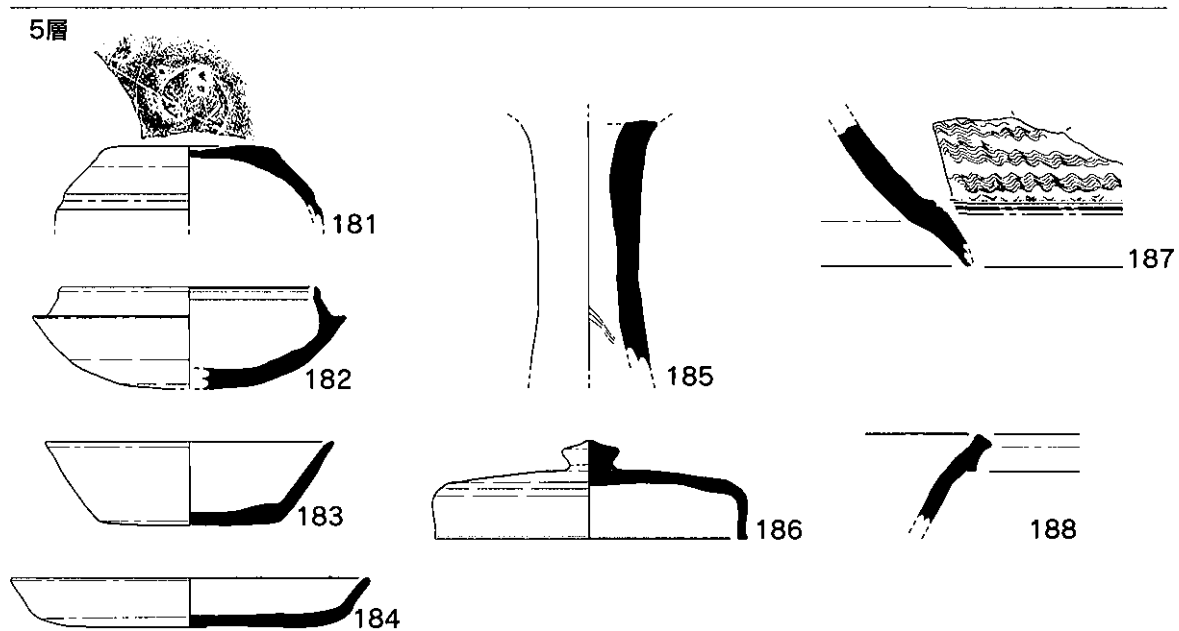
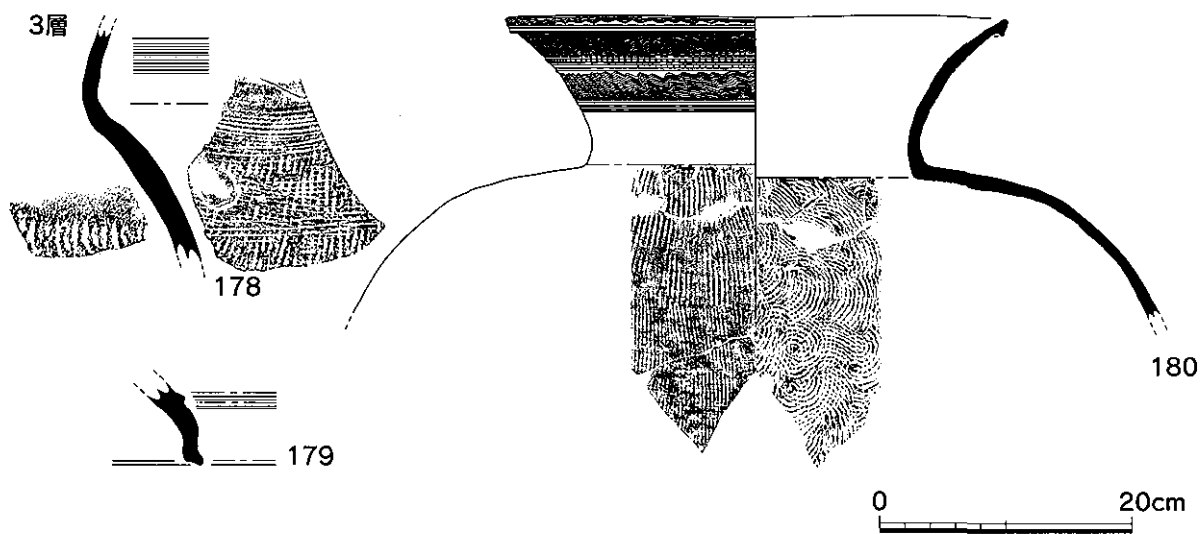


第18図 灰原10区出土遺物実測図① (1/3)

れる。155は器台の台部か。外面に波状文の後2条の沈線が施される。156は甕。口縁部は緩やかに外反し、端部外面に断面三角形の粘土紐を貼り付けて肥厚させる。端部外面の上下端に沈線を1条ずつ施す。

158～180は3層出土。158～167は杯H蓋。158・163・164・166は口径12.0～12.9cm。天井部は高く丸みをもつ。天井部・体部境に段を有する。体部はやや内湾しながら比較的長く延びる。口縁端部は沈線を巡らせるものと丸く仕上げるものがある。166は天井部内面に同心円当て具痕が残る。159・162・165・167は口径12.4～12.9cm。天井部が比較的高く丸みをもつ。天井部・体部境に沈線を入れる。体部はわずかに外反して、若干外側に開きながら下がる。口縁端部は浅い沈線を入れるものと丸く仕上げるものがある。162は内面にシッタ痕がみられる。167の天井部外面にはヘラ記号が入る。160・161は口径が大きい(14.0～15.1cm)。160は天井部が高く丸みをもつ。体部はわずかに外に開きながら直線的に長く延び、口縁端部に浅い段を入れる。丁寧な作りである。161は天井部が低く、天井部・体部境に沈線を巡らせる。体部は外反しながら下へ延びる。口縁端部に浅い段をつける。天井部内面に同心円当て具痕が残る。168～176は杯H。175は口径12.3cm。底部は深く丸みをもつ。立ち上がりは高く直立気味に延びる。口縁端部に沈線が入り、内傾する面をなす。底部外面の2/3にケズリが入り、内面には明瞭に同心円当て具痕が残る。丁寧な作りである。169・171・173は口径11cm強。底部は浅く平坦で、立ち上がりはやや内傾して短く延びる。口縁端部は丸く仕上げられる。内面にはシッタ痕が入るもの(173)がある。168・170・174は口径10～12cm強。底部は比較的深く、立ち上がりはやや外反して立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。底部外面1/3にケズリが入る。器壁が分厚く全体的に粗雑な作りである。172・176は底部が深く、立ち上がりは内傾する。口縁端部に段を有し、176は内傾する面をなす。器壁が薄く丁寧な作りである。177は高杯。脚部は細くて長脚化しており、裾に向かって大きく外反する。端部はわずかに下方へ折り曲げられ、屈曲部のやや上に沈線を施す。幅の狭い透かしが3方向に開けられる。178は壺か。胴部は肩が張らない。頸部から肩部までカキメが入る。179は脚付壺か。脚部は強く屈曲して踏ん張る。屈曲部に沈線2条が施される。180は甕。口頸部は大きく外反し、端部外面が下方へ延び面をなす。端部外面に波状文を施す。口縁部外面の中位と下位に沈線を3条ずつ施文後、間に波状文を施し、最後に中位の沈線文帯に連続刺突文を施す。体部外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕が残る。

181～188は5層出土。181は杯H蓋。天井部は高く、頂部が平坦になる。天井部・体部境に沈線を入れる。天井部外面の2/3にケズリを施し、ヘラ記号が入る。182は杯H。口径10.1cm、底部は比較的深く、立ち上がりは短く、端部付近で短く折れる。端部に沈線を巡らせる。底部外面2/3にケズリを入れる。183は杯。口径11.4cm、体部は直線的に開く。底部外面はヘラ切り後ナデ。184は皿。口径14.3cm、体部が直線的に短く開く。底部外面はヘラ切り後ナデ。185は高杯。杯部は盤状となる。186は短頸壺蓋。体部は直線的に屈折し、端部は面をなす。天井部外面3/4にケズリを施した後、宝珠形つまみを貼り付ける。188は長頸壺か。口縁部はわずかに外反して開く。端部外面に帯状の突帯が貼り付けられる。187は器台脚部。外面に波状文と沈線2条を施す。



第19図 灰原10区出土遺物実測図② (180・192は1/6、その他は1/3)

189～192は6層出土。189は杯H蓋。口径12.0cm、天井部は比較的低く、体部は若干内湾しながら下がる。口縁端部に非常に浅い段がつく。190・191は杯H。口径11.0・10.7cm。190は底部が深く丸い。立ち上がりは内傾して外反しながら延びる。口縁端部は丸く仕上げられる。底部外面にヘラ記号が入る。受部に杯蓋口縁部が釉着。191は底部が浅く平らで、立ち上がりは内傾して、口縁端部に段を巡らせる。192は甕。頸部は大きく開いて口縁端部は上下に肥厚させる。頸部外面に沈線を巡らせ、波状文を3段施す。

土師器（193） 6層出土。甕である。口縁部が強く屈曲する。体部内面にケズリが施される。

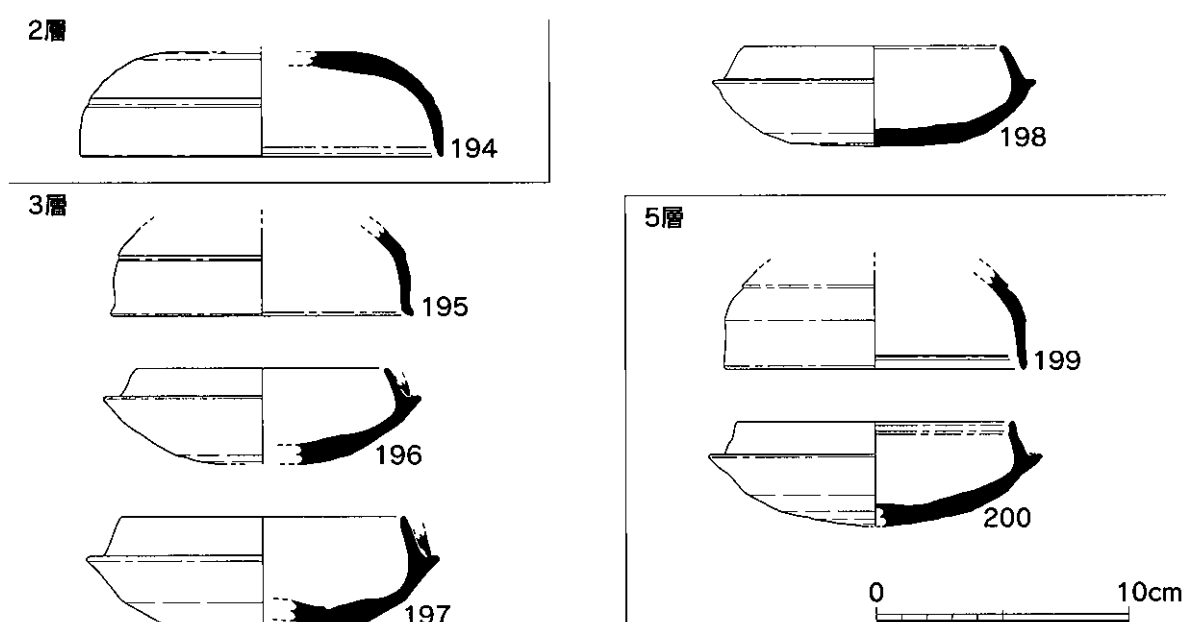
瓦質土器（157） 2層出土。鉢である。口縁部内面ヨコナデ、体部内面ナデである。

各ベルト出土（第20図、図版23）

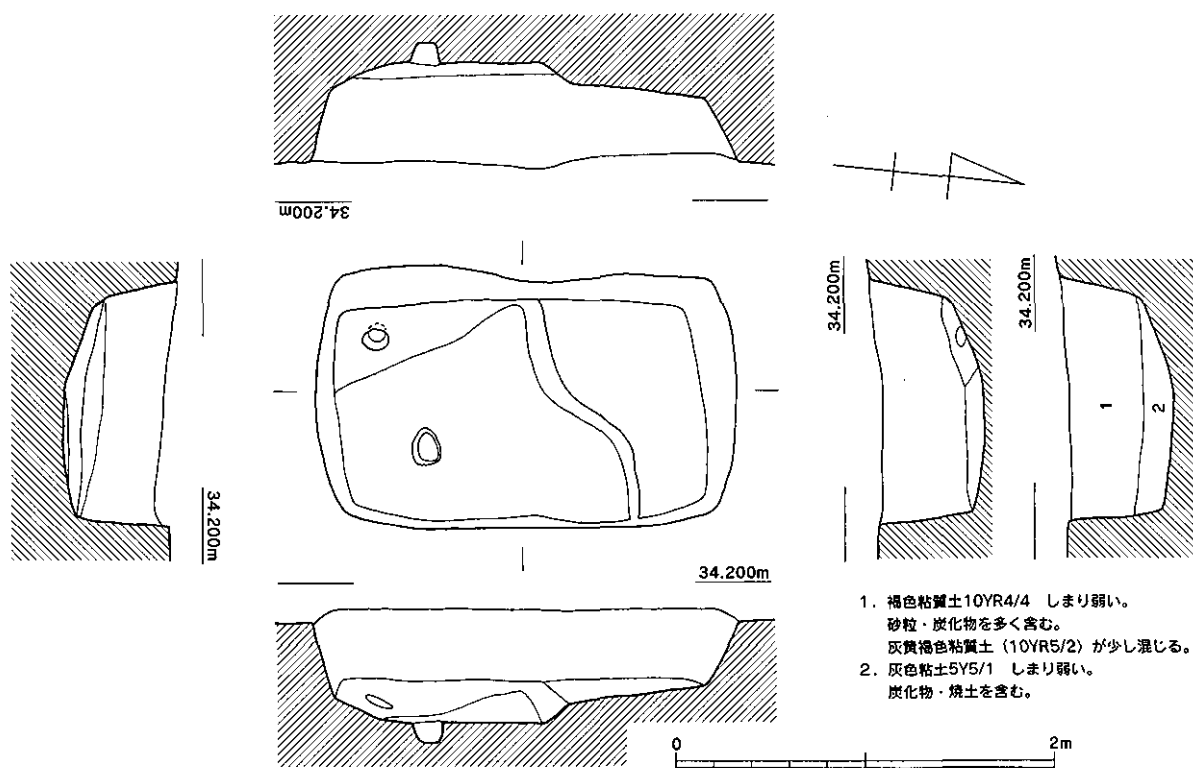
須恵器（194～200） 194は5・9区間ベルト2層出土。杯H蓋。口径14.4cm、天井部は低く平らで、体部はやや丸みをもって下がる。口縁端部に浅い段あり。天井部・体部境に沈線を入れる。

195・196は5・9区間ベルト3層、197は5・9－6・10区間ベルト3層、198は4・8－5・9区間ベルト3層出土。195は杯H蓋。口径12.0cm、体部はやや丸みをもちながら下がり、端部が短く外反する。天井部・体部境に沈線を巡らせる。196～198は杯H。196・198は口径10.0～10.2cm、底部は比較的浅く、立ち上がりはやや内湾し、端部は丸い。196は、受部に杯蓋口縁部が釉着しており、端部は浅い段を有する。197は口径11.2cm、底部は比較的深く、一部が平らになる。立ち上がりは内傾して長く延び、端部は丸い。受部に杯蓋口縁部が釉着しており、端部に浅い段がつく。

199・200は5・9－6・10区間ベルト5層出土。199は杯H蓋で、口径11.9cm。天井部が高く、体部は天井部に連続して外下方へ延びたあと、下方へ折れて長く延びる。天井部・体部境に



第20図 灰原各ベルト出土遺物実測図（1/3）



第21図 土坑 (SX02) 実測図 (1/40)

非常に低い段がつく。200は杯Hで、口径11.0cm。底部は浅くなり、立ち上がりは、やや内傾して短く延び、端部付近でわずかに折れて直立する。端部に非常に浅い段がつく。

(2) 土坑 (SX02) (第21図、図版6)

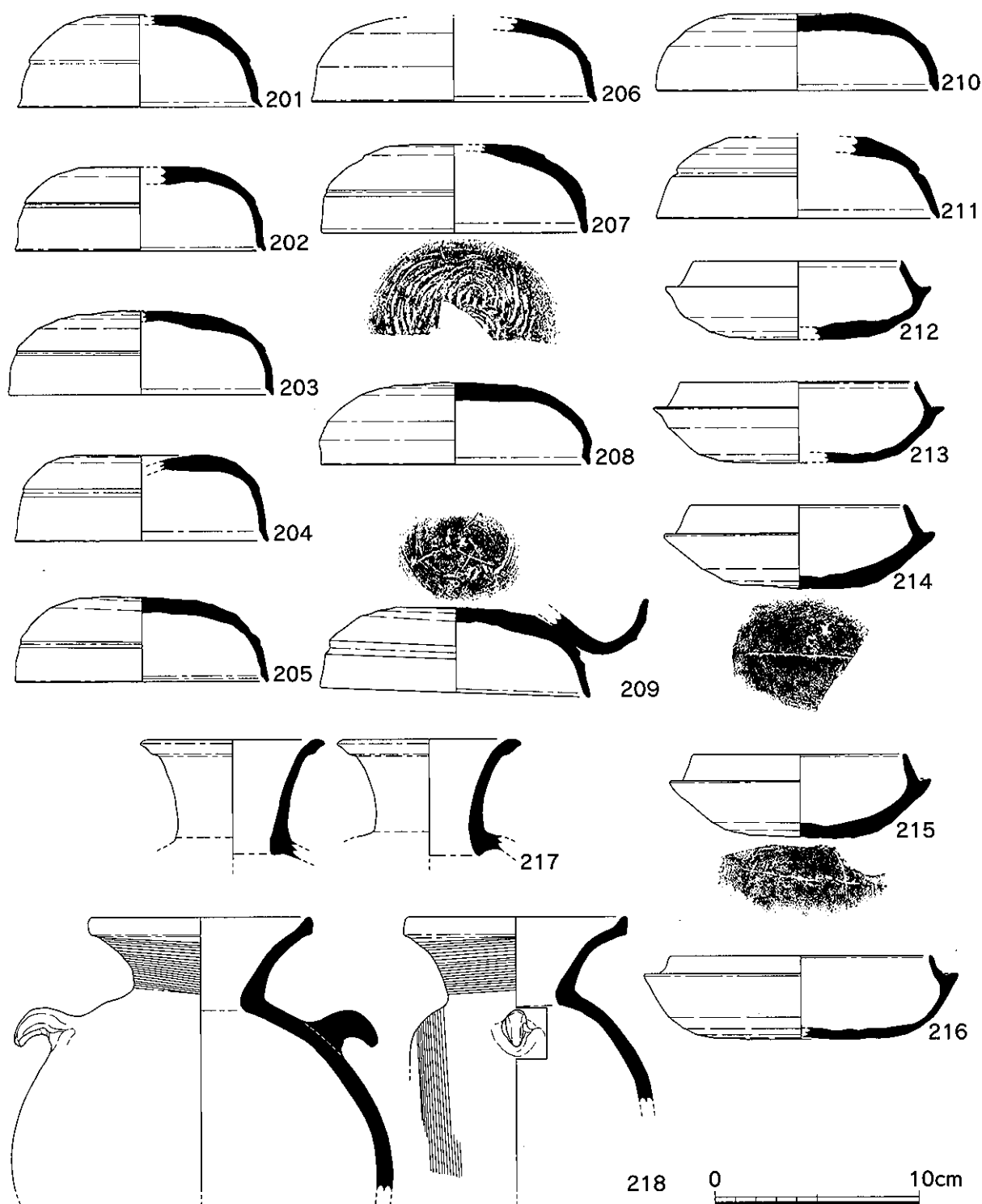
灰原最下層の10区6層をほぼ除去した段階で検出した遺構である。6層と土坑埋土上層は非常に似ており、層界は明らかではなかった。平面形は南北に長軸をもつ2.3m×1.4mの長方形を呈す。検出面からの深さは約50cmを測る。床面には灰色粘土が10cmほどの厚さで堆積していた。粘土には砂粒や炭が混じり、精錬されたものではなかった。また粘土の上には、破損あるいは焼き歪んだ須恵器の杯・甕類が多量に出土した。これらのことから、土坑は当初、本堂遺跡1次調査等で確認されている粘土廃棄土坑として使用され、その後、須恵器焼成時の失敗品・破損品を廃棄した土坑として機能したものと推定したい。

出土遺物 (第22・23図、図版23～26・29～31)

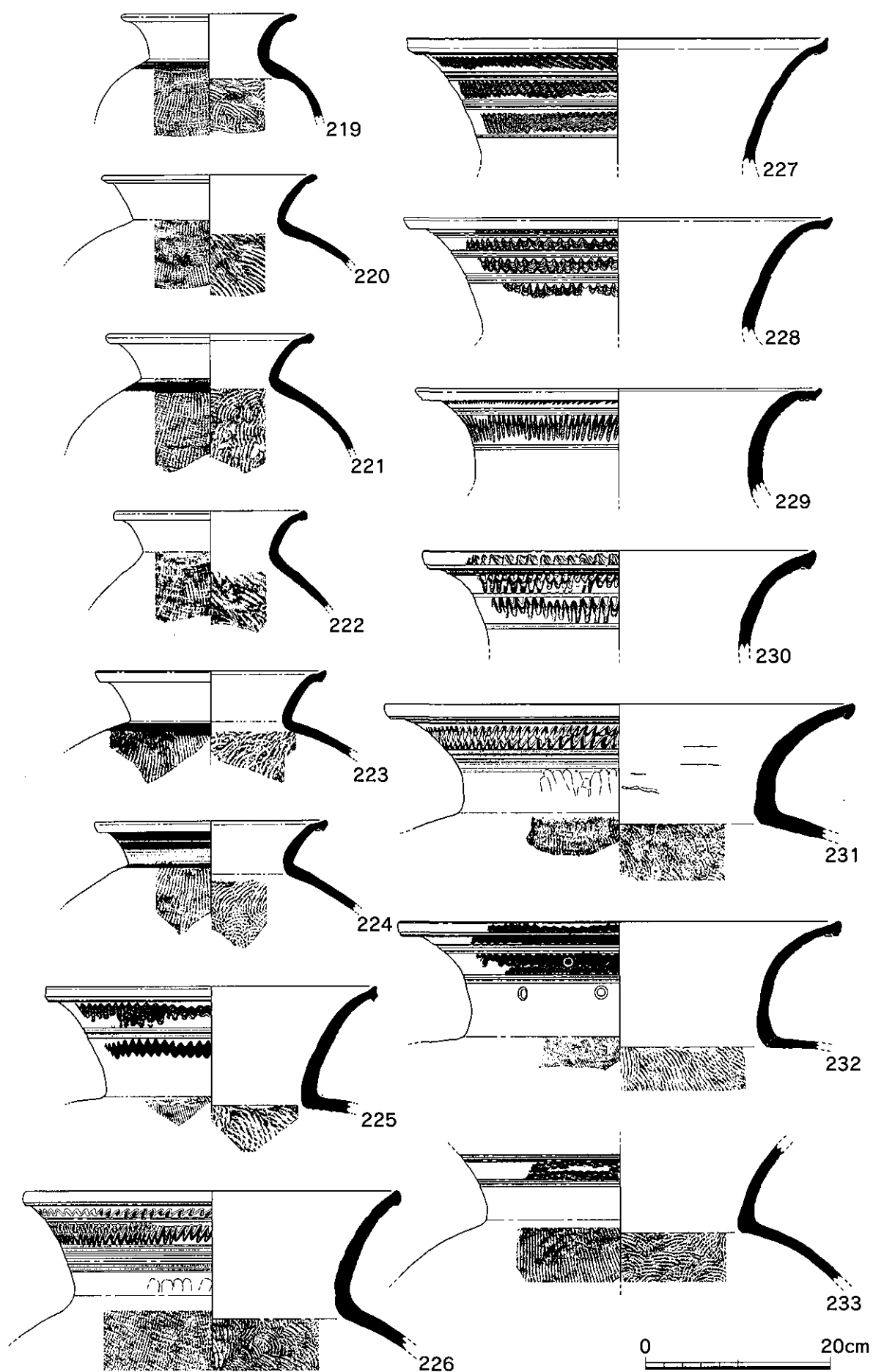
須恵器 (201～233)

上述したように、まとめて須恵器が出土した。201～211は杯H蓋である。201・202・204・205は口径12.0～12.4cm、それ以外は13.0～14.0cmである。前者は天井部が高く丸みをもつ。体部は若干外へ開いてまっすぐ下がる。天井部・体部境は201に浅い段がつき、他は沈線を巡らせる。端部は内傾する段と浅い段がつく。後者は天井が高く、やや平坦である。体部はほぼまっすぐ下へ延びるが、前者より短い。端部は内傾する浅い段がつくものと丸く仕上げるものがある。天井部・体部境には沈線を巡らせるものと何もつかないものがある。天井部外面の1/3～1/2にケズリを入れる。天井部内面に同心円当て具痕が残るものが多い。ロクロの回転方向は左である。209には天井部外面にヘラ記号が入り、別個体の杯蓋が釉着する。212～216は杯H。

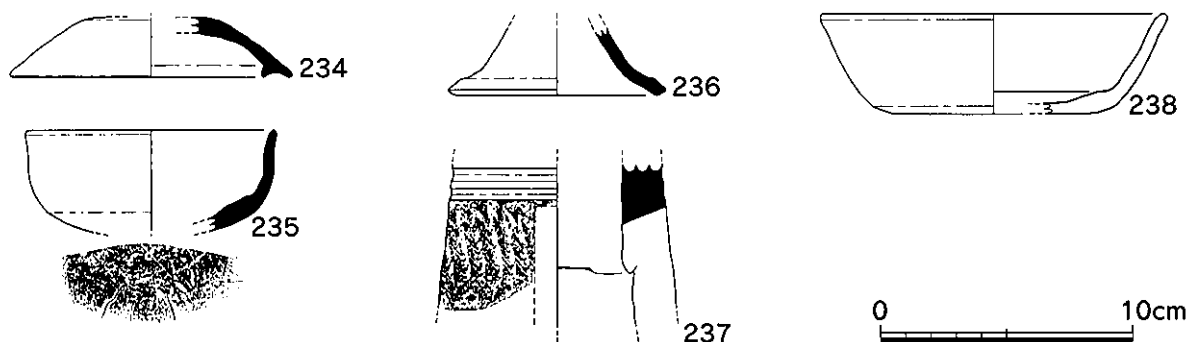
212～215は口径10.3～11.7cm、底部は深く丸みをもつ。立ち上がりは内傾して直線的に延び、端部は浅い段をもつもの（212・213）と丸く仕上げるもの（214・215）がある。底部外面の $1/3 \sim 1/2$ にケズリを施し、213・214にはヘラ記号が入る。215は底部中央にケズリが施されない。216は口径12.8cm、底部は深く平らで、立ち上がりは内傾して外反しながら短く延びる。端部は丸く仕上げる。底部外面 $1/2$ にケズリを施し、内面にシッタ痕が入る。回転方向は212・213が左、216は右である。217・218は提瓶。口頸部は大きく外反し、口縁端部は外面が肥厚す



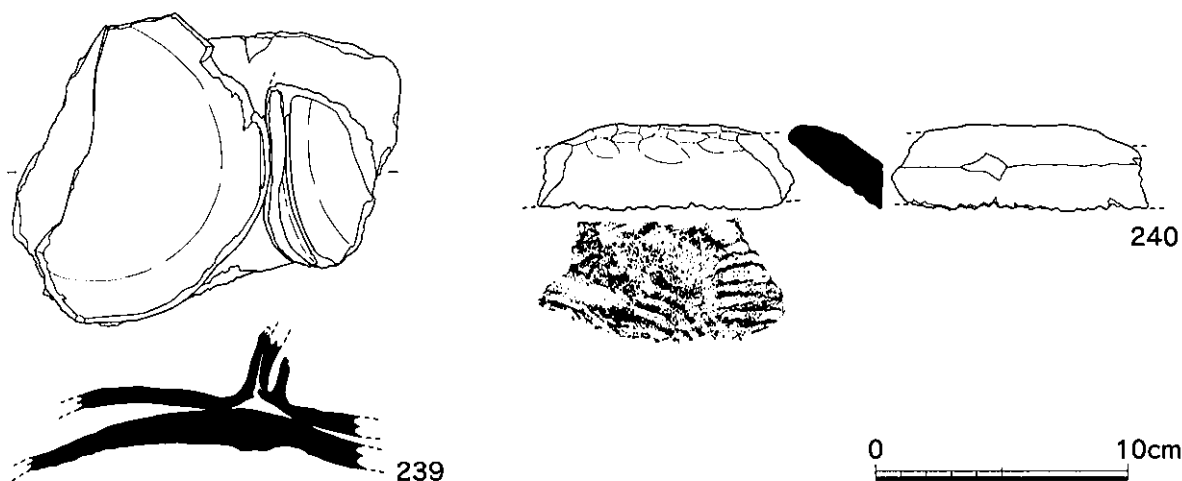
第22図 土坑 (SX02) 出土遺物実測図① (1/3)



第23图 土坑 (SX02) 出土遗物实测图② (1/6)



第24図 灰原下面ピット出土遺物実測図（1/3）



第25図 灰原・SX02出土置き台・切削物実測図（1/3）

るものと上方へ延びて面をなすものがある。肩には鉤状の把手が貼り付けられる。体部にカキメが入る。219～233は甕。219～224は口径20～30cm前後の中・小型、225～233は40～55cm前後の大型のものである。中・小型のものは、頸部は短く外上方に開き、口縁端部は下に折り曲げられ玉縁状に丸く仕上げるもの、端部下半を強くナデることで断面三角形になるもの、端部を上方に延ばし下端部に稜が生じるものがある。体部は外面が擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕が残る。頸部直下の胴部にはタタキの後カキメが施されるものが多い。大型のものは、頸部は強く外上方に開き、口縁端部は下に折り曲げられ断面三角形に仕上げた後、さらに端部外面に強いナデを施すものや、下端部に工具による沈線を施すものがある。また端部を上方に延ばし下端部に稜がつくものがある。前者の中には230・232のように口唇部に櫛状工具による波状文が施文されるものもある。頸部外面には1～2条の沈線を1～3段巡らし、沈線に区画された空間や最下段沈線の下に櫛状工具による波状文を施す。波状文は振間が狭く精緻である。また、232は竹管状工具による刺突文が2段施される。刺突文は上下段で互い違いとなる。体部は外面に擬格子タタキ、内面に同心円当て具が施される。

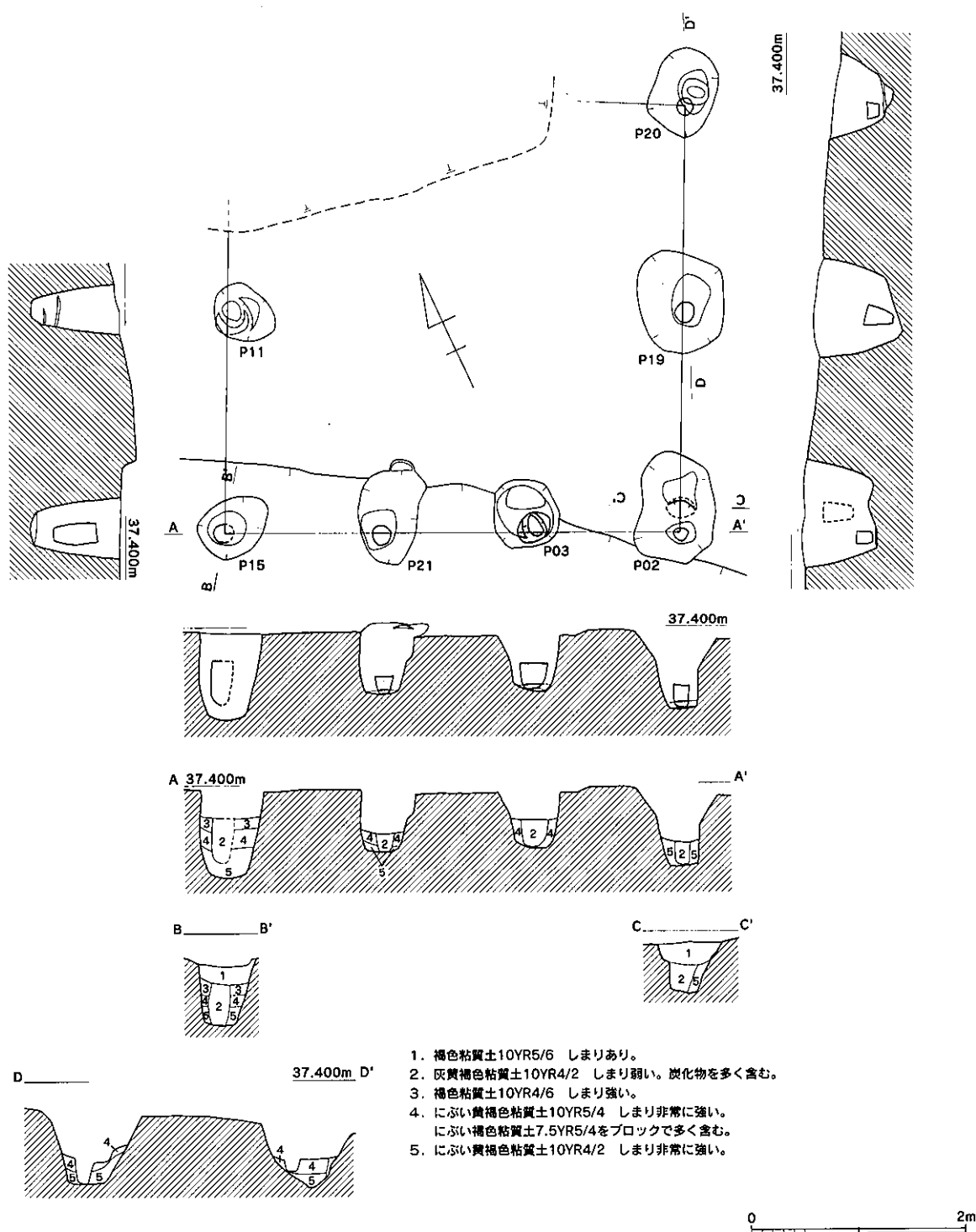
(3) 灰原下面ピット（第4図）

灰原下面では、廃棄土坑・竪穴住居とともに多数のピットが検出された。これらは建物を構成する柱穴や工房に関する遺構である可能性を考慮して調査をおこなった。形状は斜めに掘り下が

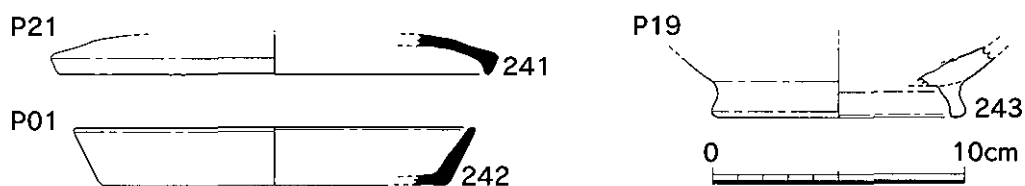
るものや途中で屈曲や枝分かれする不整形なものがほとんどで、柱痕が確認できるものは無かった。ほとんどが植物の生根跡であると考えられる。

出土遺物（第24図、図版26）

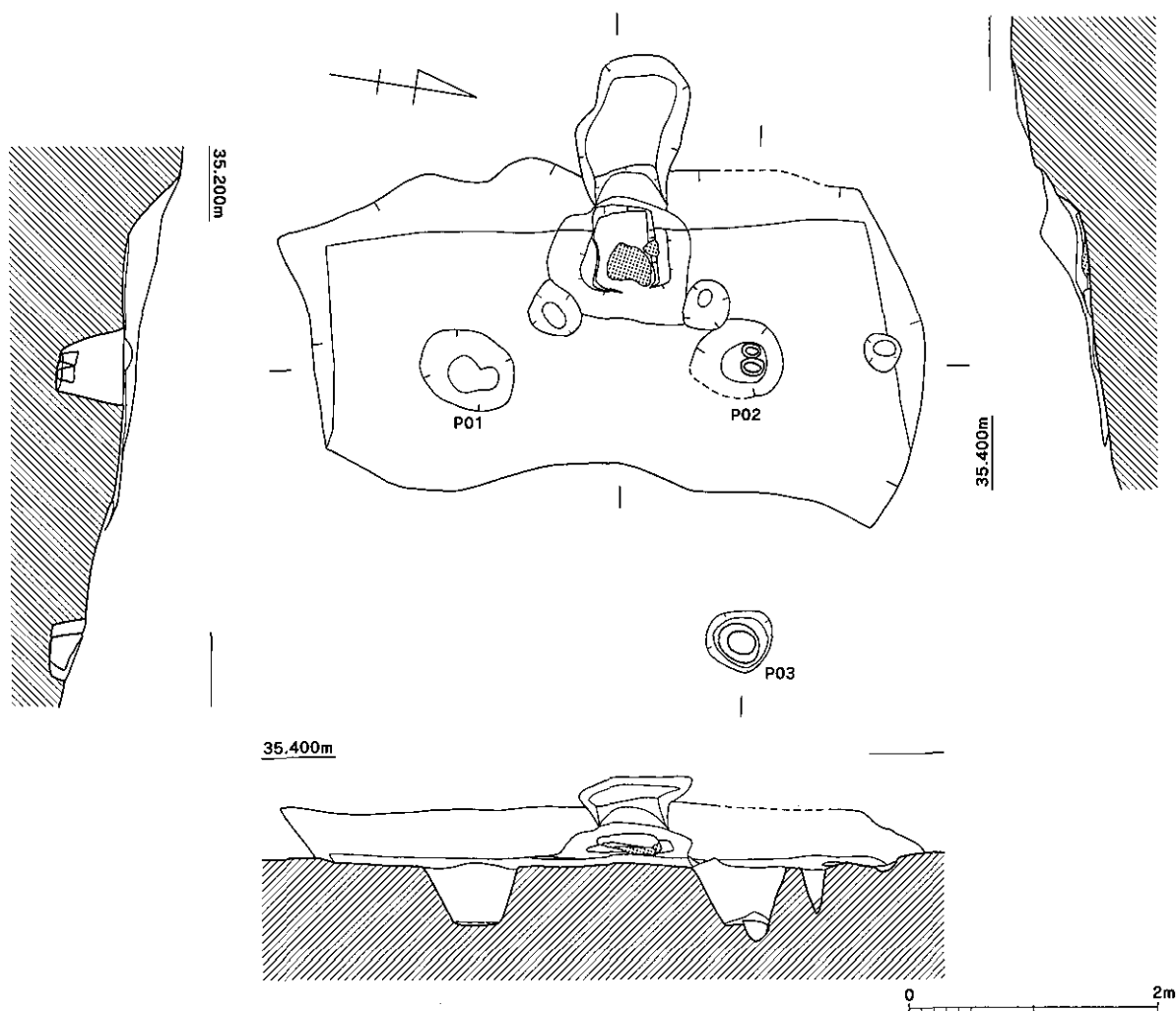
須恵器（234～237） 234は杯G蓋。天井部外面はヘラ切り後ナデである。235は杯G身。底部外面はナデである。底部外面にヘラ記号あり。236は高杯。脚部は緩やかに広がり、裾部でわずかに屈曲する。端部は強くナデられ内傾する面をもつ。237は器台。器形から筒型器台と思われる。



第26図 SB01実測図（1/60）



第27図 SB01出土遺物実測図 (1/3)



第28図 SC01実測図 (1/60)

上位に2条沈線、下位に精緻な波状文を施す。施文後、幅の狭い長方形の透かし窓が開けられる。

土師器 (238) 杯である。口径13.8cm、器高4.0cm。

置き台・切削物 (239・240) 239は焼台と杯Hの粘着資料である。甕破片を焼台としている。蓋杯の図右は蓋と身を合わせて正位置の状態。蓋は口縁端部が丸く仕上げられ、身は端部に浅い段がつく。図左は蓋が下となる。蓋は天井部・体部境に段がつく。

(4) 掘立柱建物 (SB01) (第26図、図版7～10)

調査区の上段1区南端に位置し、SD01に切られる2間×3間の正方形の建物である。建物北側に攪乱・段落ちがかかるため、建物はさらに北へ延びる可能性がある。南北方向の主軸はN-27°-Eである。南側隅の柱痕間で425cm、東側隅の柱痕間で406cmを測り、1尺29.0cmの尺

度が導かれる。そうすると東西方向の柱間は5尺等間、南北方向の柱間は7尺等間になる。柱痕はP11以外の柱穴で確認された。柱痕の直径は15~20cmで、深さは揃っていない。柱穴掘り方は長軸60~100cmの楕円形・隅丸方形を呈し、柱に対して大型である。掘り方埋土はしまりの強い灰黄褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土が10~20cmほどの厚さで堆積する。またP03・02では柱痕が南北に並んで2つ検出された。いずれも南側に比べ北側の柱痕が浅い。P02の柱掘り方は平面・断面形が南北に2基ピットが並んだような形状を呈す。埋土の切りあいや不整合面は確認できなかったが、柱の据え直しの可能性が考えられるか。

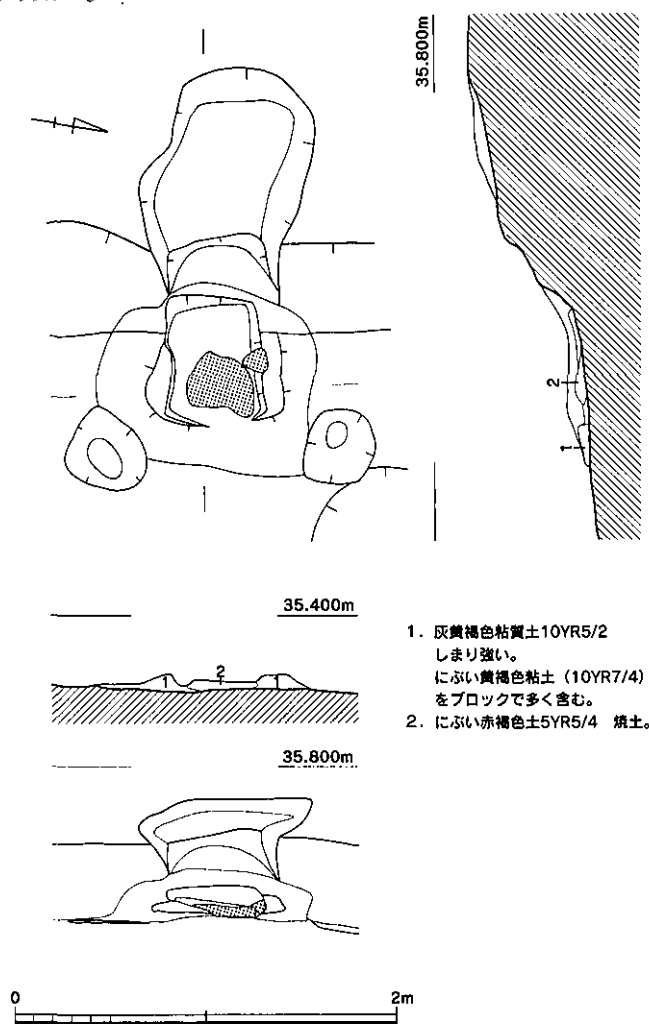
出土遺物（第27図）

須恵器（241・242） 241はP21出土。杯B蓋で、口縁端部は折り曲げられる。241はP01出土。皿で、底部の調整不明。

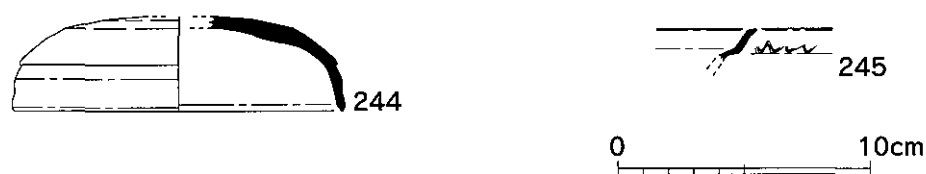
土師器（243） P19出土。椀で、高台は高く太い。

（5） 竪穴住居（SC01）（第28・29図、図版11）

1区東側中央に位置し、灰原の下面で検出された遺構である。灰原掘り下げ中に灰層の下で南北壁面と粘質土が確認されたため遺構と認識した。この時点でほぼ床面直上まで下がっていたため、灰原横断ベルトで堆積状況等の確認をした。埋土は、主に斜面上方側に灰褐色粘質土が薄く堆積した後、灰層が堆積した状況を確認でき、住居に直接灰層が被る部分もあった。このことから、住居が廃絶した後、あまり時間を隔てず灰原が形成され始めたものと考えられる。遺構は長方形の竪穴住居跡と考えられる。南北辺は4.8mを測るが、田畑造成に伴う削平が東側に入り、全体の規模は明らかではない。床面は水平に近く、西壁中央を溝状に掘り込んでカマドを付設する。主柱穴は床面で2基、東側法面で1基検出し



第29図 SC01カマド実測図（1/40）



第30図 SC01出土遺物実測図（1/3）

ており、径50～75cmを測り、底面の高さがほぼ揃う。P02・03では柱痕を確認した。

カマドは1.2m×0.95mの範囲に構築土である灰黄褐色粘質土が広がり、その内側は40cm×60cmの長形状に構築土がなく床面となる。内側の壁はいずれもほぼ直立しており、高さ約10cmを測る。壁には明瞭な被熱の痕跡は確認できなかったが、奥壁から約30cm内側の床面と右袖中央の壁面に焼土を確認した。また袖左右の焚き口側で深さ20cmほどのピットを検出した。袖の形状や被熱状況などから移動式カマドが設置されていた可能性も想定される。

出土遺物（第30図、図版27）

須恵器（244・245） 244は杯H蓋。天井部は比較的高く丸みをもち、体部はやや内湾しながら下がる。口縁端部は丸く仕上げられる。天井部・体部境に浅い段を有する。245は甕。頸部から口縁部が屈折して外へ開く。口縁端部がわずかに外へ延び、口唇部は内傾する段を有する。口縁部下位に波状文が施される。

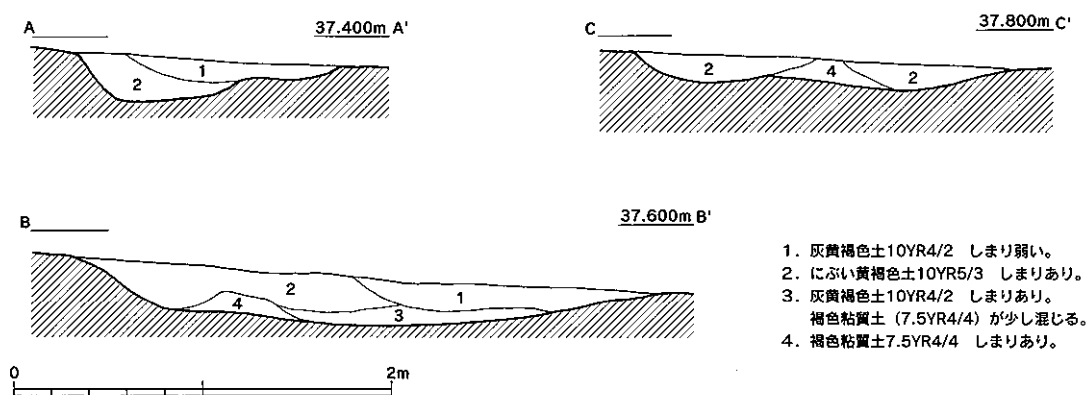
(6) 溝跡

SD01（第4・31図、図版7・12）

2区南に位置し、北西―南東方向に延びる。溝北辺付近が掘立柱建物SB01のP02・03・21・05を切る。幅は広いところで約2.8m、深さは、0.1～0.3m。溝の断面は浅い皿状を呈する。溝の床面は北西側が高く、南東側が低くなっており、斜面の上方から下方へ向かって緩やかに下がる。埋土は上層が灰黄褐色土、下層がにぶい黄褐色・にぶい褐色土で、水性堆積は見られない。土層を詳細に観察すると、2度以上の掘り直しが認められる。掘り直しは北側へ寄る傾向があり、それにより溝の幅が北辺に向かって広がっていることが想定される。走行方向はSB01東西辺とSD05に平行する。出土遺物は層ごとに取り上げることはできなかったが、須恵器・土師器・瓦器・陶磁器などが出土した。

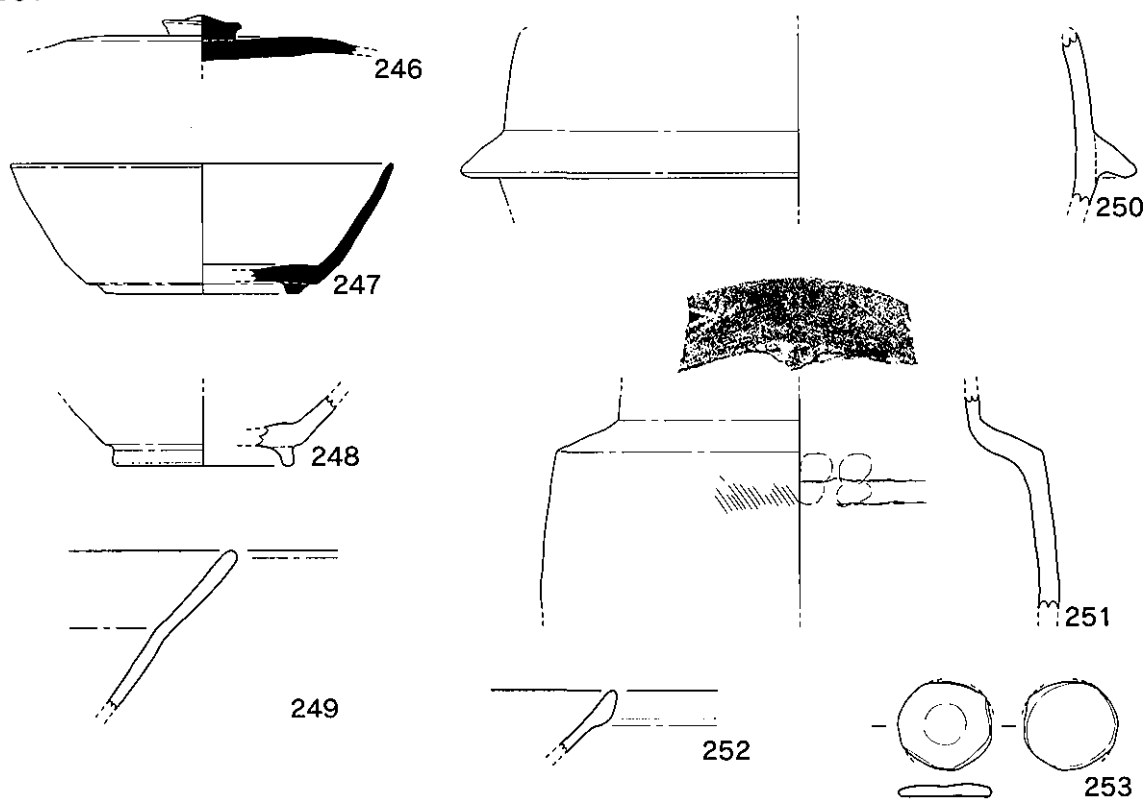
出土遺物（第32図、図版27）

須恵器（246・247） 246は、杯B蓋。天井部はヘラケズリ後、中央部がやや尖る大きいつまみが付く。247は杯B。体部はやや丸みをもち、外へ開きながら立ち上がる。底部との境は明瞭である。高台は底部端部より内側に付く。

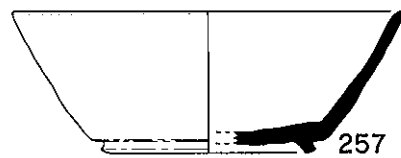
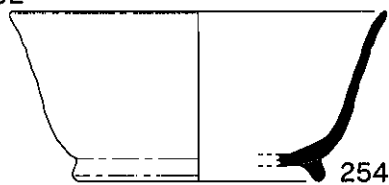


第31図 SD01土層実測図（1/40）

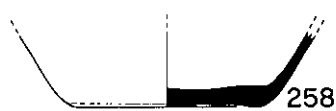
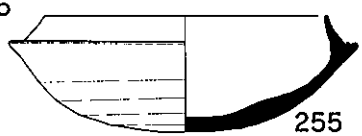
SD01



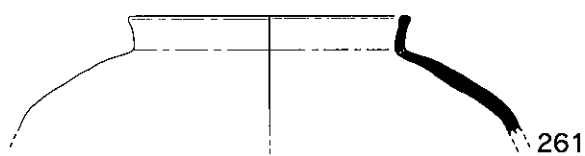
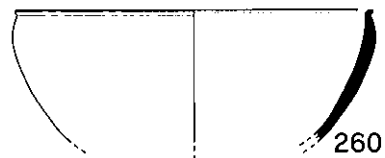
SD02



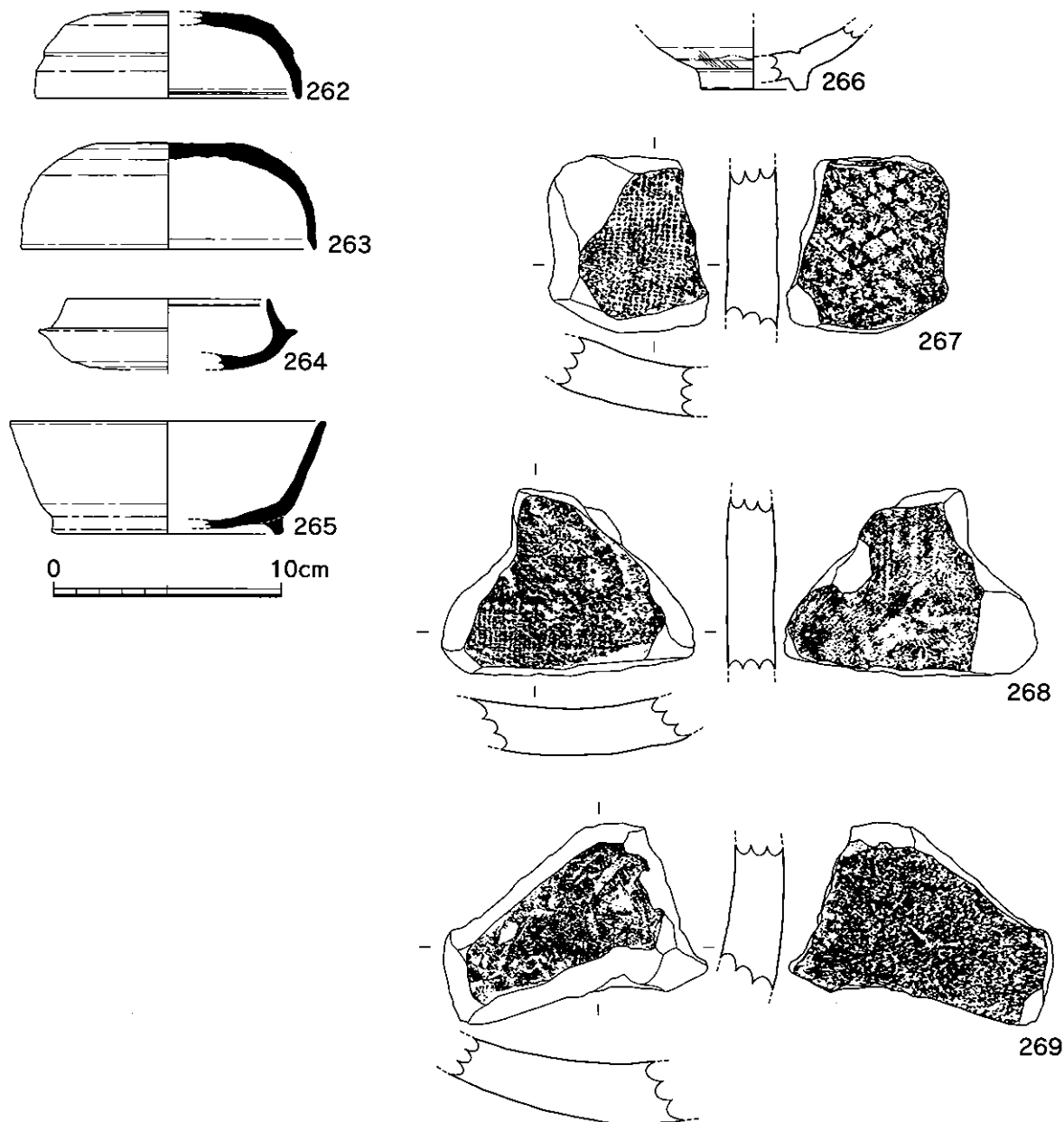
SD05



0 10cm



第32図 SD01・02・05出土遺物実測図 (1/3)



第33図 表土・耕作土出土遺物実測図(1/3)

土師器(248) 椀で、底部から直線的に体部が立ち上がる。高台は比較的高く、太い。

瓦器(249~251) 249は鉢。体部は屈曲する。250・251は釜。250は、体部の中位より下がった位置に長い鰐が付く。外面に煤付着。251は体部が箱形を呈し、肩部に櫛状工具による放射状の刺突文が施される。

白磁(252) 椀で、口縁部は玉縁である。太宰府陶磁器分類白磁椀Ⅳ類と考えられる。

土製品(253) 円盤状の土製品。直径約3.5cm。片面中央が指頭圧痕により窪む。

S D02 (第4図、図版7)

2区北に位置し、南北に延びる。北は調査区外へ続き、南は攪乱に切られる。幅は1.2~1.7m、深さは約20cm。断面は浅い皿状を呈する。溝底はわずかに南に向かって下る。埋土はにぶい黄褐色土で、帯水したような状況は認められない。出土遺物は、須恵器がある。

出土遺物（第32図、図版27）

須恵器（254） 杯B。底部との境がなく、丸みを持ちながら立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する。高台は比較的高い。

S D03（第32図、図版7）

2区北に位置し、南北に延びる。北は調査区外へ続き、南は釣堀の攪乱によって切られる。幅0.8～1.1m、深さ15～20cm。断面は浅い皿状を呈する。溝底は南から北へ緩やかに下り、調査区北壁から70cm付近で一段下がる。出土遺物は、須恵器があるが、図化できるものはなかった。

S D05（第32図、図版7）

2区南端に位置し、北西―南東方向へ延びる。幅0.5～1.3m、深さ約10cm。断面は浅い皿状を呈する。埋土はしまりのないにぶい黄褐色砂質土で、流水堆積が認められる。出土遺物は、須恵器がある。

出土遺物（第32図、図版27）

須恵器（255～261） 255は杯H。底部は深く、立ち上がりは、やや内傾して外反しながら立ち上がる。端部は丸く仕上げられる。底部外面2／3にケズリを入れる。256・257は杯B。底部と体部の境が明瞭で、高台は底部端部から内側へ入った位置に付く。256は丸みを持ちながら立ち上がり、体部は浅い。257は体部が直線的に外へ開き、深い。258は杯。底部と体部の境は明瞭で、体部は直線的に外へ開く。259は皿。底部外面はヘラ切り後ナデが施される。260は鉢。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部が細く延びて外反する。内外面とも回転ナデが施される。261は短頸壺。肩の張る体部から口頸部が短く直立する。口縁端部は強くナデられ面をなす。

（7）表土・耕作土出土遺物（第33図、図版28）

須恵器（262～265） 262・263は杯H蓋。天井部は高く丸みをもち、体部はわずかに内湾しながら下がる。262は天井部・体部境にわずかに段を有し、口縁端部内面に沈線が巡る。263は天井部と体部に明瞭な境がなく、口縁端部は内傾する段をもつ。264は杯H。底部は比較的深いが、やや平らである。立ち上がりは、わずかに内傾して高い。口縁端部に浅い段がつく。265は杯B。体部はわずかに丸みをもち、器高が高い。高めの高台が底部端に付く。

青磁（266） 碗である。高台は削り出し、内面見込みに沈線が入る。

瓦（267～269） 267～269は平瓦。凹面は布目痕が認められ、凸面は267・269に格子目タタキが認められる。268は縄目タタキか。

表1 本堂遺跡14次調査出土遺物観察表①

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ※ () は復元	形態・技法の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備 考
1	須恵器	杯身	灰原3区 1層	①(11.2) ②4.2+α 受部径(13.5)	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 0.5~2.5mmの白色砂粒をやや多く含む。B: 良好。C: 外灰N6/～灰白7.5Y7/1(降灰)、内灰N6/。	口縁端部に浅い段あり。
2	須恵器	杯身	灰原3区 1層	①(11.5) ②3.9 受部径(13.8)	外面1/2回転ヘラケズリ。外面中央ケズリ残し。内面1/2不定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共青灰5PB5/1。	口縁端部を丸く仕上げる。ロクロ左回転。
3	石器	石斧	灰原3区 1層	長5.8+α 幅5.5+α 重137.3	端部に敲打痕あり。		破壊後叩き石に転用か?
4	須恵器	杯身	灰原3区 2層	①(10.7) ②4.2 受部径(12.9)	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。体部中位外面に3条沈線。	A: 微細な白色砂粒、3mmの礫を少量含む。B: 良好。C: 内外共明青灰5PB7/1。	体部外面降灰。口縁部を丸く仕上げる。ロクロ左回転。
5	須恵器	杯身	灰原3区 2層(褐灰色土)	①(10.7) ②4.3+α 受部径(13.2)	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒、3~4mmの礫をやや多く含む。B: 良好。C: 内外共明青灰5PB7/1。	口縁部を丸く仕上げる。内面にシツク痕。ロクロ右回転。
6	須恵器	杯蓋	灰原3区 3層灰層	①(12.8) ②4.5+α	外面2/3回転ヘラケズリ。内面1/2回転ナデ後不定方向ナデ、同心円当て具痕あり。他は回転ナデ。外面天井部体部境に段あり。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: やや不良。C: 外灰5Y6/1、内灰10YR6/1～灰5Y6/1。	口縁端部に沈線あり。ロクロ右回転。
7	須恵器	杯身	灰原3・4区間ベルト3層灰層(1層)	①(9.8) ②3.5+α 受部径(12.8)	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 0.5~2mmの白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰N6/。	口縁端部を丸く仕上げる。
8	須恵器	高杯	灰原3・4区間ベルト4層(8層)	①(12.0) ②2.7+α	杯部回転ナデ。体部外面段直下に1条沈線。底部外面連続刺突文。	A: 微細な白色砂粒、3mmの礫を微量含む。B: 良好。C: 内外共灰N6/。	
9	須恵器	甕	灰原3区 3層灰層	②4.0+α 裾部径(10.1)	口縁部回転ナデ。口縁部外面屈曲部上下に1条沈線2段。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N6/、内灰N4/。	
10	須恵器	器台	灰原3区 4層	②7.6+α	体部内面ヨコナデ、外面に突線2条。突線上下位に波状文。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共青灰5PB6/1。	長方形透かしあり。突線上下位に波状文。
11	須恵器	杯蓋	灰原4区(北半) 1層	①(13.1) ②4.2+α	外面1/2回転ヘラケズリ。内面1/4不定方向ナデ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰N6/。	口縁端部に段あり。内面にシツク痕あり。ロクロ左回転。
12	須恵器	杯蓋	灰原4区(北半) 0層	①(11.6) ②4.6+α	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に段あり。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰N6/。	外面に降灰。口縁部を丸く仕上げる。ロクロ右回転。
13	須恵器	小型甕	灰原4区(中央) 0・1層	①(6.2) ②3.3	底部外面回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外暗灰N3/、内灰N6/。	
14	瓦	平瓦	灰原4区(北半) 1層	長10.7+α 幅8.2+α 最大厚2.0	凹面回転ナデ?凸面格子目タタキ。側面はナデ。	A: 3mm以下の白色砂粒を多く含む。B: 良好。C: 凹凸共明褐灰7.5YR7/2～にぶい赤褐2.5YR5/3、断面橙2.5YR6/8。	
15	須恵器	杯蓋	灰原4区(中央) 3・4層(灰色粘質土)	①(12.4) ②4.0	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 1.5mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外青灰5B5/1～灰N6/、内5PB6/1。	外面に降灰。口縁部を丸く仕上げる。内面にシツク痕。ロクロ左回転。
16	須恵器	杯蓋	灰原4区(南半) 3層灰層	①(14.8) ②3.8	外面2/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 2mm以下の白色砂粒を多量含む。B: 良好。C: 内外共灰N5/。	口縁端部に沈線あり。内面にアバタ状の剝離あり。ロクロ右回転。
17	須恵器	杯身	灰原4区(南半) 3層灰層	①(10.4) ②5.3 受部径(10.4)	外面1/3摩滅の為調整不明。外面中央ケズリ残し。他は回転ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好(底部のみ不良)。C: 内外共灰N6/。	口縁端部に段あり。
18	須恵器	杯身	灰原4区(南半) 3層灰層	①(11.1) ②4.4 受部径(13.6)	外面1/2回転ヘラケズリ。外面中央ケズリ残し。内面1/3ナデ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒をやや多量に含む。B: やや不良。C: 内外共灰白N7/。	口縁端部を丸く仕上げる。ロクロ右回転。
19	須恵器	杯身	灰原4区(北半) 3層灰層	①(11.2) ②4.0+α 受部径(13.6)	外面1/3回転ヘラケズリ。内面一部に一定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外明青灰5PB7/1～灰N4/、内明青灰5PB7/1。	外面にヘラ記号。口縁端部に浅い段あり。ロクロ右回転。
20	須恵器	杯身	灰原4区(南半) 3層灰層	①(11.5) ②4.4+α 受部径(14.0)	外面1/2回転ヘラケズリ。内面一部にナデ。他は回転ナデ。	A: 2mmの白色砂粒をやや多量含む。B: 良好。C: 内外共灰N6/。	口縁端部に浅い段あり。ロクロ右回転。
21	須恵器	杯身	灰原4区 3層灰層	①(12.6) ②4.7 受部径(15.0)	外面1/2回転ヘラケズリ。内面1/4回転ナデ後ナデ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を多量含む。B: 良好。C: 内外共灰N6/。	口縁端部に浅い段あり。ロクロ左回転。
22	須恵器	杯身	灰原4区(南半) 上方 3層灰層	①(12.7) ②4.3+α 受部径(15.2)	外面2/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 0.5~2mmの白色砂粒をやや多く含む。B: 良好。C: 内外共灰N6/。	口縁端部を丸く仕上げる。ロクロ右回転。
23	須恵器	高杯	灰原4区(北半) 3層灰層	①(10.4) ②3.3+α	杯部回転ナデ。体部下位外面連続刺突文。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 内外共灰白N7/～灰N4/。	内面降灰。体部外面に連続刺突文。
24	須恵器	高杯	灰原4区(北半) 3層灰層	②5.9+α 裾部径(9.8)	脚部回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 内外共暗灰N3/～灰N6/。	透かしは3方向か?
25	須恵器	高杯	灰原4区(北半) 3層灰層	②4.5+α	杯部・脚部回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外灰N4/～青灰5PB6/1、内灰N4/。	3方向に透かし。
26	須恵器	高杯	灰原4区(北半) 3層灰層	②6.7+α	杯部・脚部回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 内外共灰N4/～灰白N7/。	脚部内外面に降灰。
27	須恵器	短頸壺	灰原4区 3層灰層	①(7.3) ②3.6+α	体部外面カキメ。他は回転ナデ。	A: 1mm以下の砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰N6/。	体部外面に降灰。
28	須恵器	甕	灰原4区(南半) 上方 3層灰層	②3.5+α	体部回転ナデ。体部中位外面に1条沈線2段、施文後沈線間に連続刺突文。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外灰5Y6/1(降灰)、内灰白N7/。	43と同一個体か?外面に降灰。沈線間に連続刺突文。
29	土製品	不明	灰原4区(南半) 3層灰層	長4.0+α 幅1.9+α 最大厚1.65	摩滅の為調整不明。ナデか?	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 不良。C: 内外共にぶい黄橙10YR6/3。	
30	須恵器	器台	灰原4区(南半) 上方 3層灰層	②2.5+α	口縁部回転ナデ。口縁端部外面連続刺突文・1条沈線。口縁部上位外面カキメ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外灰N5/～暗灰N3/、内灰N5/、断面紫灰5RP6/1。	

表2 本堂遺跡14次調査出土遺物観察表②

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ※ () は復元	形態・技法の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備 考
31	須恵器	甕	灰原4区 (北半) 3層灰層	②2.9+α	口縁部回転ナデ。口縁部外面沈線、施文後沈線上下に波状文。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰5Y4/1 (降灰)、内灰N4/。	内面に降灰。
32	須恵器	器台	灰原4区 (南半) 3層灰層	②6.5+α	台部回転ナデ。台部下位内面同心円当て具痕あり。台部上位外面3条沈線・波状文、中位カキメ、下位擬格子タタキ。	A: 1mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。B: 良好。C: 外暗灰N3/、内灰7.5Y6/1。	
33	須恵器	器台	灰原4区 (北半) 3層灰層	②5.9+α	脚部回転ナデ。残存部外面は上から細かい沈線、波状文、2条沈線、細かい沈線。透かしが入る。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰N6/。	外面に波状文、透かしあり。
34	須恵器	器台	灰原4区 3層灰層	②3.3+α	脚部回転ナデ。脚部外面に波状文。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外暗灰N3/、内灰白N7/。	外面に降灰。透かしあり。
35	須恵器	器台	灰原4区 (北半) 3層灰層	②4.4+α	台部外面下位擬格子タタキ、上位に波状文。台部内面は降灰の調整不明。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N5/、内黄灰2.5Y5/1。	内面に降灰。
36	須恵器	大甕	灰原4区 (北半) 3層灰層	②7.0+α	口縁部回転ナデ。口縁部外面カキメ後沈線施文。その後沈線上位に波状文。	A: 1.5mmの白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外灰N6/、内暗灰N3/。	内面に降灰。
37	白磁	碗	灰原4区 (北半) 3層灰層	①(11.4) ②4.8 ③(4.6)	全面施釉後内面見込み部分を釉剥ぎ。畳付に目跡。	A: 密。灰白2.5Y8/1。B: 良好。C: 釉灰白7.5Y7/1。	釉は不透明。
38	須恵器	杯蓋	灰原4区 (中央) 4層	①(12.1) ②4.8+α	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 0.5～2.5mmの白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外N5/～黄灰2.5Y6/1 (降灰)、内黄灰5PB6/1。	外面に降灰。口縁端部に浅い段あり。ロクロ左回転。
39	須恵器	杯蓋	灰原5区 (南半) 下方 4層	①(13.0) ②4.5+α	外面1/2を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共青灰5B6/1。	口縁端部を丸く仕上げる。
40	須恵器	杯蓋	灰原5区 (北半) 下方 4層	①(15.0) ②3.9	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外明青灰5PB7/1～青灰5PB5/1、内青灰5PB6/1。	口縁端部内傾する。ロクロ右回転。
41	須恵器	高杯	灰原5区 (南半) 3層灰層	②4.9+α	体部下位～脚部外面カキメ、内面回転ナデ。	A: 1.5mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外暗青灰5B4/1、内青灰5PB6/1。	3方向に透かし。
42	須恵器	高杯?	灰原5区 (北半) 下方 4層	②1.4+α	脚部回転ナデ。脚部外面にヘラ描き波状文。	A: 0.5mmの白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰白N7/～灰N4/、内灰白N7/。	脚部外面にヘラ描き波状文。
43	須恵器	甕	灰原5区 6層	②5.8+α	体部外面上位に1条沈線2段、沈線間に連続刺突文。下位手持ちヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰5Y5/1、内明青灰5PB7/1。	体部上位外面に降灰。体部外面に連続刺突文。
44	須恵器	甕	灰原5区 (北半) 下方 4層	①(20.4) ②7.4+α	口縁部～頸部回転ナデ。体部外面平行タタキ、内面同心円当て具痕あり。	A: 1.5mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共青灰5B6/1。	
45	須恵器	杯蓋	灰原6区 1層	①(13.2) ②3.8	外面1/2回転ヘラケズリ。内面一部にヘラナデ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 0.5～2mmの白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外青灰5PB6/1～灰N4/、内青灰5PB6/1。	口縁端部に非常に浅い段あり。ロクロ左回転。
46	須恵器	杯蓋	灰原6区 2層	①(13.6) ②4.5+α	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N4/～灰5Y6/1 (降灰)、内青灰5PB5/1。	外面に降灰。口縁端部に浅い段あり。内面にシタ痕。ロクロ左回転。
47	須恵器	杯身	灰原6区 1層	①(11.2) ②4.2+α 受部径(13.6)	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共青灰5B6/1。	口縁端部に沈線あり。
48	須恵器	杯身	灰原6区 1層	①(12.9) ②2.0+α	口縁部～受部回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 内外共青灰5PB6/1、断面紫灰5RP6/1。	外面に降灰。口縁端部に浅い段あり。
49	須恵器	高台付壺	灰原6区 1層	②2.4+α 高台径(11.2)	脚部回転ナデ。脚部下位外面カキメ。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外暗灰N3/、内灰白N7/ (降灰)。	脚部内面に降灰。
50	土師器	甕	灰原6区 1層	①(18.0) ②3.4+α	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向ヘラケズリ。	A: 0.5～1.5mmの白色砂粒をやや多く含む。B: 良好。C: 外明赤褐5YR5/6、内5YR5/6～灰褐5YR5/6。	
51	石器	石鏃	灰原6区 2層	長2.4 幅1.8 重1.2	全体に細部調整。先端部欠損。		安山岩?
52	須恵器	杯蓋	灰原7区 3層灰層	①(13.1) ②4.3+α	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外灰N5/～灰白2.5Y7/1、内紫灰5PB6/1。	口縁端部を丸く仕上げる。
53	須恵器	杯蓋	灰原7区 3層灰層	②3.3+α	口縁部～天井部の一部回転ナデ。口縁部外面に縦位沈線文。外面天井部体部境付近に2条沈線。	A: 0.5mmの白色砂粒をやや多く含む。B: 良好。C: 外灰白N7/、内暗青灰5PB4/1～にぶい赤褐5YR4/4。	口縁端部に沈線あり。焼き歪む。外面沈線下位に縦位沈線文。
54	須恵器	杯身	灰原7区 3層灰層	①(12.4) ②4.3+α 受部径(14.6)	外面は降灰の調整不明。他は回転ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共青灰5PB6/1。	口縁部を丸く仕上げる。外面に降灰。
55	須恵器	杯身	灰原7区 3層灰層	①(9.1) ②4.3 高台径6.4	底部内外面不定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外暗灰N3/～灰白N8/ (降灰)、内青灰5PB5/1。	外面に降灰。
56	須恵器	盤	灰原7区 3層灰層	①(18.6) ②4.2 ③(15.6)	底部外面手持ちヘラケズリ、内面不定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N5/、内灰7.5Y5/1。	底部外面にヘラ記号。文字か?
57	須恵器	短頸壺	灰原7区 3層灰層	①(8.3) ②3.1+α	口縁部～体部上位回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 内外共灰N5/。	
58	須恵器	甕	灰原7区 3層灰層	①(13.0) ②2.4+α	口縁部回転ナデ。口縁部外面1条沈線施文後ヘラ描き波状文。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外暗灰N3/～灰5Y5/1 (降灰)、内灰N4/。	外面降灰。沈線の上下位にヘラ描き波状文。

表3 本堂遺跡14次調査出土遺物観察表③

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ※ () は復元	形態・技法の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備 考
59	須恵器	提瓶	灰原7区 3層灰層	②5.4+α	口縁部回転ナデ。頸部外面回転ナデ、内面ナデ。体部外面カキメ、内面回転ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒をやや多量含む。B: 良好。C: 体部内面暗灰N3/、口縁内面～外面灰白N7/。	頸部外面にヘラ記号。
60	須恵器	器台	灰原7区 3層灰層 灰原9区 (北半) 2層上層 灰原9区 3層灰層	②8.7+α 裾部径(15.2)	脚部回転ナデ。脚部下位外面に2条沈線2段、沈線上下位に波状文。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外青灰5B6/1、内青灰5B5/1。	三角形の透かしが入る。
61	須恵器	甕	灰原7区 3層灰層	①(19.4) ②5.9+α	口縁部～頸部回転ナデ。体部外面平行タタキ、内面同心円当て具痕あり。口縁部外面に1条沈線。	A: 0.5～2mmの白色砂粒を多量含む。B: やや不良。C: 内外共灰5Y6/1～灰白5Y8/1。	
62	須恵器	杯身	灰原8区 2層	②3.6+α	口縁部～受部回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外青灰5B6/1(口縁)、暗灰N3/(体部)、内青灰5B6/1。	口縁端部に浅い段あり。
63	須恵器	高杯	灰原8区 2層	②5.5+α 裾部径(7.8)	裾部は回転ナデ。脚内面はヨコナデ、外面カキメ。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共暗青灰5PB4/1。	3方向に透かし。
64	須恵器	杯蓋	灰原8区 3層灰層	①(12.1) ②4.0	外面2/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 微細な白色砂粒、1mmの黒色粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N6/～灰白2.5Y7/1、内灰N6/。	外面にヘラ記号。口縁端部に内傾する段あり。ロクロ左回転。
65	須恵器	杯蓋	灰原8区 3層灰層	①(11.8) ②3.9	外面1/2回転ヘラケズリ。内面一部にナデ・同心円当て具痕あり。他は回転ナデ。	A: 1.5mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰白5Y7/1、内青灰5B6/1、断面紫灰5P6/1。	口縁端部に沈線あり。ロクロ左回転。
66	須恵器	杯蓋?	灰原8区 3層灰層	①(15.0) ②3.5	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。口縁部外面に1条沈線。	A: 1.5mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外青灰5PB5/1～黒N2/(口縁)、内青灰5PB5/1。	口縁端部に浅い段あり。口縁外面に重ね焼の色ムラあり。ロクロ左回転。
67	須恵器	杯身	灰原8区 3層灰層	①(9.4) ②4.5	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外(降灰)灰白5Y7/1、内明青灰5PB7/1。	外面に降灰。口縁端部に浅い段あり。内面にシツク痕。ロクロ右回転。
68	須恵器	高杯	灰原8区 3層灰層	①(10.7) ②3.6+α	杯部回転ナデ。体部外面上位に1条沈線、下位に連続刺突文。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 内外共青灰5PB6/1。	体部外面に連続刺突文。
69	須恵器	高杯	灰原8区 3層灰層	②2.6+α	底部内面回転ナデ後不定方向ナデ。他は回転ナデ。杯部外面に2条・1条沈線、沈線間に連続刺突文。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N5/、内青灰5PB5/1。	沈線間に連続刺突文。
70	須恵器	短頸壺	灰原8区 3層灰層 灰原8区 2層	①(10.6) ②7.7+α	口縁部～頸部回転ナデ。体部外面格子タタキ・一部カキメ。内面同心円当て具痕、後上位回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰2.5Y7/1、内青灰5PB6/1～灰白N7/。	
71	須恵器	甕	灰原8区 3層灰層	②3.0+α	口縁部回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外黄灰2.5Y6/1(降灰)、内青灰5PB6/1。	口縁部中位に穿孔。
72	須恵器	甕	灰原8区 3層灰層	②5.5+α	体部中位～下位外面カキメ。他は回転ナデ。体部中位外面に1条沈線2段、沈線間に斜線文。	A: 2mm以下の白色砂粒をやや多く含む。B: 良好。C: 外暗灰黄2.5Y5/2、内灰N6/。	外面に降灰。沈線間に斜線文。体部中位に穿孔。
73	須恵器	提瓶	灰原8区 3層灰層	①(10.6) ②4.7+α	口縁部回転ナデ後下位～頸部外面カキメ。頸部内面ヨコナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰白N7/、体部内面暗紫灰5P4/1。	
74	須恵器	杯蓋	灰原8区 5層	①(12.2) ②4.3+α	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒をやや多く含む。B: 良好。C: 内外共青灰10BG6/1。	口縁端部に浅い段あり。ロクロ左回転。
75	須恵器	杯身	灰原8区 5層	①(11.5) ②4.0 受部径(13.6)	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。内面に同心円当て具痕あり。	A: 0.5mmの白色砂粒を少量、1～3mmの黒色粒をやや多く含む。B: 良好。C: 外灰白N7/～灰N5/、内明青灰5PB7/1。	外面に降灰。口縁端部に段あり。内面にシツク痕あり。ロクロ左回転。
76	須恵器	高杯	灰原8区 5層	①(10.4) ②6.2+α	口縁部・脚部回転ナデ。杯部外面に1条沈線2段、沈線間に連続刺突文。体部下位～底部外面カキメ。杯部内面降灰のため調整不明。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外青灰5PB5/1、内灰N5/～灰白N8/。	内面に降灰。3方向に透かしあり。底部外面に連続刺突文。
77	須恵器	杯蓋	灰原9区 1層	①(13.0) ②4.3	外面1/2回転ヘラケズリ。内面一部に回転ナデ後一定方向ナデ。他は回転ナデ。内面に同心円当て具痕あり。外面天井部体部境に沈線。	A: 0.5～3mmの白色砂粒をやや多く含む。B: 良好。C: 外灰5Y5/1(降灰)、内青灰5PB5/1、断面黄灰2.5Y6/1。	外面に降灰。口縁端部に浅い段あり。天井部焼き歪む。ロクロ左回転。
78	須恵器	杯蓋	灰原9区 1層 (3層)	①(12.6) ②4.3+α	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外灰白N7/～灰N5/、内暗青灰5PB5/1。	天井部外面にヘラ記号。口縁端部に非常に浅い段あり。ロクロ左回転。
79	須恵器	杯蓋	灰原9区 1層	①(14.4) ②3.6	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 微細な白色砂粒を少量、2mmの白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外暗灰N3/～灰白7.5Y7/1、内青灰5PB6/1、断面暗赤灰5R4/1。	口縁端部に内傾する段あり。外面に降灰。
80	須恵器	蓋	灰原9区 1層	①(16.6) ②3.7+α	口縁部～天井部回転ナデ。天井部外面に連続刺突文。外面天井部体部境に沈線。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共青灰5B6/1。	口縁端部に段あり。外面に連続刺突文。
81	須恵器	杯蓋	灰原9区 1層	②4.4+α	外面1/5回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰7.5Y6/1。	口縁端部に浅い段あり。
82	須恵器	杯身	灰原9区 1層	②2.0+α	口縁部～受部回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N5/、内灰N5/～灰白N8/。	口縁端部に浅い段あり。
83	須恵器	杯蓋	灰原9区 1層	①(22.4) ②2.5+α	口縁部回転ナデ。他は摩滅の為調整不明。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 不良。C: 内外共明赤褐2.5Y5/8。	

表4 本堂遺跡14次調査出土遺物観察表④

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ※ () は復元	形態・技法の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備考
84	須恵器	杯身	灰原9区 1層	①(11.0) ②4.4 受部径(13.2)	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A:0.5~3mmの白色砂粒をやや多く含む。B:良好。C:外灰白2.5Y7/1(降灰)、内明青灰5PB7/1。	外面に降灰。口縁端部に浅い段あり。ロクロ左回転。
85	須恵器	杯身	灰原9区 1層	①(12.0) ②4.4 受部径(14.2)	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。内面に同心円当て具痕あり。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰白N7/、内青灰5PB6/1。	受部上面に降灰。口縁端部に非常に浅い段あり。ロクロ左回転。
86	須恵器	杯身	灰原9区 1層	①(12.2) ②4.1 高台径(7.3)	底部外面ナデ、内面不定方向ナデ。他は回転ナデ。	A:微細な白色砂粒を微量含む。B:やや不良。C:内外共灰白N7/〜灰白5Y7/1。	底部外面に板状圧痕。
87	須恵器	高杯	灰原9区 1層(3層)	②7.0+α 裾部径(9.2)	脚部外面カキメ。裾部回転ナデ。	A:0.5~1mmの白色砂粒を多く含む。B:良好。C:外青灰5PB6/1〜灰黄2.5Y6/2(降灰)、内暗青灰5PB4/1。	外面に降灰。3方向に透かしあり。
88	弥生土器	甕	灰原9区 1層	②6.4+α	摩滅の為調整不明。口縁端部と突帯に刻目あり。	A:0.5~2mmの白色砂粒を多く含む。B:やや良好。C:外橙7.5YR6/6〜にふい黄橙10YR7/3〜黒褐7.5YR3/1、内橙7.5YR6/6〜黒褐7.5YR3/1〜明赤褐2.5YR5/6。	
89	須恵器	杯蓋	灰原9区(北半)2層下層	①(11.6) ②3.9	外面2/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A:0.5~2mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共青灰5PB5/1。	口縁端部に沈線あり。ロクロ右回転。
90	須恵器	杯蓋	灰原9区(南半)2層下層	①(12.6) ②4.5	外面2/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A:微細な白色砂粒を微量含む。B:良好。C:外灰N6/、内青灰5PB6/1、断面褐灰7.5YR4/1。	口縁端部に沈線あり。ロクロ左回転。
91	須恵器	杯蓋	灰原9区(南半)2層下層	①(15.6) ②4.3	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A:微細な白色砂粒を微量含む。B:良好。C:内外共青灰5PB6/1。	口縁端部に段あり。ロクロ右回転。
92	須恵器	杯蓋	灰原9区(北半)2層上層	①(14.2) ②4.1+α	外面1/2を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A:微細な白色砂粒を微量含む。B:良好。C:内外共青灰5PB6/1、断面赤灰5R6/1。	口縁端部を丸く仕上げる。ロクロ左回転。
93	須恵器	杯蓋	灰原9区(北半)2層下層	②4.6+α	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:不良。C:内外共灰白10YR8/1〜灰白N7/。	ロクロ左回転。
94	須恵器	杯蓋	灰原9区(北半)2層下層	②4.8+α	外面1/4回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。内面同心円当て具痕あり。外面天井部体部境に沈線。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共青灰5PB6/1、断面赤灰5R5/1。	口縁端部に沈線あり。
95	須恵器	杯蓋・杯身	灰原9区(北半)2層下層	①蓋(11.7) 身(11.0) ②蓋3.2+α 身3.7+α 受部径(12.5)	杯身・杯蓋回転ナデ。杯蓋:外面天井部体部境に段あり。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:良好。C:蓋身共外灰5Y5/1、内青灰5PB6/1。	杯蓋外面から杯身受部上面に降灰。蓋身共に口縁端部に沈線あり。
96	須恵器	杯身	灰原9区(北半)2層下層	①(9.7) ②3.8 受部径(12.0)	外面1/4回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外青灰5PB6/1〜灰黄2.5Y6/2、内青灰5PB6/1。	外面に降灰。
97	須恵器	杯身	灰原9区(北半)2層上層	①(10.7) ②4.0 受部径(13.2)	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A:0.5~1mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外明青灰5PB7/1〜灰N5/、内青灰5PB5/1。	口縁端部に浅い段あり。ロクロ左回転。
98	須恵器	杯身	灰原9区(北半)2層下層	①(11.0) ②3.7 受部径(13.9)	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A:微細な白色砂粒を微量含む。B:良好。C:外灰5Y6/1(降灰)、内青灰5PB6/1。	外面に降灰。口縁を丸く仕上げる。
99	須恵器	高杯	灰原9区(北半)2層下層	②4.6+α 裾部径(7.3)	脚部回転ナデ。脚部外面カキメ。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗灰N3/、内灰黄2.5Y7/2。	内面に降灰。3ヶ所に透かし。
100	須恵器	甕	灰原9区(北半)2層上層	②1.9+α	口縁部回転ナデ。口縁部外面に波状文。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共灰N6/。	口縁部外面に波状文。
101	須恵器	甕	灰原9区(南半)2層下層	②3.1+α	口縁部回転ナデ。口縁部外面下位に5条沈線。	A:微細な白色砂粒を微量含む。B:良好。C:内外共灰N6/。	
102	土師器	小皿	灰原9区(北半)2層下層	②1.3+α ③(7.5)	摩滅の為調整不明。底部外面糸切り。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外浅黄橙10YR8/3〜橙2.5YR6/6、内浅黄橙10YR8/3〜橙5YR7/6。	
103	白磁	碗	灰原9区(北半)2層上層	②1.8+α	口縁部回転ナデ後内外面施釉。口唇部釉剥ぎ。	A:灰白5Y8/1。微細な黒色粒子を微量含む。B:不良。C:釉灰黄2.5Y7/2。	釉は光沢なく不透明。
104	白磁	皿	灰原9区(北半)2層上層	①(9.0) ②1.7 ③(5.6)	底部外面回転ナデ。内面〜体部下位施釉。	A:やや青味のある白。微細な黒色粒を微量含む。B:良好。C:釉灰白5Y8/1。	釉は細かい気泡が全体に入る。光沢あり。透明釉。厚い。
105	須恵器	杯蓋	灰原9区 3層灰層	①(11.8) ②4.1	外面1/4回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰白N7/〜暗灰N3/、内灰N6/。	口縁端部に浅い段あり。ロクロ右回転。
106	須恵器	杯蓋	灰原9区 3層灰層	①(10.8) ②2.8+α	外面降灰のため調整不明。内面回転ナデ。口縁部外面に沈線。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰白10YR7/1(降灰)、内明青灰5PB7/1。	外面に降灰。口縁端部に浅い段あり。
107	須恵器	杯蓋	灰原9区 3層灰層	①(11.2) ②4.5	外面2/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。内面に同心円当て具痕あり。外面天井部体部境に沈線。	A:微細な白色砂粒を微量含む。B:良好。C:外灰白2.5Y7/1〜黄灰2.5Y4/1(降灰)、内明青灰5PB7/1。	口縁端部に沈線あり。外面に降灰。
108	須恵器	杯蓋	灰原9区 3層灰層	①(12.6) ②3.6	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共青灰5PB5/1。	口縁端部丸く仕上げる。

表5 本堂遺跡14次調査出土遺物観察表⑤

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ※ () は復元	形態・技法の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備 考
109	須恵器	杯蓋	灰原9区 3層灰層	①(12.8) ②5.0	外面1/2回転ヘラケズリ。内面1/5回転ナデ後一定方向ナデ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: やや不良。C: 外褐灰10YR5/1～灰7.5Y5/1、内灰褐5YR5/2～褐灰7.5YR6/1。	口縁端部丸く仕上げる。ロクロ左回転。
110	須恵器	杯蓋	灰原9区 3層灰層	①12.8 ②4.5	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外灰白N7/～灰N4/ (降灰)、内明青灰5PB7/1。	口縁端部に浅い段あり。ロクロ左回転。
111	須恵器	杯蓋	灰原9区 3層灰層	①(12.8) ②4.6	外面1/2回転ヘラケズリ。内面1/3回転ナデ後一定方向ナデ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 0.5mmの白色砂粒を少量含む。B: やや不良。C: 外灰白2.5Y8/1～灰白N7/、内灰白2.5Y7/1。	口縁端部に段あり。ロクロ右回転。
112	須恵器	杯蓋	灰原9区 3層灰層	①(14.0) ②4.4+α	外面1/4回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 0.5～1.5mmの白色砂粒をやや多く含む。B: 良好。C: 外青灰5PB6/1～暗灰N3/、内青灰5PB6/1。	口縁端部に浅い段あり。内面にシツタ痕あり。ロクロ左回転。
113	須恵器	杯蓋	灰原9区 3層灰層	①(13.6) ②3.7	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 0.5mmの白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰N4/～にぶい橙5YR6/3。	口縁端部に浅い段あり。天井部大きく歪む。ロクロ左回転。
114	須恵器	杯蓋・杯身	灰原9区 3層灰層	蓋: ①(11.5) ②2.8+α 身: ①(10.2) ②2.0+α 受部径(12.0)	杯蓋・杯身口縁部回転ナデ。杯蓋: 外面天井部体部境に段あり。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰黄2.5Y6/2～オリーブ黒5Y3/1 (降灰)、内青灰5PB5/1。	外面に降灰。口縁端部に沈線あり。ロクロ左回転。
115	須恵器	杯身	灰原9区 3層灰層	①(9.7) ②4.5+α 受部径(12.4)	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外青灰5PB6/1～灰N4/ (体部)、内青灰5PB6/1。	口縁端部・受け部に非常に浅い段あり。
116	須恵器	杯身	灰原9区 3層灰層	①(11.4) ②3.8+α 受部径(13.4)	外面1/2降灰のため調整不明。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外青灰5PB6/1～灰白5Y7/1 (降灰)、内青灰5PB6/1。	口縁端部に段あり。外面に降灰。
117	須恵器	杯身	灰原9区 3層灰層	①(10.1) ②4.3 受部径(12.2)	外面2/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。内面に同心円当て具痕あり。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 内外共灰N4/。	口縁端部を丸く仕上げる。ロクロ左回転。
118	須恵器	杯身	灰原9区 3層灰層	①(10.4) ②4.0 受部径(13.0)	外面1/2回転ヘラケズリ。内面1/5回転ナデ後一定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外明青灰5PB7/1～灰白2.5Y7/1 (体部)、内紫灰5P6/1。	口縁端部を丸く仕上げる。
119	須恵器	杯身	灰原9区 3層灰層	①(10.6) ②4.4 受部径(13.6)	外面2/3回転ヘラケズリ。内面1/4不定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 0.5～3mmの白色砂粒をやや多く含む。B: やや不良。C: 外紫灰5P6/1～灰白N8/、内紫灰5P6/1。	口縁端部に沈線あり。底部内面粘土紐巻上げ痕明瞭。ロクロ左回転。
120	須恵器	杯身	灰原9区 3層灰層	①(10.8) ②4.5+α 受部径(12.8)	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外青灰5PB6/1～灰N4/、内青灰5PB6/1。	口縁端部に浅い段あり。内面にシツタ痕あり。ロクロ左回転。
121	須恵器	杯身	灰原9区 3層灰層	①(11.8) ②2.6+α 受部径(14.0)	口縁部～受部回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外青灰5PB6/1～明紫灰5P7/1、内青灰5PB6/1。	口縁端部を丸く仕上げる。
122	須恵器	杯身	灰原9区 3層灰層	①(12.0) ②4.1+α 受部径(14.6)	外面2/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。内面に同心円当て具痕あり。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 内外共暗青灰5PB4/1。	口縁端部を丸く仕上げる。受け部に杯蓋口縁部軸着。内面にシツタ痕あり。ロクロ左回転。
123	須恵器	杯身	灰原9区 3層灰層	①(12.0) ②3.5+α 受部径(14.4)	口縁部～受部回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 内外共5PB5/1。	口縁端部を丸く仕上げる。外面に降灰。
124	須恵器	杯身	灰原9区 3層灰層	①(12.2) ②3.4+α 受部径(14.0)	口縁部～受部回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外灰N5/～黄灰2.5Y4/1 (体部)、内灰N6/。	口縁端部に浅い段あり。
125	須恵器	杯身	灰原9区 3層灰層	①(12.4) ②2.8+α 受部径(14.8)	口縁部～受部回転ナデ。	A: 0.5mmの白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共青灰5PB6/1。	口縁端部を丸く仕上げる。ロクロ右回転。
126	須恵器	杯身	灰原9区 (9・10区ベルト) 3層灰層 (13層)	①(12.5) ②4.3+α 受部径(15.3)	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。体部外面下に1条沈線。	A: 2mm以下の白色砂粒を多量に含む。B: 良好。C: 内外共灰N6/。	口縁端部を丸く仕上げる。外面に降灰。ロクロ左回転。
127	須恵器	杯身	灰原9区 3層灰層	②3.2+α	口縁部～受部回転ナデ。	A: 0.5mmの白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外青灰5PB6/1 (口縁)～灰N5/ (体部)、内青灰5PB6/1。	口縁端部に浅い段あり。
128	須恵器	甕	灰原9区 3層灰層	②1.9+α	杯部・別個体回転ナデ。杯部口縁部外面波状文後ナデ、沈線。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 内外共明青灰5PB7/1。	別個体が軸着。
129	須恵器	壺蓋	灰原9区 3層灰層	②3.2+α	口縁部回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外灰N5/、内灰N6/。	
130	須恵器	短頸壺	灰原9区 3層灰層	②2.8+α 最大径(9.2)	頸部～体部回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外暗灰N3/、内灰N4/、断面灰N6/。	
131	須恵器	短頸壺	灰原9区 3層灰層	②4.5+α 最大径(11.4)	頸部～体部外面カキメ、内面回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 内外共青灰5PB5/1。	
132	須恵器	甕	灰原9区 3層灰層	②4.3+α	回転ナデ後口縁端部・上位外面に波状文施文。その後口縁端部に1条沈線。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N4/、内灰N5/。	
133	須恵器	器台	灰原9区 3層灰層	②4.05 + α	脚部回転ナデ。後に脚部外面波状文、後2条沈線。	A: 1mm以下の白色砂粒、黒色粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰N5/。	透かしあり。
134	須恵器	杯蓋	灰原9区 5層	①(12.4) ②4.4	外面1/4回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 微細な白色砂粒、黒色粒をやや多量に含む。B: 良好。C: 外灰N5/、内灰N6/。	口縁端部に内傾する段あり。ロクロ左回転。
135	須恵器	杯蓋	灰原9区 5層	①(15.6) ②4.1	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A: 微細な白色砂粒を少量、黒色粒を多量に含む。B: 良好。C: 内外共灰N6/、降灰部暗灰N3/。	口縁端部に浅い段あり。天井部焼き歪む。外面に降灰。ロクロ左回転。

表6 本堂遺跡14次調査出土遺物観察表⑥

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ※ () は復元	形態・技法の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備考
136	須恵器	杯蓋・杯身	灰原9区 5層	蓋:①12.6 ②3.55 身:①11.0 ②3.85 受部径13.4	杯蓋:外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。杯身:外面2/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。杯蓋外面天井部体部境に段あり。	A:微細な白色砂粒、黒色粒を多量に含む。B:良好。C:内外共灰N6/。	杯蓋:杯蓋口縁端部に浅い段あり。ロクロ左回転。 杯身:口縁端部は丸く仕上げる。底部外面にヘラ記号。
137	須恵器	高杯蓋	灰原9区 5層	②1.2+α つまみ径 4.1	つまみ部回転ナデ。内面不定方向ナデ、同心円当て具痕あり。	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共灰N6/、つまみ端部灰N4/。	
138	須恵器	杯身	灰原9区 5層	①(10.4) ②4.3 受部径(12.9)	外面1/2回転ヘラケズリ。内面1/2同心円当て具痕後不定方向ナデ。	A:微細な白色砂粒、黒色粒子を少量含む。B:良好。C:外灰N5/、内灰N6/。	口縁端部先細る。ロクロ左回転。
139	須恵器	杯身	灰原9区 5層	①(9.4) 受部径(11.9)	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A:1.5mm以下の白色砂粒を多量に含む。B:良好。C:内外共灰N5/。	口縁端部に浅い段あり。受け部に杯蓋口縁部軸着。
140	須恵器	杯身	灰原9区 5層	①(11.2) ②4.1 受部径(13.2)	外面2/3回転ヘラケズリ。内面1/5不定方向ナデ。他は回転ナデ。	A:1.5mm以下の白色砂粒を多量に含む。B:良好。C:内外共灰N5/。	口縁端部を丸く仕上げる。ロクロ左回転。内面にシタ痕あり。
141	須恵器	杯身	灰原9区 5層	①(12.8) ②3.4 受部径(15.0)	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。内面に同心円当て具痕あり。	A:2mm以下の白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共灰N6/。	底部外面にヘラ記号。口縁端部を丸く仕上げる。受け部に杯蓋口縁部軸着。ロクロ左回転。
142	須恵器	杯蓋	灰原9区 5層	①9.8 ②2.3 受部径 12.0	外面1/2ヘラ切り後ナデ。他は回転ナデ。	A:1mm以下の白色砂粒を多量に含む。B:やや不良。C:内外共灰白5Y7/1。	天井部外面にヘラ記号。
143	須恵器	碗?	灰原9区 5層	②3.3+α	口縁部回転ナデ。口縁部上位外面に波状文施文。	A:1.5mm以下の白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共灰N5/。	外面に波状文。
144	須恵器	高杯	灰原9区 5層	②5.8+α	杯部～脚部外面回転ナデ。杯部内面摩滅のため調整不明。体部外面下位に2条沈線。底部外面連続刺突文。	A:2mm以下の白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰N6/、内灰白5Y7/1。	外面に降灰。底部外面に刺突文。3方向に透かし。
145	須恵器	壺蓋	灰原9区 (北半) 6層	①(12.6) ②3.5+α	外面一部回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A:1mm以下の白色砂粒、黒色粒を少量含む。B:良好。C:内外共灰N4/。	
146	須恵器	壺	灰原9区 5層	②8.1+α 最大径(10.7)	口縁部～体部上位回転ナデ。体部中位～下位外面カキメ、内面回転ナデ。口縁部外面に波状文。体部中位外面2カ所に1条沈線、沈線間に連続刺突文。	A:微細な白色砂粒をやや多量に含む。B:良好。C:内外共灰白N7/。	外面に降灰。
147	土師器	杯	灰原9区 5層	①12.0 ②3.8	摩滅のため調整不明。	A:微細な砂粒を微量含む。B:不良。C:内外共浅黄5Y7/3。	
148	須恵器	杯蓋	灰原10区 (南半) 2層上層	②3.0+α	口縁部回転ナデ。外面天井部体部境に1条沈線。	A:微細な白色砂粒を微量含む。B:良好。C:外灰白N7/、内灰N5/。	口縁端部に浅い段あり。
149	須恵器	杯身	灰原10区 (南半) 2層上層	①(11.0) ②3.7+α 受部径(13.6)	外面1/2降灰のため調整不明。他は回転ナデ。	A:2mm以下の白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共灰N5/。	外面に降灰。口縁端部に沈線あり。
150	須恵器	杯身	灰原10区 (北半) 2層上層	①(10.4) ②3.45+α 受部径(13.1)	外面一部回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰N6/～灰N5/、内灰N5/。	ロクロ左回転。
151	須恵器	杯	灰原10区 (北半) 2層	①(13.1) ②3.5 ③(8.4)	底部外面はヘラ切り後ナデ、内面ナデ。他は回転ナデ。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰白N7/～灰N5/～暗灰N3/、内灰白N7/～灰N5/。	ロクロ右回転。
152	須恵器	高杯	灰原10区 (北半) 2層	②4.6+α	杯部・脚部回転ナデ。脚部上位外面カキメ。脚屈曲部に1条沈線。	A:2mm以下の白色砂粒を微量含む。B:良好。C:外灰N6/～灰N4/、内灰N5/～灰N4/。	脚部内面に降灰。短脚。
153	須恵器	高杯	灰原10区 (南半) 2層	②5.7+α 裾部径(14.2)	脚部内面ナデ、外面カキメ。裾部は回転ナデ。	A:0.5～1.5mmの白色砂粒と黒色粒を少量含む。B:良好。C:内外共灰白N7/。	
154	須恵器	壺	灰原10区 (南半) 2層	②2.6+α	底部内外面ナデ。他は回転ナデ。	A:微砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗灰N3/、内灰N4/。	
155	須恵器	器台	灰原10区 (南半) 2層上層	②4.7+α	体部内面回転ナデ。体部外面波状文施文後2条沈線。	A:微細な白色砂粒を微量含む。B:良好。C:外灰N6/、内灰白N7/。	
156	須恵器	甕	灰原10区 (南半) 2層上層	①(14.4) ②4.4+α	口縁部回転ナデ後口縁部下位～頸部外面ハケメ?口縁端部外面に2条沈線。	A:2mm以下の白色砂粒を微量含む。B:良好。C:内外共黒N2/。	内外面に降灰。
157	瓦質土器	鉢	灰原10区 (南半) 2層	②7.3+α	外面摩滅のため調整不明。口縁部内面ヨコナデ。体部内面ナデ。	A:0.5～1mmの白色砂粒を少量含む。B:不良。C:内外共黄灰2.5Y4/1。	
158	須恵器	杯蓋	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(12.0) ②4.15	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に段あり。	A:0.5～2mmの白色砂粒を多量含む。B:良好。C:外暗灰N3/～灰白7.5Y7/1、内灰N5/。	口縁端部を丸く仕上げる。
159	須恵器	杯蓋	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(12.4) ②3.9+α	外面一部回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A:1mm以下の白色砂粒、黒色粒を少量含む。B:良好。C:外灰N5/、内灰N6/。	口縁端部を丸く仕上げる。
160	須恵器	杯蓋	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(14.0) ②5.05+α	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A:1mm以下の白色砂粒をやや多量含む。B:不良。C:外灰白N7/、内灰白7.5Y7/1。	口縁端部に浅い段あり。ロクロ左回転。
161	須恵器	杯蓋	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(15.1) ②3.8	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。内面同心円当て具痕あり。外面天井部体部境に沈線。	A:1mm以下の白色砂粒、黒色粒を少量含む。B:良好。C:外暗灰N3/～灰白N7/、内灰白N7/。	口縁端部に浅い段あり。
162	須恵器	杯蓋	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(12.7) ②4.3	外面2/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に沈線。	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰N5/～灰N6/、内灰N5/。	口縁端部に沈線あり。内面にシタ痕。ロクロ左回転。
163	須恵器	杯蓋	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(12.9) ②4.4+α	外面1/3摩滅のため調整不明。他は回転ナデ。外面天井部体部境に段あり。	A:1.5mm以下の白色砂粒を多量含む。B:良好。C:外灰白N7/、内青灰5PB6/1。	外面に降灰。口縁端部に沈線あり。

表7 本堂遺跡14次調査出土遺物観察表⑦

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ※ () は復元	形態・技法の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備考
164	須恵器	杯蓋	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(12.2) ②4.1+α	口縁部へ天井部回転ナデ。外面天井部体部に段あり。	A: 0.5~1mmの白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外暗灰N3/、内灰N5/。	口縁部に浅い段あり。
165	須恵器	杯蓋	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(12.6) ②3.7+α	外面一部回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部に沈線。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N4/、内青灰5PB5/1。	口縁部焼き歪む。口縁端部に浅い段あり。ロクロ左回転。
166	須恵器	杯蓋	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(12.5) ②5.0	外面1/2回転ヘラケズリ。内面1/3回転ナデ後不定方向ナデ。他は回転ナデ。内面に同心円当て具痕あり。外面天井部体部に段あり。	A: 3mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 不良。C: 外灰10Y6/1~灰白5Y7/1、内灰N6/。	一部歪みあり。口縁端部に沈線あり。ロクロ左回転。
167	須恵器	杯蓋	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(12.9) ②4.2	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部に沈線。	A: 0.5~1mmの白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰白N7/、内青灰5PB6/1。	外面にへら記号。口縁端部に沈線あり。ロクロ左回転。
168	須恵器	杯身	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(10.0) ②3.9+α 受部径(12.5)	外面1/4回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 1mmの白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外青灰5PB5/1~灰N4/、内青灰5PB5/1。	外面に降灰。口縁端部を丸く仕上げる。ロクロ左回転。
169	須恵器	杯身	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(11.0) ②3.2+α 受部径(13.0)	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 1mm以下の白色砂粒と黒色粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰白N7/~暗灰N3/、内灰白N7/。	一部歪みあり。口縁端部を丸く仕上げる。ロクロ左回転。
170	須恵器	杯身	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(12.2) ②4.2+α 受部径(14.2)	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 1mm以下の白色砂粒、1mmの黒色粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰白10Y7/1~灰10Y4/1、内灰6/。	外面に降灰。口縁端部を丸く仕上げる。ロクロ右回転。
171	須恵器	杯身	灰原10区 3層灰層	①(11.4) ②3.2 受部径(14.1)	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 0.5~2mmの白色砂粒を少量含む。B: 良。C: 外青灰5PB5/1~暗青灰5PB4/1、内青灰5PB5/1。	ロクロ左回転。
172	須恵器	杯身	灰原10区 (南半) 3層灰層	②3.85+α	外面1/3回転ヘラケズリ。内面1/4ナデ。他は回転ナデ。	A: 0.5mmの白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N5/~灰N6/、内灰N4/~暗灰N3/。	焼き歪む。口縁端部に段あり。
173	須恵器	杯身	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(11.3) ②3.7 受部径(14.0)	外面1/2回転ヘラケズリ。内面1/2シッタ痕、後同心円方向のナデ。他は回転ナデ。	A: 0.5mmの白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰N5/。	口縁端部を丸く仕上げる。ロクロ左回転。
174	須恵器	杯身	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(12.0) ②5.5 受部径(15.0)	外面1/2回転ヘラケズリ。内面1/3ナデ。他は回転ナデ。	A: 0.5mmの白色砂粒、赤褐色粒を少量含む。B: 不良。C: 外橙5YR7/6、内浅黄橙7.5YR8/4~橙5YR7/6。	
175	須恵器	杯身	灰原10区 (南半) 3層灰層	①12.3 ②4.8 受部径14.3	外面2/3回転ヘラケズリ。内面1/2同心円当て具痕あり、後ナデ。他は回転ナデ。	A: 1.5mmの白色砂粒を多量含む。B: 良好。C: 外面灰N4/灰白N7/内面灰N4/。	口縁部歪みあり。口縁端部に沈線あり。ロクロ左回転。
176	須恵器	杯身	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(11.0) ②3.25+α 受部径(13.4)	外面1/4回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 0.5~1mmの白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外青灰5PB5/1~暗灰N3/、内青灰5PB5/1。	外面に降灰。口縁端部に内傾する面。ロクロ左回転。
177	須恵器	高杯	灰原10区 (南半) 3層灰層	②6.4+α 据部径(10.0)	脚部回転ナデ。脚部外面カキメ。裾部外面に1条沈線。	A: 0.5~1mmの白色砂粒と黒色粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N6/~灰N4/、内青灰5PB6/1。	外面に降灰。3方向に透かし。
178	須恵器	壺?	灰原10区 (南半) 3層灰層	②9.2+α	口縁部へ体部上位回転ナデ。体部外面平行タタキ。内面上位回転ナデ、中位同心円の当て具痕あり。	A: 1mmの白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外暗灰N3/、内灰白N7/。	内外面に降灰。
179	須恵器	脚付壺	灰原10区 (南半) 3層灰層	②3.3+α	脚部回転ナデ。脚部外面に2条沈線。	A: 1mmの白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰N5/。	
180	須恵器	甕	灰原10区 (南半) 3層灰層	①(39.8) ②24.1+α	口縁部へ頸部回転ナデ。体部外面縦格子タタキ。内面同心円当て具痕あり。口縁部外面2段に3条沈線を施文後波状文、その後上段沈線に刺突文。口縁端部外面に波状文。	A: 1~1.5mmの白色砂粒と黒色粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N6/~暗灰N3/、内灰N6/。	口縁部歪みあり。口縁部外面に刺突文。口縁端部外面に波状文。
181	須恵器	杯蓋	灰原10区 (南半) 5層	②3.2+α	外面2/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。内面に当て具痕、後ナデ。外面天井部体部に沈線。	A: 3.5mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。B: やや不良。C: 外にぶい黄橙10YR6/4~灰5Y5/1、内青灰5PB6/1、断面紫灰5RP6/1。	外面にへら記号。外面に別個体軸着。
182	須恵器	杯身	灰原10区 (南半) 5層	①(10.1) ②4.1 受部径(12.4)	外面2/3回転ヘラケズリ。内面1/4回転ナデ後一定方向ナデ。他は回転ナデ。口縁部外面ナデか?	A: 2.5mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰N5/。	口縁端部に沈線あり。受部端に降灰か?ロクロ右回転。
183	須恵器	杯	灰原10区 5層	①(11.4) ②3.3 ③(7.2)	底部外面へら切り後不定方向ナデ、内面不定方向ナデ。他は回転ナデ。口縁端部外面強い回転ナデ?	A: 2mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。B: やや不良。C: 内外共灰白5Y7/1~灰7.5Y5/1。	
184	須恵器	皿	灰原10区 5層	①14.3 ②2.0	底部外面へら切り後不定方向ナデ、内面不定方向ナデか?他は回転ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: やや不良。C: 内外共灰5Y6/1~灰N5/。	焼成不良の為か摩滅顕著。
185	須恵器	高杯	灰原10区 (北半) 5層	9.9+α	脚部摩滅のため調整不明。内面下位に絞り痕。断面上部は杯部との接合面。	A: 3.5mm以下の白色砂粒を少量含む。微細な金雲母を微量含む。B: 不良。C: 内外共橙2.5YR6/8。	
186	須恵器	短頸 壺蓋	灰原10区 (北半) 5層	①12.5 ②3.9 つまみ径2.25	外面3/4回転ヘラケズリ後ナデ?内面2/3不定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。B: 不良。C: 外灰褐5YR5/2~灰N5/、内褐灰5YR5/1。	回転方向右。
187	須恵器	器台	灰原10区 5層	②5.8+α	脚部回転ナデ後外面に波状文施文。その後2条沈線。	A: 0.5mm以下の白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 内外共灰N6/~灰N5/。	透かし痕あり。
188	須恵器	長頸壺	灰原10区 (北半) 5層	②3.6+α	口縁部回転ナデ。	A: 1.5mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰N5/。	口縁端部に降灰か?

表8 本堂遺跡14次調査出土遺物観察表⑧

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ※ () は復元	形態・技法の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備考
189	須恵器	杯蓋	灰原10区 6層	①(12.0) ②3.9+α	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。内面当て具痕? 外面天井部体部に沈線。	A: 2mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。B: 良好。C: 内外共灰N5/、断面暗灰黄2.5Y5/2。	口縁部外面に降灰。口縁端部に非常に浅い段あり。ロクロ左回転。
190	須恵器	杯身	灰原10区 6層	①(11.0) ②4.4 受部径(13.9)	外面1/2回転ヘラケズリ。内面1/2不定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 3mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。B: 良好。C: 外灰N6/～暗灰N3/、灰7.5Y5/1(降灰)。	外面にヘラ記号。口縁部外面付近降灰。受部に杯蓋口縁一部粘着。口縁端部を丸く仕上げる。杯口蓋。
191	須恵器	杯身	灰原10区 6層	①(10.7) ②3.6 受部径(13.0)	外面1/2回転ヘラケズリ。内面一部不定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 3mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。B: 良好。C: 外灰N6/～灰白7.5Y7/1、内灰白5Y7/1。	口縁端部に段がつく。ロクロ左回転。
192	須恵器	甕	灰原10区 6層	①(48.0) ②12.1+α	口縁部回転ナデ、下位内面ナデ。口縁端部外面に1条沈線、外面に2条・1条・1条沈線。その後各沈線上位に波状文。	A: 4mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。B: 良好。C: 内外共灰N6/～灰N5/、降灰: 灰オリーブ5Y5/2。	内面降灰。
193	弥生土器	甕	灰原10区 (北半) 6層	①(27.6) ②5.2+α	口縁部～体部外面摩擦のため調整不明。体部内面ケズリ。	A: 3mm以下の白色砂粒を多量に含む。1mm以下の赤褐色の粒をやや多量に含む。1mm以下の金雲母を少量含む。B: 不良。C: 外にぶい黄橙10YR7/4～明黄褐10YR7/6、内灰黄褐10YR6/2～橙7.5YR7/6。	
194	須恵器	杯蓋	灰原5・9区間ベルト 2層	①(14.4) ②4.2+α	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部に沈線。	A: 3mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N5/、内灰N6/。	口縁端部に浅い段あり。ロクロ右回転。
195	須恵器	杯蓋	灰原5・9区間ベルト (北半) 3層灰層 (3')	①(12.0) ②3.5+α	口縁部～天井部回転ナデ。外面天井部体部に沈線。	A: 1mm以下の白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外青灰5PB6/1～灰N4/、内青灰5PB5/1、断面紫灰5RP6/1。	
196	須恵器	杯身	灰原5・9区間ベルト (北半) 3層灰層 (3')	①(10.0) ②3.8+α 受部径(12.6)	外面1/4回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N5/～暗灰N3/、内灰N4/。	外面に降灰。受部に杯蓋口縁粘着。杯蓋口縁端部に浅い段あり。内面にシツク痕あり。口縁端部を丸く仕上げる。ロクロ左回転。
197	須恵器	杯身	灰原5・9-6・10区間ベルト (4・5層)	①(11.2) ②4.3 受部径(14.0)	外面1/2回転ヘラケズリ。内面一部回転ナデ後一定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。B: 良好。C: 外灰N5/～灰N4/、内灰N5/。	外面に降灰。受部に杯蓋口縁部粘着。杯蓋口縁端部に浅い段あり。口縁端部を丸く仕上げる。
198	須恵器	杯身	灰原4・8-5・9区間ベルト 3層灰層 (4層)	①(10.2) ②4.0 受部径(12.9)	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 3mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰N6/～灰N4/。	口縁端部を丸く仕上げる。ロクロ右回転。内面シツク痕? あり。
199	須恵器	杯蓋	灰原5・9-6・10区間ベルト 5層 (6層)	①(11.9) ②4.0+α	口縁部～天井部回転ナデ。外面天井部体部に段あり。	A: 2mm以下の白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外灰N4/、内灰N5/。	口縁端部に沈線あり。
200	須恵器	杯身	灰原5・9-6・10区間ベルト 5層 (6層)	①(11.0) ②4.2 受部径(13.3)	外面2/3回転ヘラケズリ。内面1/4回転ナデ後一定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 3mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。B: 良好。C: 外灰N6/～灰白5Y7/1～暗灰N3/、内灰N6/。	外面に降灰。口縁端部に浅い段あり。ロクロ右回転。
201	須恵器	杯蓋	SX02 (南半) 上層	①(12.0) ②4.5	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。内面に同心円当て具痕、後ナデ。外面天井部体部に段あり。	A: 2mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。B: 良好。C: 外灰N6/、内青灰5PB5/1。	口縁端部に内傾する段あり。ロクロ右回転。
202	須恵器	杯蓋	SX02 (南半) 上層	①(12.3) ②4.1	外面1/2を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部に沈線。	A: 4mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N6/、内灰N5/。	口縁端部に段あり。ロクロ左回転。
203	須恵器	杯蓋	SX02 (南半) 上層	①(13.0) ②4.1	外面2/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部に沈線。	A: 3mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰白N7/～暗灰N3/、内青灰5PB5/1。	外面に降灰。口縁端部に段あり。ロクロ左回転。
204	須恵器	杯蓋	SX02 (南半) 上層	①(12.4) ②4.3	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。内面に同心円当て具痕、後ナデ。外面天井部体部に沈線。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共青灰5PB5/1、灰7.5Y5/1～オリーブ黄5Y6/3(降灰)。	外面に降灰。口縁端部に浅い段あり。ロクロ左回転。
205	須恵器	杯蓋	SX02 (南半) 2層 SX02 (南半) 上層	①(12.4) ②4.2	外面1/2回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部に沈線。	A: 2mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。B: 良好。C: 外青灰5PB6/1～灰7.5Y6/1、内青灰5PB6/1。	口縁端部に段あり。ロクロ左回転。
206	須恵器	杯蓋	SX02 (南半) 上層	①(14.0) ②4.1+α	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外青灰5PB6/1、内青灰5PB5/1。	口縁端部に段あり。ロクロ左回転。
207	須恵器	杯蓋	SX02 (北半) 上層	①(13.1) ②4.3	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。内面に同心円当て具痕あり。外面天井部体部に沈線。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰N5/。	口縁端部に非常に浅い段あり。ロクロ左回転。
208	須恵器	杯蓋	SX02 (南半) 上層	①(13.2) ②4.0	外面1/2回転ヘラケズリ。内面1/5回転ナデ後不定方向ナデ。他は回転ナデ。外面天井部体部に沈線。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N5/～灰N4/、内灰N6/。	口縁端部に段あり。ロクロ左回転。
209	須恵器	杯蓋	SX02 (北半) 上層	①(13.3) ②4.4	外面1/2回転ヘラケズリ。内面1/4回転ナデ後不定方向ナデ。他は回転ナデ。外面天井部体部に沈線。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共青灰5PB5/1、外(降灰)灰7.5Y/1。	外面に降灰。外面にヘラ記号。口縁端部に沈線あり。外面に杯蓋粘着、口縁端部に沈線あり。ロクロ左回転。
210	須恵器	杯蓋	SX02 (南半) 上層	①(13.9) ②3.8	外面2/3回転ヘラケズリ。内面一部回転ナデ後一定方向ナデ。他は回転ナデ。内面同心円当て具痕、後ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰N6/～灰N5/。	口縁端部に浅い段あり。ロクロ左回転。
211	須恵器	杯蓋	SX02 (南半) 上層	①(13.9) ②4.0+α	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面天井部体部に沈線。	A: 2mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。B: 良好。C: 外灰N7.5Y6/1～灰7.5Y5/1、内灰白N7/。	口縁端部を丸く仕上げる。ロクロ左回転。

表9 本堂遺跡14次調査出土遺物観察表⑨

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ※ () は復元	形態・技法の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備 考
212	須恵器	杯身	SX02 (南半) 上層	①(10.3) ②3.8 受部径 (13.0)	外面2/3回転ヘラケズリ。内面一部回 転ナデ後一定方向ナデ。他は回転ナ デ。	A: 4mm以下の白色砂粒を少量含む。 B: 良好。C: 内外共灰白N7/～灰 N6/。	口縁端部に浅い段あり。ロク ロ左回転。
213	須恵器	杯身	SX02 (南半) 上層	①(11.7) ②4.0 受部径 (14.3)	外面1/3回転ヘラケズリ。内面1/5回 転ナデ後不定方向ナデ。他は回転ナ デ。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。 B: 良好。C: 外青灰5PB5/1～灰 5Y6/1、内青灰5PB5/1。	外面に降灰。受部に杯蓋口縁部 軸着。口縁端部に浅い段あり。 ロクロ左回転。
214	須恵器	杯身	SX02 (南半) 上層	①(10.6) ②4.1 受部径 (13.4)	外面1/2回転ヘラケズリ。内面一部回 転ナデ後一定方向ナデ。他は回転ナ デ。	A: 4mm以下の白色砂粒を少量含む。 B: 良好。C: 外灰白N7/～灰5Y5/1、 内灰白N7/。	外面に降灰。外面にヘラ記 号。受部に杯蓋口縁部軸着。 口縁端部を丸く仕上げる。
215	須恵器	杯身	SX02 (南半) 上層	①(10.4) ②4.1 受部径 (12.9)	外面1/3回転ヘラケズリ。外面中央ケ ズリ残し。内面1/5回転ナデ後一定 方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外暗灰N3/～灰白5Y7/1、 内灰N6/。	外面に降灰。外面にヘラ記 号。受部に杯蓋口縁部軸着。 口縁端部を丸く仕上げる。内 面にシツタ痕あり。
216	須恵器	杯身	SX02 (南半) 上層	①(12.8) ②4.1 受部径 (15.5)	外面1/2回転ヘラケズリ。内面一部回 転ナデ後一定方向ナデ。他は回転ナ デ。	A: 3mm以下の白色砂粒を微量含む。 B: 良好。C: 外青灰5PB5/1～青黒 5B2/1、内青灰5PB5/1。	外面に降灰。受部に杯蓋口縁部 軸着。内面シツタ痕あり。 ロクロ右回転。
217	須恵器	提瓶	SX02 (北半) 上層	①(9.0) ②5.7～5.9+α	口縁部～頸部回転ナデ。頸部内面ナ デ?	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。 B: 良好。C: 外灰N6/、内灰N6/～灰 N4/。	頸部内面に降灰。
218	須恵器	提瓶	SX02 (南半) 上層	①10.8 ②13.5+α	口縁部～体部回転ナデ後、外面カキ メ。把手部ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。 B: 良好。C: 内外共灰白2.5Y7/1～灰 7.5Y4/1。	内外面に降灰。鉤状把手。
219	須恵器	甕	SX02 (南半) 上層	①(19.0) ②11.4+α	口縁部～頸部回転ナデ。体部外面平 行タタキ後上位カキメ、内面同心円 当て具痕あり。	A: 3mm以下の白色砂粒を少量含む。 B: 良好。C: 外灰白7.5Y7/1～灰 N5/、内緑灰5G5/1。	
220	須恵器	甕 SX02 (南半) 上層 SX02 (北半) 上層		①23.3 ②9.9+α	口縁部～頸部回転ナデ。体部外面擬 格子タタキ後ナデ、内面同心円当て 具痕あり。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。 B: 良好。C: 外灰N6/～青灰5PB5/1、 内灰N6/～暗灰N3/。	内面に降灰か?
221	須恵器	甕	SX02 (南半) 上層	①(22.6) ②12.7+α	口縁部～頸部回転ナデ。頸部内面磨 減のため調整不明。体部外面擬格子 タタキ後上位カキメ、内面同心円当 て具痕あり。	A: 2mm以下の白色砂粒を微量含む。 B: やや不良。C: 内外共灰白7.5Y7/1。	
222	須恵器	甕	SX02 (南半) 上層	①(21.0) ②10.6+α	口縁部～頸部回転ナデ。体部外面擬 格子タタキ後カキメ、内面同心円当 て具痕あり。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。 B: 良好。C: 外灰N6/～灰5Y4/1、内 灰5Y6/1～灰N5/。	内外面に降灰。焼き歪む。
223	須恵器	甕 SX02 (北半) 上層 SX02 (南半) 上層		①(25.0) ②9.5+α	口縁部～頸部回転ナデ。体部外面平 行タタキ後上位カキメ、内面同心円 当て具痕あり。	A: 4mm以下の白色砂粒をやや多量に 含む。B: 良好。C: 内外共灰N5/～灰 N4/、暗灰N3/～灰オリーブ5Y4/2～ 灰5Y4/1(降灰)。	内外面に降灰。
224	須恵器	甕	SX02 (南半) 上層	①25.2 ②9.9+α	口縁部～頸部回転ナデ後外面カキ メ。体部外面擬格子タタキ後カキ メ、内面同心円当て具痕あり。	A: 3mm以下の白色砂粒をやや多量に 含む。B: 良好。C: 内外共灰N6/～灰 N5/。	
225	須恵器	甕	SX02 (北半) 上層	①(36.0) ②13.8+α	口縁部～頸部回転ナデ、下位～頸部 内面ヨコナデ。体部外面平行タタ キ、内面同心円当て具痕あり。口縁 部外面に2条沈線、沈線上下位に波状 文。	A: 3mm以下の白色砂粒を少量含む。 B: 良好。C: 内外共灰N6/～灰5Y6/1 ～灰5Y5/1。	内面、口縁部外面端部に降灰。
226	須恵器	甕 SX02 (南半) 上層 灰原10区 (北半) 6層		①(41.0) ②17.4+α	口縁部回転ナデ。頸部外面指頭圧痕、 後ヨコナデ、内面ヨコナデ。体部外 面平行タタキ、内面同心円の当て具 痕あり。口縁部上位～下位外面カキ メ後口縁端部外面に1条沈線、上位～ 下位2段に1条沈線。口縁部外面沈線間 に2段波状文。	A: 4mm以下の白色砂粒をやや多量に 含む。B: 良好。C: 外青灰5PB5/1～ 暗青灰5PB4/1、内青灰5PB5/1。	焼き歪む。
227	須恵器	甕	SX02 (北半) 上層	①(45.6) ②13.7+α	口縁部～頸部回転ナデ、口縁部下位 ～頸部内面ヨコナデ。口縁端部に1条 沈線、口縁部外面に2条・2条・1条沈 線施文、沈線間に3段波状文。	A: 5mm以下の白色砂粒をやや多量に 含む。B: 良好。C: 内外共灰N5/～灰 N4/、灰7.5Y4/1～オリーブ黒7.5Y3/1 (降灰)。	内外面に降灰。
228	須恵器	甕	SX02 (南半) 上層	①(46.4) ②12.7+α	口縁部回転ナデ。口縁部上位～下位 外面に2条沈線3段、施文後沈線上下 位に波状文。	A: 2mm以下の白色砂粒を微量含む。 B: 良好。C: 外灰N4/、内灰N6/～灰 5Y5/1～灰オリーブ5Y5/3。	内外面に降灰。
229	須恵器	甕	SX02 (南半) 上層	①(44.0) ②11.8+α	口縁部回転ナデ。口縁部上位～中位 外面に2条沈線2段、施文後各沈線上 位に波状文。	A: 4mm以下の白色砂粒をやや多量に 含む。B: 良好。C: 外灰N6/～灰 7.5Y4/1、内灰5Y6/1～灰オリーブ 5Y6/2。	外面降灰。焼き歪む。
230	須恵器	甕	SX02 (南半) 上層	①(42.6) ②10.8+α	口縁部回転ナデ。口縁端部外面下端 に1条沈線、施文後沈線上位に波状 文。外面に2条・1条・1条沈線、施文 後各沈線間に波状文。	A: 2mm以下の白色砂粒を微量含む。 B: 良好。C: 外灰N5/～緑灰5G5/1、 内灰白N7/～灰7.5Y5/1。	口縁端部外面に波状文。
231	須恵器	甕	SX02 (南半) 上層	①(51.0) ②14.8+α	口縁部回転ナデ。頸部外面タテナ デ・ヨコナデ、内面ヨコナデ。体部 外面平行タタキ、内面同心円当て具 痕あり。口縁部外面カキメ後、口縁 端部に1条沈線、上半に2条・1条沈線 後、沈線間に波状文。	A: 5mm以下の白色砂粒をやや多量に 含む。B: 良好。C: 内外共灰N5/～灰 N4/。	

表10 本堂遺跡14次調査出土遺物観察表⑩

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ※ () は復元	形態・技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備 考
232	須恵器	甕	SX02 (南半) 上層 SX02 (北半) 上層	①(48.0) ②13.9+α	口縁部～頸部回転ナデ。体部外面平行タタキ。内面同心円当て具痕あり。頸部外面上半に2条沈線2段。施文後各沈線上位に波状文。口縁端部外面下端に1条沈線、施文後沈線上位に波状文。頸部外面に複数の竹管文。	A:4mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。B:良好。C:内外面共灰N6/～暗緑灰5G3/1～灰オリブ5Y6/2。	内外面に降灰。接合不可の同一個体あり。口縁端部外面に波状文。沈線上下位に竹管文。
233	須恵器	甕	SX02 (南半) 上層	②14.9+α	口縁部回転ナデ。頸部ヨコナデ。体部外面平行タタキ後横ナデか?内面同心円当て具痕。口縁外面に2条沈線2段、施文後沈線間に波状文。	A:4mm以下の白色砂粒を少量含む。B:やや不良。C:外灰7.5Y5/1～灰N4/、内灰7.5Y6/1～にぶい褐7.5YR6/3。	
234	須恵器	杯蓋	SX01 P-45 埋土中	①(9.0) ②2.4+α ③(11.2)	外面1/5ナデ。内面1/5不定方向ナデ。他は回転ナデ。	A:0.5～1.5mmの白色砂粒をやや多く含む。B:良好。C:外明青灰5PB7/1、内青灰5PB6/1。	焼き歪む。
235	須恵器	杯身	SX01 P-45 埋土中	①(10.0) ②4.0+α	底部外面ナデ、内面不定方向ナデ。他は回転ナデ。	A:微細な白色砂粒を微量含む。B:良好。C:外青灰5PB6/1～内灰N7/、内青灰5PB6/1。	焼き歪む。 外面にへら記号。
236	須恵器	高杯	灰原内 P-1 埋土	②2.7+α	脚部回転ナデ。	A:微細な白色砂粒を微量含む。B:良好。C:内外共灰N6/。	
237	須恵器	器台	灰原内 P-20 埋土	②6.5+α	体部回転ナデ。残存部外面上位に2条沈線、沈線下位に波状文。	A:微細な白色砂粒を少量、2～3mmの礫を微量含む。B:良好。C:外灰N6/、内灰N5/。	外面に細かい波状文。透かしは4ヶ所か?
238	土師器	杯	灰原内 P-11 埋土	①(13.8) ②4.0 ③(9.6)	摩滅の為調整不明。	A:微細な白色砂粒、雲母を少量含む。B:不良。C:内外共浅黄2.5Y7/3。	
239	須恵器	甕 (匱台)	SX02 (北半) 上層	杯身: ①(15.2) ②2.6+α 杯蓋: ②3.3+α 2.1+α	甕: 体部外面縦格子タタキ、内面同心円当て具痕あり。 杯身・杯蓋: 回転ナデ、蓋内面1/3回転ナデ後一定方向ナデ。	甕 A:3mm以下の白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰5Y6/1、内灰N5/～灰オリブ5Y4/2。 杯 A:0.5～2mm以下の白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰7.5Y6/1・7.5Y5/1・N6/～オリブ黒7.5Y3/1	甕内外面、杯外面に降灰。杯身口縁端部に浅い段あり。
240	須恵器	切削物	灰原9区 3層灰層	②3.4+α	端部指頭圧痕。外面ナデ、内面ヨコナデ後同心円当て具痕。へら切り。	A:2mm以下の白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共灰N5/。	甕製作時の切り落とし片。
241	須恵器	杯蓋	SP21 埋土	①(17.2) ②1.6+α	口縁部回転ナデ。	A:微細な白色砂粒を微量含む。B:良好。C:外灰7.5Y4/1、内灰N5/。	杯B。
242	須恵器	皿	SP01 埋土上層	①(16.0) ②2.3 ③(13.6)	口縁部～底部内面回転ナデ。外面摩滅のため調整不明。	A:微細な白色砂粒を微量含む。B:不良。C:内外共灰白2.5Y8/2～灰N4/。	
243	土師器	椀	SP19 埋土上層	②2.8+α 高台径(10.1)	体部下位外面～高台ヨコナデ。内面摩滅のため調整不明。	A:微細な白色砂粒を少量含む。微細な金雲母を多量に含む。微細な赤褐色粒を微量含む。B:やや不良。C:内外共橙7.5YR/6。	
244	須恵器	杯蓋	SC01 P60 埋土	①(13.1) ②3.8+α	外面1/3回転ヘラケズリ。内面1/4回転ナデ後一定方向ナデ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に段あり。	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰N6/～内灰N4/、内灰N5/。	口縁部外面に降灰。ロクロ左回転。
245	須恵器	甕	SC01 (3区下方) 1層	②1.3+α	口縁部回転ナデ後外面に波状文。	A:微細な白色砂粒を微量含む。B:良好。C:外暗灰N3/～内灰N6/、内灰N4/。	外面に降灰。 口縁部外面に波状文。
246	須恵器	杯蓋	SD01-3 埋土	②1.8+α つまみ径3.1	外面1/2回転ヘラケズリ。内面1/5回転ナデ後不定方向ナデ。他は回転ナデ。	A:1mm以下の白色砂粒を微量含む。B:不良。C:外にぶい褐7.5YR6/3～にぶい褐7.5YR5/4、内にぶい褐7.5YR6/3。	杯B。
247	須恵器	杯身	SD01-2 埋土	①(15.3) ②5.2 高台径(7.7)	口縁部～底部回転ナデ。	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰N6/～内灰N5/、内灰5Y6/1。	杯B。
248	土師器	椀	SD02-2 埋土	②2.8+α 高台径(7.2)	体部～底部ヨコナデ。	A:2mm以下の白色砂粒を微量含む。微細な金雲母を少量含む。B:やや不良。C:外橙5YR6/8、内にぶい黄橙10YR7/3～橙7.5YR6/6、高台内黒褐10YR3/1。	
249	瓦質 土器	鉢	SD01-3 埋土	②6.3+α	摩滅のため調整不明。	A:3mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。B:不良。C:外にぶい黄橙10YR7/4～にぶい黄褐10YR5/3、内にぶい橙7.5YR7/4～にぶい黄橙10YR7/4、断面にぶい黄橙10YR7/4～暗灰N3/。	煤付着か? ロクロ左回転。
250	瓦質 土器	釜	SD01-2 埋土	②6.9+α	体部外面ヨコナデ、内面工具によるナデか?体部下位に鈐あり。	A:3mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。2mm以下の角閃石を少量含む。微細な金雲母を微量含む。B:不良。C:外にぶい黄橙10YR7/4～黒褐2.5Y3/1、内にぶい黄橙10YR7/4、断面にぶい黄橙10YR7/4～オリブ黒7.5Y3/1。	外面に煤付着。接合不可同一個体あり。

表11 本堂遺跡14次調査出土遺物観察表⑪

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ※ () は復元	形態・技法の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備 考
251	瓦質 土器	釜	SD01-4 埋土	②8.6+α	頸部～体部上位ヨコナデ。肩部内面に指頭圧痕。体部外面斜方向ヘケ後ナデ、内面ナデ。肩部外面に放射状刺突文。胴部上位外面に連続刺突文。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 不良。C: 外灰オリープ5Y4/2～オリープ黒5Y3/1、内灰オリープ5Y6/2、胎土浅黄2.5Y7/3～黒5Y2/1。	外面に煤附着。肩部外面放射状刺突文。胴部上位外面に連続刺突文。
252	白磁	碗	SD01-1・2間ベルト 2層	②2.5+α	口縁部回転ナデ後内外面施釉。	A: 灰白7.5Y8/1。密。B: やや不良。C: 釉灰白2.5GY8/1。	白磁碗IV類。釉に細かな気泡あり。やや空色を帯びる。
253	土製品	円盤状土製品	SD01-4 埋土	最大長3.5 最大幅3.7 最大厚0.5	摩滅のため調整不明。片面中央に指頭圧痕。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。微細な金雲母をやや多量に含む。B: やや不良か? C: 表裏共にぶい黄橙10YR7/4。	
254	須恵器	杯身	SD02-2 埋土	①(15.0) ②6.8 高台径(10.0)	底部内面回転ナデ後不定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 不良。C: 外灰黄2.5Y6/2～灰5Y6/1、内灰7.5Y6/1。	
255	須恵器	杯身	SD05 (拡張部) 埋土	①11.2 ②4.6 受部径13.9	外面2/3回転ヘラケズリ。内面1/4回転ナデ後一定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 3mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外灰N5/～灰白N7/、内灰N5/。	口縁端部を丸く仕上げる。ロクロ左回転。
256	須恵器	杯身	SD05 (拡張部) 埋土	①(13.1) ②3.8 高台径(8.5)	底部内面回転ナデ後一定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外灰N6/～灰N5/、内灰N6/。	杯B。板状圧痕。
257	須恵器	杯身	SD05 (拡張部) 埋土	①(15.5) ②5.6 高台径8.5	底部内面回転ナデ後不定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 1mm以下の白色砂粒を微量含む。B: 不良。C: 外灰白N7/～灰N6/、内灰白5Y7/2。	杯B。
258	須恵器	杯	SD05 (拡張部) 埋土	②3.0+α ③7.7	底部外面摩滅のため調整不明、内面回転ナデ後一定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 1mm以下の白色砂粒、黒色粒子を微量含む。B: 不良。C: 外灰N6/～灰白7.5Y7/1、内灰黄2.5Y7/2。	
259	須恵器	皿	SD05 (拡張部) 埋土	①(18.0) ②2.5 ③(13.4)	底部外面ヘラ切り後ナデ。他は回転ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒を微量含む。B: やや不良。C: 内外共灰7.5Y6/1～灰黄2.5Y6/2。	
260	須恵器	鉢	SD05 (拡張部) 埋土	①(14.3) ②5.3+α	口縁部～体部回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外灰白N7/～灰N5/、内灰白N7/。	
261	須恵器	短頸壺	SD05 (拡張部) 埋土	①(11.2) ②4.8+α	口縁部～体部回転ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 外灰N6/～灰N5/、内灰N6/。	
262	須恵器	杯蓋	調査区東側壁面 清掃中 (表土)	①(11.6) ②3.8	外面1/2回転ヘラケズリ。内面1/2不定方向ナデ。他は回転ナデ。外面天井部体部境に段あり。	A: 微細な白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 内外共青灰5PB6/1。	口縁端部に沈線あり。ロクロ右回転。
263	須恵器	杯蓋	表探 (調査区 北端)	①(13.0) ②4.7	外面2/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒をやや多量に含む。B: 良好。C: 外灰N5/、内灰N6/。	口縁端部に浅い段あり。内面にシツタ痕? ロクロ右回転。
264	須恵器	杯身	3区 東側斜面 (3区) 1層	①(9.0) ②3.1+α	外面1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外明青灰5PB7/1、内青灰5PB6/1。	口縁端部に浅い段あり。ロクロ左回転。
265	須恵器	杯身	1-3区 検出中	①(13.9) ②5.0 高台径(10.2)	底部外面ナデ、内面不定方向ナデ。他は回転ナデ。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: 良好。C: 外にぶい赤褐2.5YR5/4～褐灰5YR5/1、内にぶい赤褐2.5YR5/4。	
266	青磁	碗	3区 東側斜面 (3区) 2層	②2.7+α 高台径(4.7)	高台削り出し。体部外面下位に櫛目? あり。内面見込みに沈線。体部内外面に施釉。	A: 灰白5Y7/1。微細な黒色粒子白色砂粒を微量含む。B: 良好。C: 釉オリープ黄5Y6/3。	やわらかい光沢のある透明釉。
267	瓦	平瓦	2区 東側斜面 客土	長7.7+α 幅7.5+α 最大厚2.4	凹面布目痕。凸面格子タタキ。	A: 1.5mm以下の白色砂粒を微量含む。B: 不良。C: 凹凸共にぶい黄橙10YR7/4、断面黄灰2.5YR4/1。	
268	瓦	平瓦	2区 北東斜面 耕作土	長8.2+α 幅11.1+α 最大厚2.1	凹面布目痕。凸面縄目タタキ。	A: 2.0mm以下の白色砂粒をやや多く含む。B: 不良。C: 凹凸共浅黄橙10YR8/3。	
269	瓦	平瓦	2区 東側斜面 客土	長8.4+α 幅11.6+α 最大厚2.8	凹面ナデ。凸面格子タタキ?	A: 1.5mm以下の白色砂粒をやや多く含む。B: やや不良。C: 凹褐灰5YR6/2、凸浅黄橙10YR8/3。	

Ⅲ．まとめ

1. 遺構の変遷

14次調査は、造成等により著しく削平を受け、確認された遺構は少ない。そのうち2区で確認された灰原は、牛頸窯跡群最古段階のⅢA期と考えられる須恵器の良好な資料を多量に包含していたことが特筆される。これらの灰原出土須恵器については、次節で詳細に検討することとし、以下では、それ以外の遺構の変遷について概観することとする。

古墳時代 この時期の遺構としては竪穴住居SB01と土坑SX02がある。SB01出土の遺物は非常に少ないが、6世紀中頃にあたると考えられる。SX02は、工人集落を想定する一要素として注目されるものである。出土遺物については次節で詳しく検討するが、6世紀中頃に所属すると考えられる。これら遺構と灰原との前後関係は前章でも述べたが、これらが廃絶後あまり時期を隔てずに、灰原が形成されていることは明らかである。集落が埋まることが予想される場所に窯跡を選地しており、集落と窯跡との関係性について究明する際の手がかりとなる重要な資料といえよう。

奈良時代以降 奈良時代以降の遺構としては、SB01とSD01・02・05がある。SB01は8世紀中頃から後半（ⅦB期）（註1）、SD02・05も8世紀中頃から後半（ⅦB期）である。SD01は出土遺物の須恵器が8世紀中頃から後半（ⅦB期）、白磁が11世紀後半から12世紀前半、瓦器が13世紀後半以降のものである。溝北辺付近でSB01を切る形になるが、何度も掘り直されて北側へ溝が広がっていくことが想定されること、走行方向が建物と平行することから、同時に存在していた可能性も考えられる。SD05も建物方向と平行することから、8世紀後半には、掘立柱建物とそれを区画する溝、あるいは溝を伴う掘立柱建物の存在が想定される。

平安時代以降については、確認された遺構はSD01のみであるが、灰原等の中から概期の遺物が散見される。

2. 灰原出土須恵器の時間的位置付けと牛頸窯跡群開窯期の様相

現在まで、牛頸窯跡群内で知られている最古段階の資料は野添6号窯跡出土の須恵器で、6世紀中頃のⅢA期（註2）に位置付けられている。本堂遺跡14次調査灰原出土の須恵器については、前章で各遺物の特徴を詳述しているが、野添6号窯跡資料と類似することは明確である。ここでは、まず灰原出土須恵器の型式的特点を抽出し、野添6号窯・9号窯、Ⅱ期の重留窯跡出土須恵器との型式的特点の比較検討により、牛頸窯跡群における本遺跡出土須恵器の時間的位置付けをおこなう。その後、宗像市日焼原窯跡群・大阪府陶邑窯跡群などと比較検討することにより、技術系譜や牛頸窯跡群開窯期の土器相の特徴について若干言及してみたい。

（1）本堂遺跡14次調査出土須恵器（第34図）

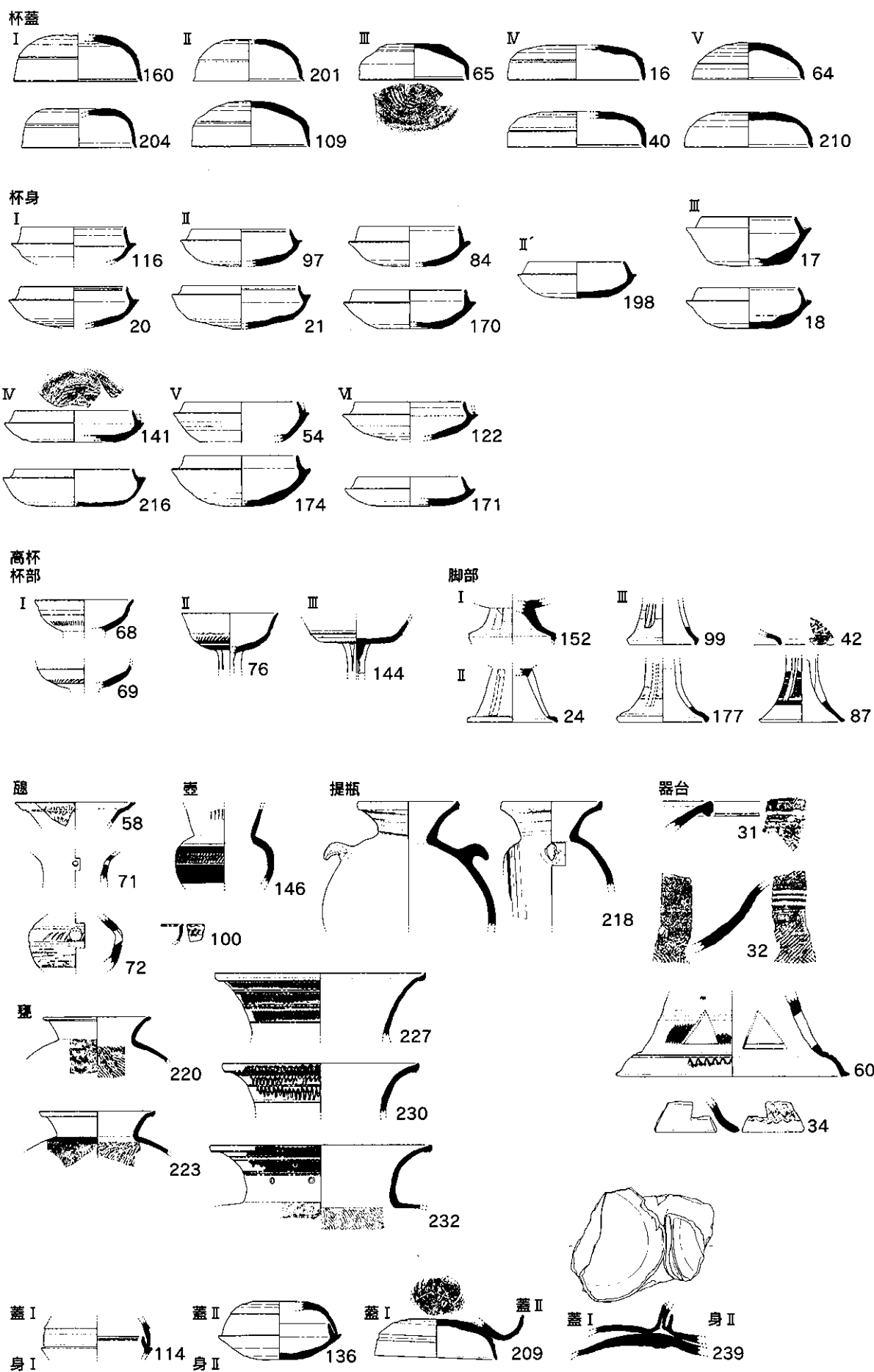
各器種の型式的特点について詳細に検討する。特に蓋杯・高杯については、技法や法量などから類型化して、その特徴を述べることとする。

杯蓋 はじめに、Ⅰ類は、46・89・95・160・195・204などである。天井部が高く丸みを持ち、体部は長くまっすぐ延びる。天井部・体部境が明瞭で浅い段・沈線が巡り、口縁端部に内傾する段、浅い段がつく。口径はおよそ11～13cmで法量的にもまとまりがある。次にⅡ類は109～111・159・201～207などで蓋の主体をなす。口径が11～13cm。天井部が比較的高く丸みを持ち、体部が比較的長く延びる。天井部・体部境が比較的明瞭で沈線が巡り、口縁端部に浅い段がつく。次に、天井部のケズリが非常に雑で天頂部が平坦となる粗雑な作りのもの（65・181）が確認でき、これをⅢ類とする。Ⅳ類は16・40・79・92・113・115・161・194・210などの一群である。口径は14～16cm。天井部が平坦で、体部はまっすぐ延びる。天井部・体部境は明瞭で段・沈線が巡る。口縁端部は浅い段を施すものと丸く仕上げるものがある。最後にⅤ類は64・78・158・166・210などである。天井部は低く丸みを持ち、天井部から体部へのつながりがなだらかで、体部は丸みをもつ。口縁端部は、丸く仕上げられるものがほとんどである。

杯身 はじめに、Ⅰ類は9・20・75・84・95・115・116・139・175・176などである。口径10cm前後。最大径12～13.5cm。底部は丸みを持ち深く、立ち上がりは直立して高い。受部はシャープに延びる。口縁端部に内傾する段・浅い段をもつ。Ⅱ類は、杯身の主体となる一群である。口径10cm前後。底部・体部のプロポーションはⅠ類と同様である。立ち上がり・受部はややシャープさを欠き、口縁端部に沈線・浅い段を施すものもあるが、丸く仕上げるものが多い。この一群は細部の技法においてバリエーションが多く、さらに分類できる可能性が高い。次に、5・196・198のように、立ち上がりが内湾するものをⅡ'類とする。また、17・18のように、形態・技法はⅠ類に似るが、底部外面頂部がケズリ残される粗雑な作りのものをⅢ類とする。Ⅳ類は22・126・141・173・213・216などの一群である。口径11.7～12.8cm、最大径14.3～15.5cm。底部は浅く平坦である。立ち上がりはやや内傾して、長さもやや短くなる。口縁端部に浅い段が巡るか丸く仕上げられる。Ⅴ類は54・174・190などである。口径11～13cm。底部は大きく発達し、立ち上がりは内傾して短く延びる。Ⅵ類は98・122・171である。口径11～12cm、最大径14cm前後。底部は浅く、立ち上がりは内傾して短く立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げられる。

蓋と身の組み合わせについては、釉着資料から蓋Ⅰ類と身Ⅰ類・Ⅱ類、蓋Ⅰ類と蓋Ⅱ類が確認できる。また技法から蓋Ⅲ類と身Ⅲ類、形態・法量から蓋Ⅳ類と身Ⅳ類、蓋Ⅴ類と身Ⅵ類の組み合わせが推定される。

高杯 高杯については、すべて破片資料であり、杯部から脚部まで全形を知るものの出来るものはない。脚部の長さや杯部の形態から杯部・脚部をそれぞれ3類に分類する。脚部のⅠ類は、短脚のものである。脚端部が下方内側へ鋭く折れ、古い特徴を備えたものである。Ⅱ類は脚基部が太く、やや脚が延びたもので、脚端部付近で一旦外側へ折れたあとわずかに下へ延びる。三方向に透かしを穿つ。Ⅲ類は長脚化したもので、三方向に1段透かしを穿つ。脚端部が短く下方へ折れるもの（99）、急激に広がり端部が短く折れ、沈線が巡るもの（177）、緩やかに大きく広がるもの（87）などがある。まれに42のように脚裾部に波状文が施されるものがある。杯部のⅠ類は杯底部が丸みを持ち、体部が外反する。底部外面に刺突文が施される。Ⅱ類は底部がやや平坦に



第34圖 灰原出土須惠器器種一覽圖 (1/6)

なり、杯部が深い。Ⅲ類は底部が平坦で体部が直線的に上へ延びる。脚部は細く長脚で、2段透かしが穿たれる可能性がある。杯部と脚部の組み合わせとしては、杯部Ⅰ類・Ⅱ類と脚部Ⅲ類が考えられる。

その他の器種 甕は、9・58・72・100のように頸部の基部は比較的太く、口縁部が一度屈曲してから短く延び、端部は内傾する段又は面をもつ。口縁部と頸部に波状文を施す。胴部は最大径が中位にある球体で、沈線に画されて刺突文を施す。

壺は長頸壺と推定されるものが1点ある。口頸部は、基部が太く口縁部が直線的に外反する。体部は球形をなし、最大径を中位にもつ。口頸部に簾状文状の刺突文、体部には沈線で区画された間に刺突文が施文される。

器台は、台部外面上半に沈線・波状文が2段ほど施され、下半部にタタキ目が残る。脚部は、緩やかに外反しながら大きく広がり、裾部で大きく折れて段をなし脚端部は面をなすものと、そのまま外反して広がり端部が丸く仕上げられるものがある。文様は沈線と波状文が数段施され、長方形・三角形の透かし窓が穿たれる。透かしは千鳥状でなく、縦に並ぶものと推定される。

甗は、中型無文のものと大型有文のものがある。大型品は、口頸部が大きく外反し、沈線と波状文が1から3段施される。特異なものとして、口縁端部を下方へ肥厚させ幅広い口唇部に波状文が施されるもの、頸部に千鳥状に竹管文が刺突されるものがある。

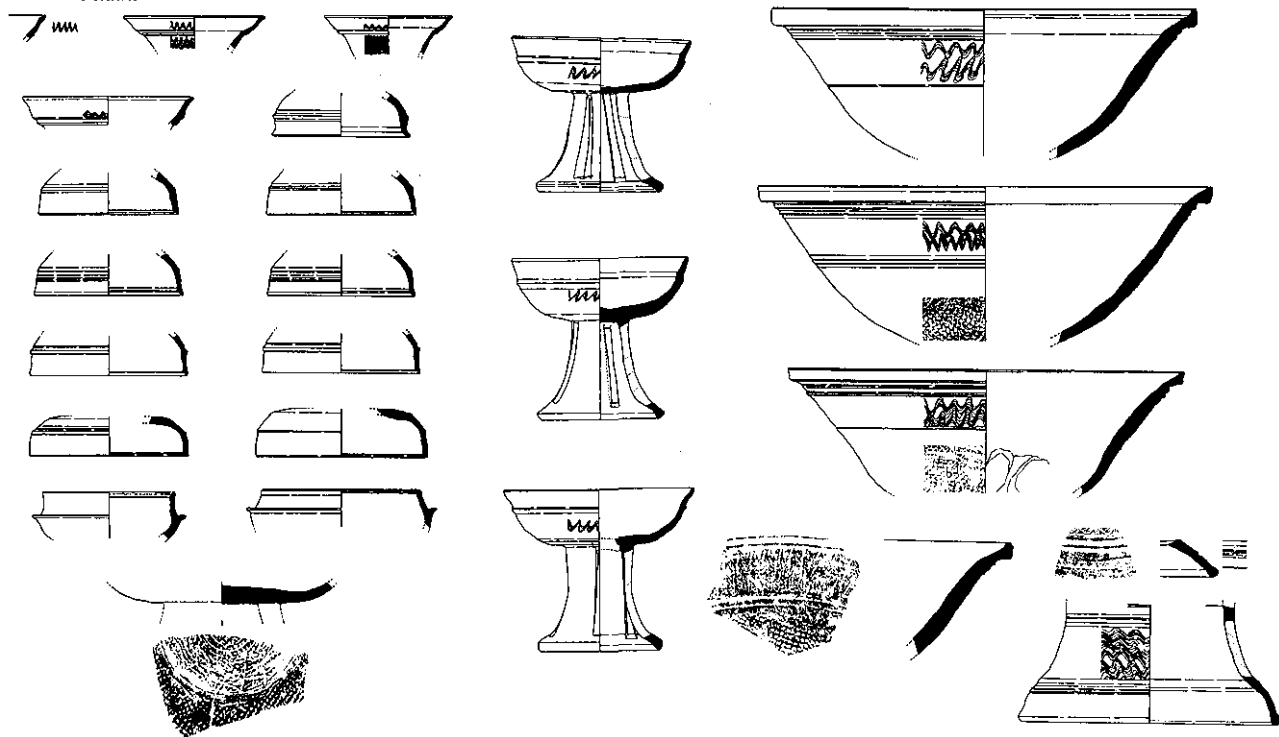
(2) 野添6号・9号窯跡との比較 (第35図)

野添窯跡6号・9号窯については、真野和夫氏により須恵器の型式分類が行われるとともに編年が提示され、6号窯跡がⅢA期に、9号窯跡がⅢB期に位置付けられている(註3)。蓋杯は、報文中のa・b類がⅢA期に、c類がⅢB期の型式とされている。

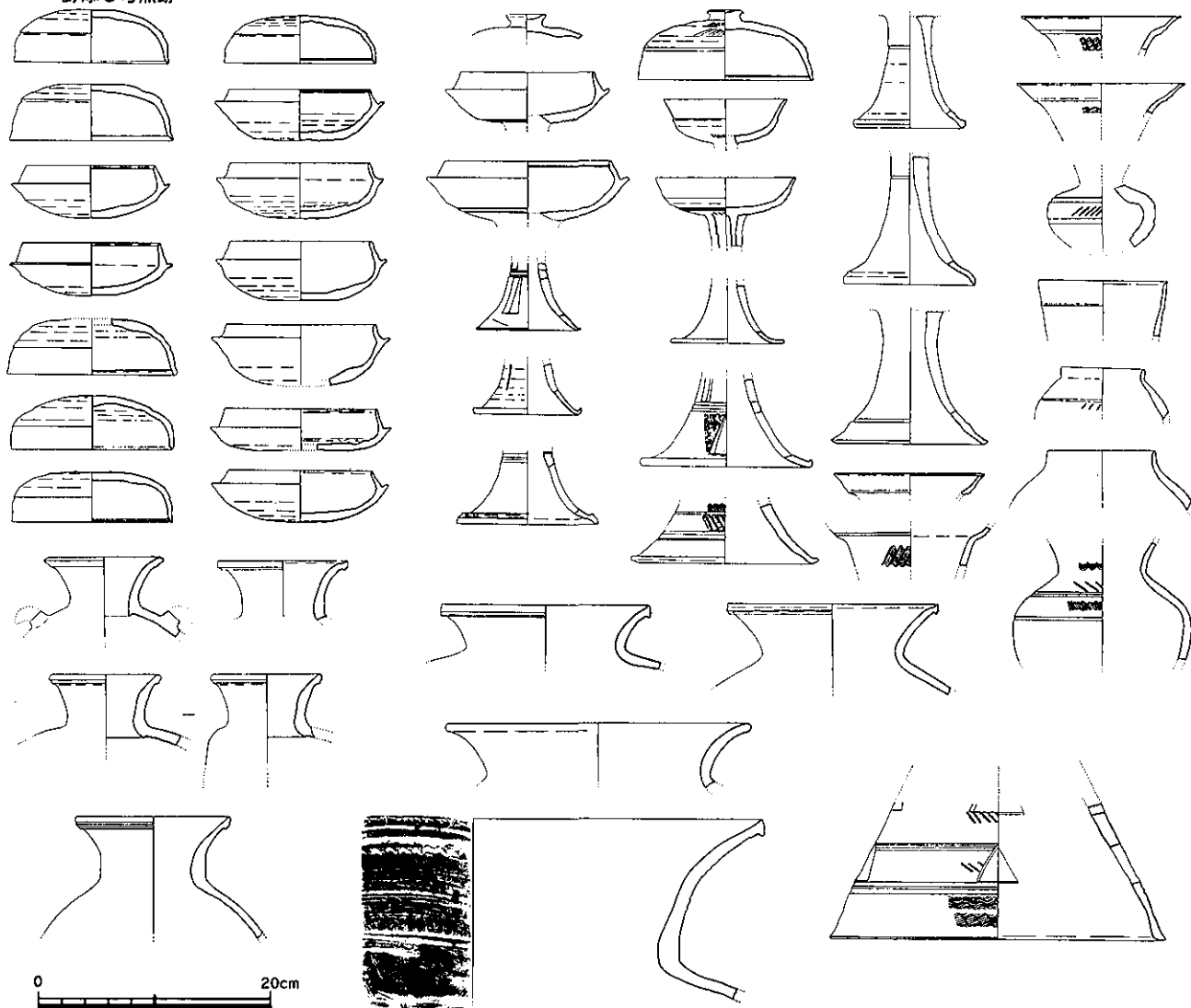
蓋杯については、本堂14次の蓋Ⅰ類、杯身Ⅰ類は蓋杯a類に比べ、天井部が高く天井部・体部の境が明瞭で、細部に古い特徴をよく残す。Ⅱ類とa類では、形態・調整ともに共通性が高い。b類はⅡ類に比べ、天井部が低く扁平で、天井部・体部の境がやや不明瞭になっている。形態的には、Ⅰ類が古い一群で、Ⅱ類とa・b類は併行しながらも、b類がやや新しい特徴をもつ一群といえる。また杯身b類の中で体部が大きく発達したものは、本堂14次の杯身V類と特徴が一致しており同じ型式と考えられるが、野添9号窯跡でも散見されることから、新しい型式である可能性が高い。法量では、Ⅰ・Ⅱ類が12cm前後であるのに対し、a・b類が14cm前後と大型化している。大阪府陶邑窯跡群では、この時期に蓋杯の口径が大型化するが、本堂14次のものは小型のものが多いことから、法量的に前段階の古い特徴を残しているとすることができ、形態からみた各型式の前後関係と合致する。

次に高杯では、杯部は本堂14次のⅠ・Ⅱ類と野添6号窯跡出土高杯が共通した特徴をもち、Ⅲ類は次段階の野添9号窯跡資料との共通性が指摘できる。脚部は、Ⅲ類の87・177の脚裾部形態に野添6号窯跡出土高杯と類似するものがあるが、野添6号のものは脚中位に沈線が巡って長脚2段透かしとなるものが多く新しい特徴をもつ。Ⅰ・Ⅱ類は短脚で、野添6号窯跡に共通するものではなく、古い特徴をもつものである。特にⅠ類はⅠ期の特徴をもつもので、他に同時期と考えられる資料が出土していない。所属層は灰原の2次堆積層であり、複数時期の遺物が出土しているた

重留窯跡



野添6号窯跡



第35図 重留窯跡・野添6号窯跡出土須恵器 (1/6)

め窯で焼成された確証は少ないが、灰原に含めておく。いずれにしても、蓋杯と同様、本堂14次のもは野添6号窯跡と同時期のものを含みながらも古い一群が認められる様相を呈す。

これらのことから、本堂14次灰原資料は、野添6号窯跡資料より確実に一部先行しながら併行する時期に位置付けることができる。さらに野添6号窯跡出土資料は、本堂14次資料に一部後続する一群を含むことが確実である（註4）。

（3）重留窯跡との比較（第35図）

小田編年のⅡ期に位置付けられる資料である（註5）。蓋杯は、本堂14次Ⅰ類のものに比べ、高さ・深さがあり、体部との境が明瞭で、段・受部がシャープである。口縁端部の段も沈線状でしっかりしており、大きな相違が認められる。高杯は、本堂14次脚部Ⅲ類の99が端部を屈曲させるタイプで類似するが、重留のものに比べ脚が細く屈曲部が下に長く延びるため、新しい形態であろう。また器台は、重留例と比較して本堂14次のもは脚部の広がりが大きくなっている。各器種とも、本堂14次の古い型式と重留窯跡との型式学的な格差は大きい。

これらのことから、本堂14次灰原資料の時間的位置付けについては、Ⅱ期に上げるのではなくⅢA期に含めて概期の古段階とし、現在までⅢA期の標識資料であった野添6号窯跡資料をⅢA期の新段階とする編年案を提示してみたい。

（4）各型式の技術系譜と牛頸窯跡群開窯期の特徴

本堂14次資料の各型式については、野添窯跡群・重留窯跡との比較により時期を特徴づけるものであることは明らかであるが、他地域の窯跡との技術的な繋がりや工人差を示すものもある。宗像窯跡群の一支群である稲元日焼原窯跡群の中でⅢA期に位置付けられている3号窯跡では、本堂14次の高杯脚部Ⅲ類のうち、脚裾部が強く外側へ折れ端部が下方へ短く屈曲して沈線が巡るもの（177）と同じ作りの高杯脚部が確認できる（註6）。これは野添6号窯跡でも認められる。また高杯脚裾部の外面に波状文を施す手法は、本堂14次と日焼原4号窯跡で確認できる。

本堂14次の杯蓋の主体をなすⅠ・Ⅱ類の形態的特徴は、陶邑編年Ⅱ型式1段階の杯蓋の形態的特徴と近似するが、細部において退化の傾向が顕著に認められる（註7）。重留窯跡の蓋杯とも形態的な親縁性が高く、Ⅰ・Ⅱ類は、5世紀後葉から6世紀前葉に北部九州に技術移入された陶邑系の技術が在地で展開した技術系譜に連なる型式である可能性を想定したい。陶邑では、Ⅱ型式2段階（TK10型式）になると、蓋杯が扁平で大形のものになるが、14次の蓋杯Ⅳ類については同じ特徴をもつことから、陶邑系の技術によって製作された型式と考えられる。また、本堂14次の232のように竹管の刺突文を施した特異な大甕の類例は、陶邑Ⅰ型式4段階のMT2-Ⅱ号窯跡で確認できる。時間的な隔絶があるため断定はしえないが、陶邑系の技術的な影響を推測することが可能であろうか。

蓋杯Ⅲ類は、天頂部・底頂部に回転ヘラケズリが施されておらず、主体となるⅠ・Ⅱ類と比べて極めて稚拙な技術により製作されたものである。南側に隣接する本堂17次調査でも出土が確認されている。これについては、新たに工人に組み込まれた在来工人とする可能性が提示されているが、ここでも同様の可能性を考えたい（註8）。

以上のように、本堂14次灰原資料については、北部九州における陶邑系の窯跡・宗像窯跡群・

畿内の陶邑窯跡群など複数系統の技術が複相的に併存する様相を確認することができた。これは新開・重留窯跡の土器相が、技術的なまとまりが極めて高いことと比べて対照的で、特徴的な様相を示すものである。福岡平野周辺では、6世紀中頃を境にそれ以前の窯跡が生産を終了し、代わって牛頸窯跡群が開窯して生産が集中することから、須恵器生産が再編成されたと言われている。本堂14次の土器様相から、牛頸窯跡群の開窯に伴い陶邑窯跡群の技術の導入や、福岡平野周辺・宗像地域からの工人集団の移動あるいは集約が行われたことにより、須恵器生産集団の再編成がなされた可能性を考えてみたい。これまでの文献資料の研究成果により、牛頸窯跡群の操業開始にあたって陶邑窯跡群から工人が移されたことが考えられており（註9）、近年、7世紀前半以降の陶邑窯跡群との関わりの証拠となるような考古資料が確認されている。今回の成果は陶邑窯跡群の影響が牛頸窯跡群の操業開始段階からあったことを示すものである。今後、牛頸窯跡群および九州内あるいは畿内における須恵器の製作技術の詳細な検討により、牛頸窯跡群の開窯期をはじめとした操業期間内の具体的な姿が明らかになることが期待される。

最後に、牛頸窯跡群における最初の本格的調査により群内最古の窯跡が確認され、出土須恵器編年が提示された野添窯跡群6号窯跡が世に出されてから約40年を経て、牛頸窯跡群最古段階の窯跡資料を幸運にも調査し、報告する機会を得た。この重要な資料を十分に報告・検討できたかは甚だ心許ないが、報告書を刊行し共有化されることで、最低限の責は果たしたものと考えたい。今後、ご指導、ご批判を賜れば幸いである。

註1 舟山良一2008「Ⅴ. 出土遺物の検討 1. 須恵器の編年」『牛頸窯跡群—総括報告書Ⅰ—』大野城市文化財調査報告書第77集

註2 八女市教育委員会1969「塚ノ谷窯跡群」八女古窯跡群調査報告Ⅰ

真野和夫1970「須恵器の編年」『野添・大浦窯跡群』福岡県文化財調査報告書第43集 福岡県教育委員会

註3 前掲註1

註4 時間的な位置付けについては、福岡大学名誉教授小田富士雄氏に資料を実見していただき、ご指導・ご教示を賜った。また職場の上司である舟山良一氏、先輩である石木秀啓氏、林潤也氏には議論にお付き合い頂き、多くのご教示を得た。記して感謝の意を表したい。

註5 横山邦継編1988「重留遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集 福岡市教育委員会

註6 伊崎俊秋編1989「稲元日焼原」宗像市文化財調査報告書第22集 宗像市教育委員会

註7 中村浩編1976「陶邑Ⅰ」大阪府文化財調査報告書第28輯 財団法人大阪府文化財センター

中村浩編1978「陶邑Ⅲ」大阪府文化財調査報告書第28輯 大阪府教育委員会

中村浩2001「和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年」

註8 石木秀啓2008「Ⅲ.まとめ 3. 17次調査地出土須恵器について」『牛頸本堂遺跡群Ⅵ』大野城市教育委員会

註9 渡辺正気1995「第3章第6節 倭国の形成と発展の中で」『春日市史』上巻

圖 版



(1) 調査地全景（南から）



(2) 灰原検出状況（北から）



(1) 灰原1・2区間土層（南から）



(2) 灰原2・3区間土層（B-B'）（南から）



(1) 灰原3・4区間土層 (C-C') (南から)



(2) 灰原8・9区間土層 (C-C') (南東から)



(1) 灰原5・6区間土層 (D-D') (南から)



(2) 灰原9・10区間土層 (D-D') (南東から)



(1) 灰原3・7区間土層 (A-A') (東から)



(2) 灰原5・9区間土層 (A-A') (南東から)



(1) S X 02遺物出土状況（北から）



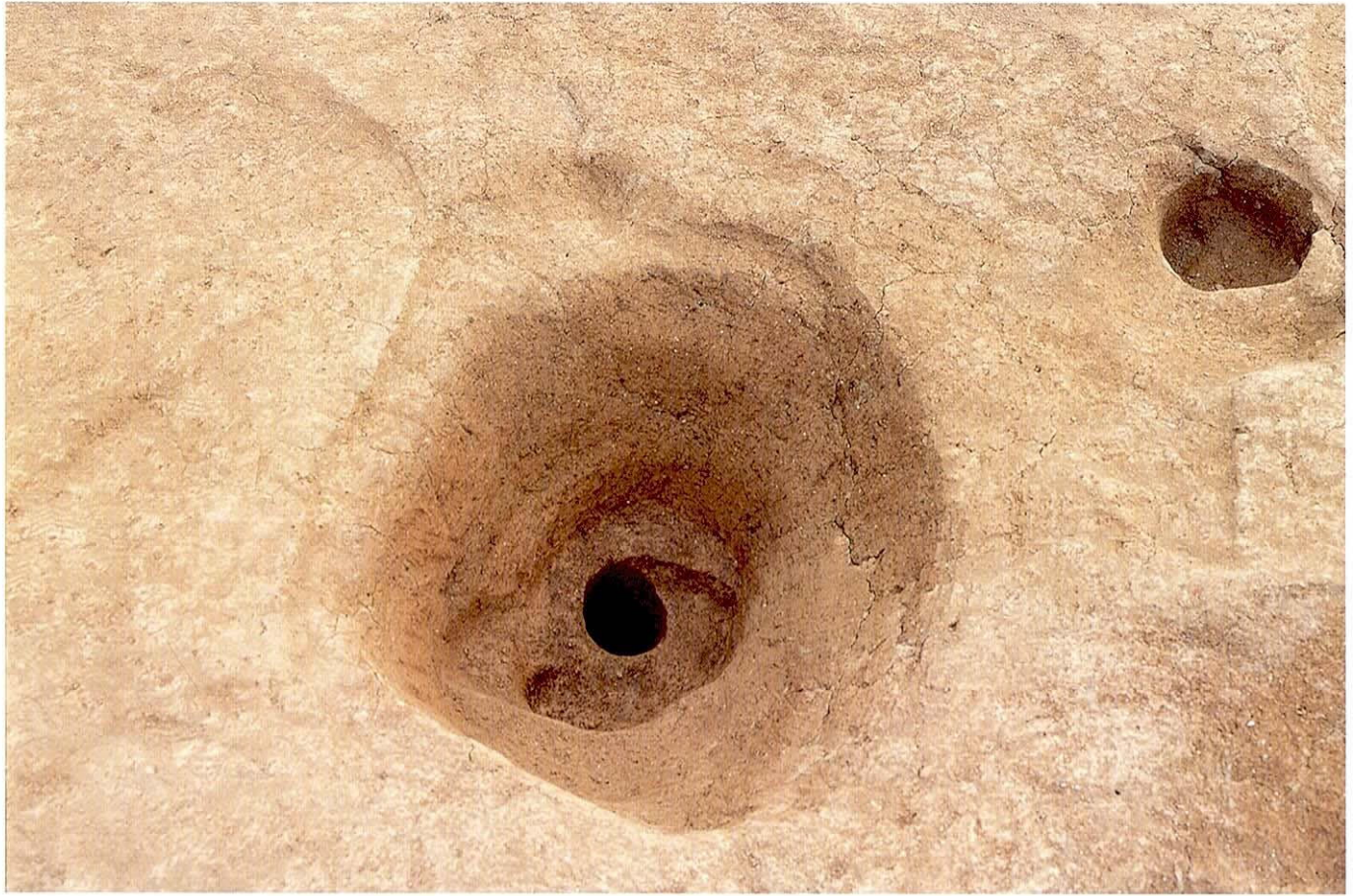
(2) S X 02下層粘土出土状況（北から）



(1) 調査区2区全景 (南から)



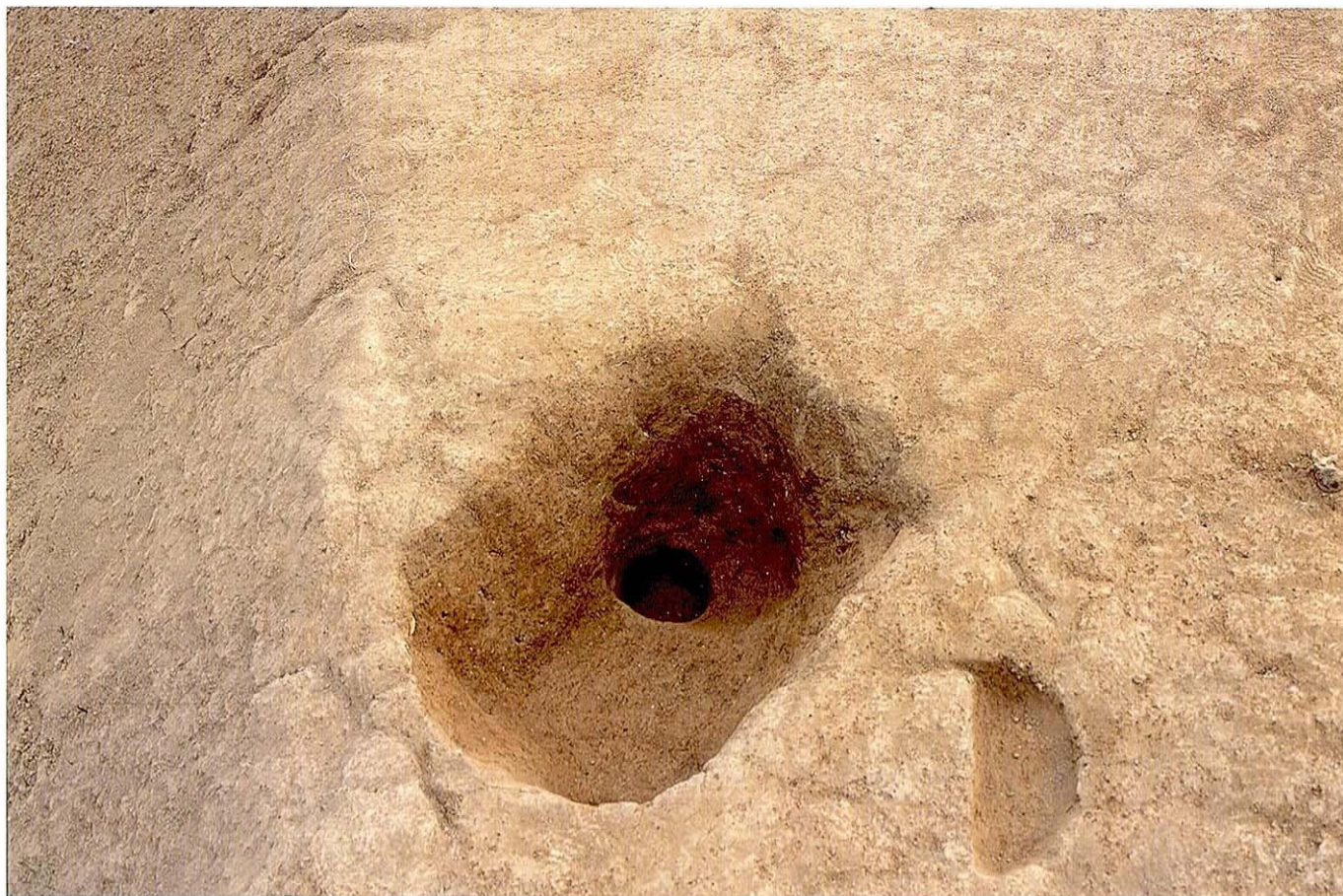
(2) SB01・SD01全景 (南西から)



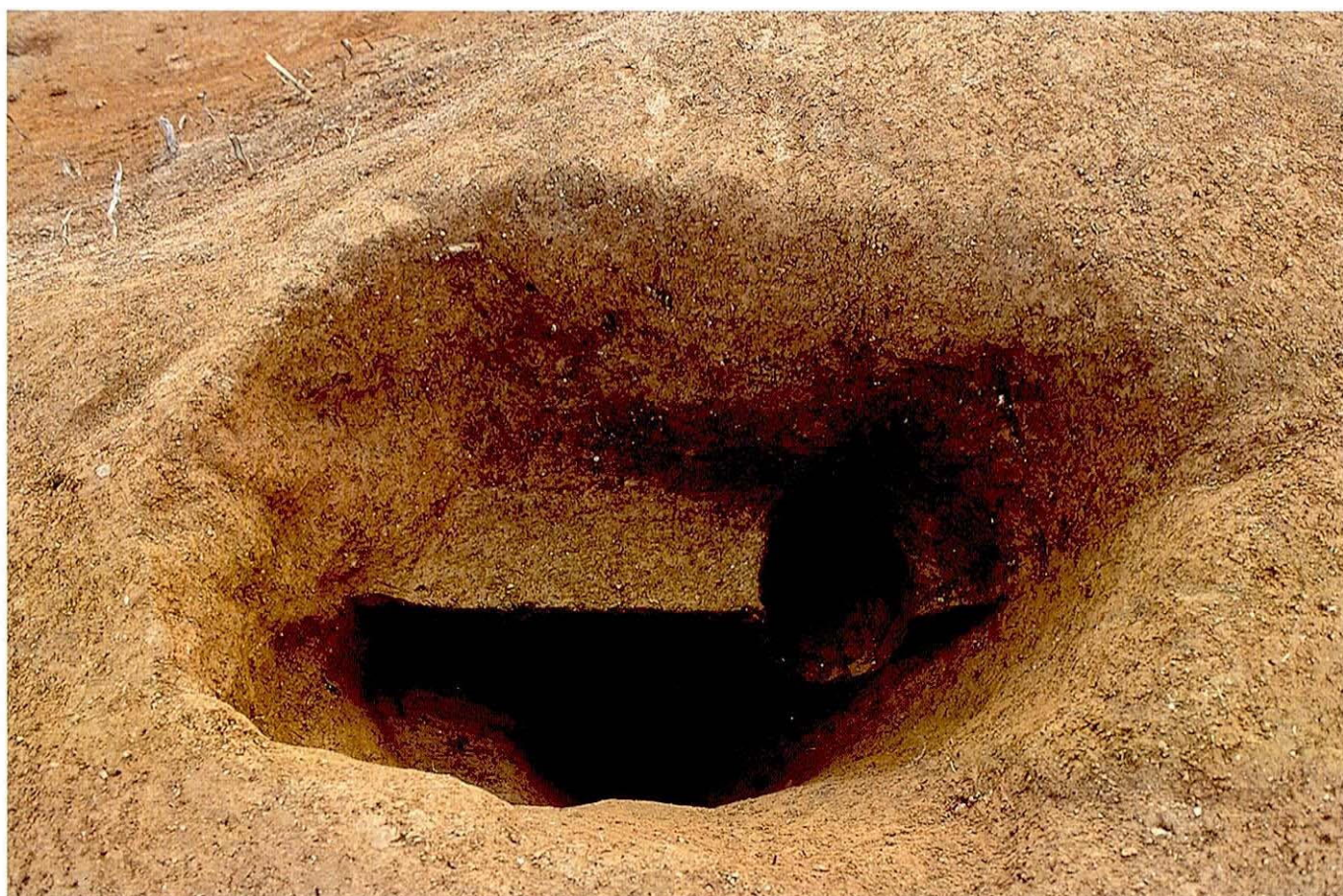
(1) S B01・P19柱痕完掘状況（北から）



(2) S B01・P19土層（北西から）



(1) S B 01・P 20柱痕完掘状況（北から）



(2) S B 01・P 20土層（北西から）



(1) S B01 · P03柱痕完掘状況（北東から）



(2) S B01 · P21柱痕完掘状況（北東から）



(1) SC01全景（北東から）



(2) SC01カマド全景（北東から）



(1) SD01土層 (A-A' · B-B') (南東から)



(2) SD01土層 (C-C') (南東から)



灰原出土須恵器



SX02出土須恵器



2



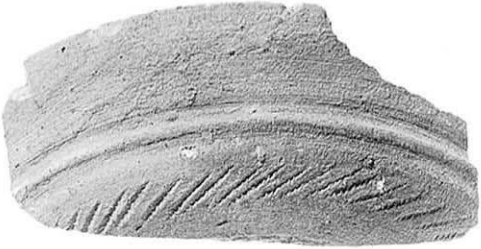
3



4



6



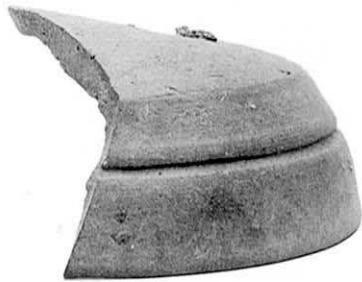
8



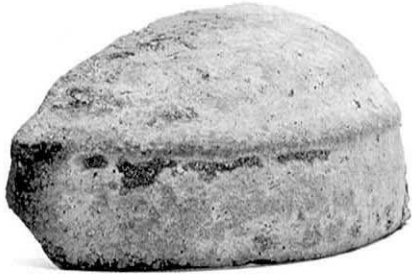
9



10



11



12



13



14



15



27



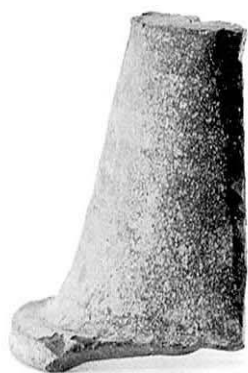
16



32



18



24



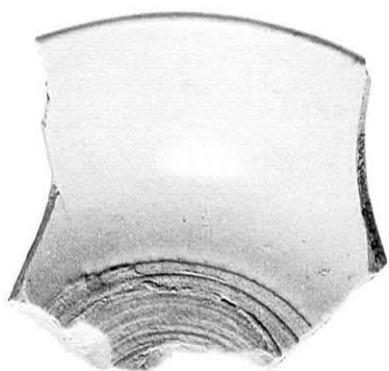
33



26



34



46



37



51



41



53



55



43



56



45



58



59



67



68



60



70



63



72



65



73



75



86



76



88



77



90



79



92



83



95



84



97



111



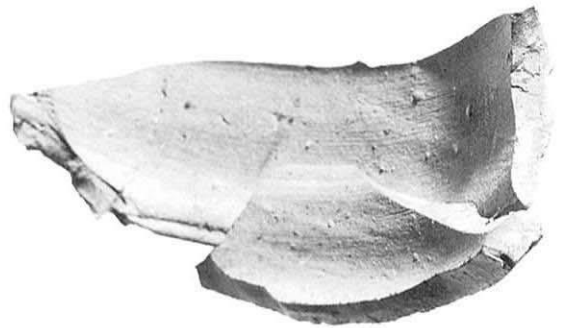
99



113



102



114



104



105



116



107



117



108



119



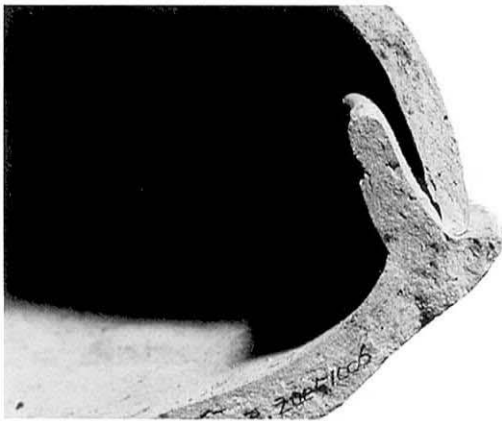
120



136



123



136



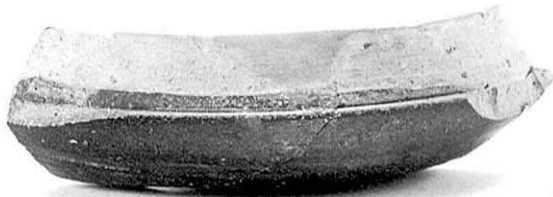
125



140



126



141



133



142



135



145



1



144



146



147



151



152



157



160



162



163



164



166



173



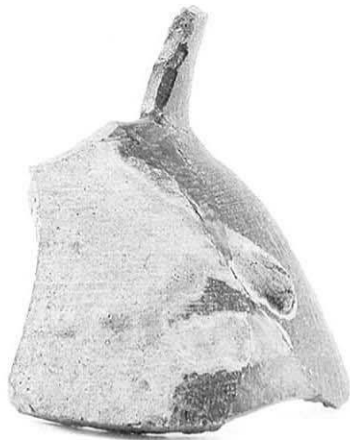
174



175



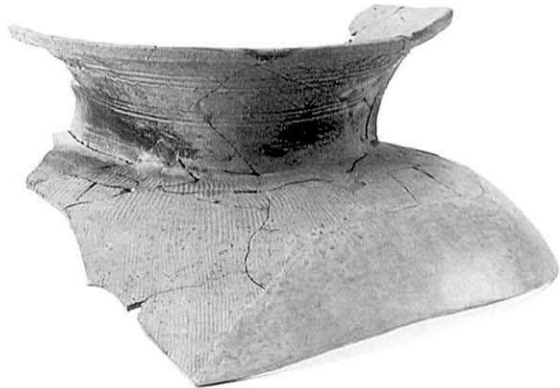
177



178



179



180



181



183



184



194



186



197



187



201



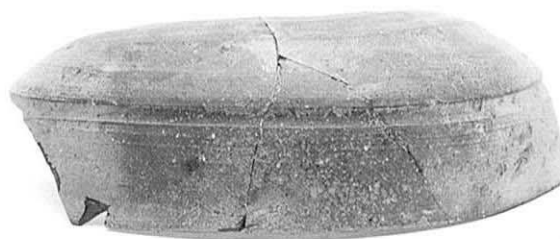
188



202



190



204



191



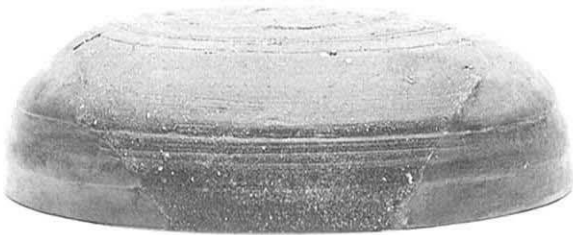
205



207



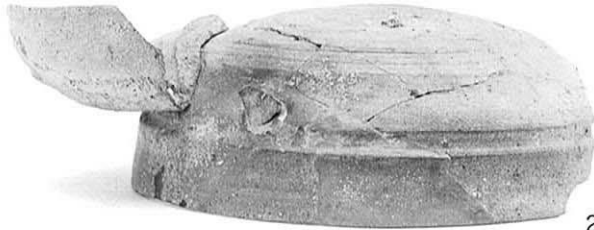
214



208



215



209



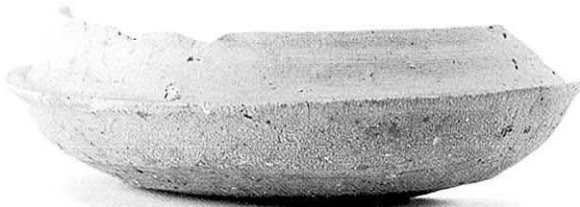
216



210



217



212



213



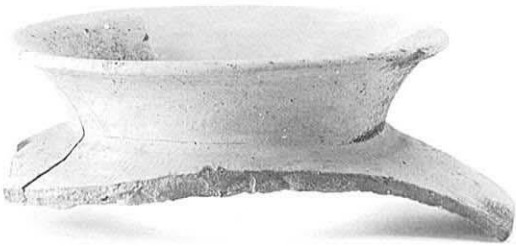
218



219



224



220



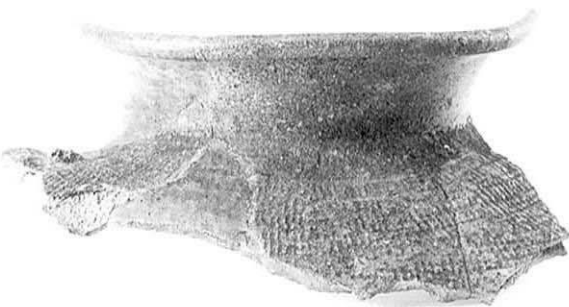
225



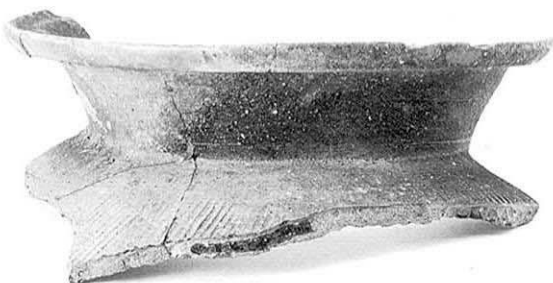
221



226



222



223



227



228



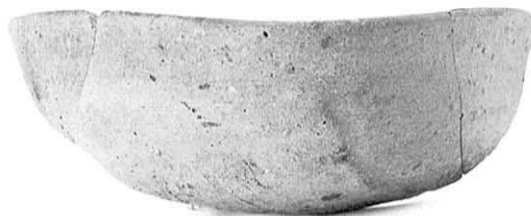
232



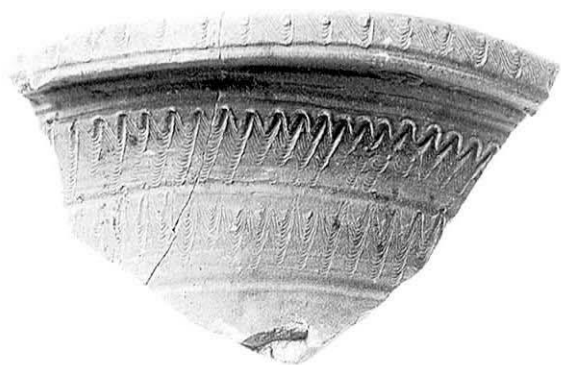
234



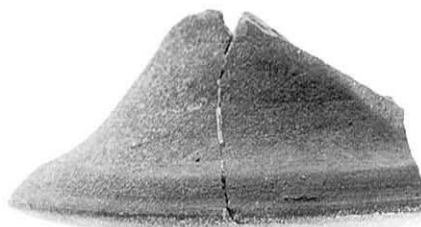
229



235



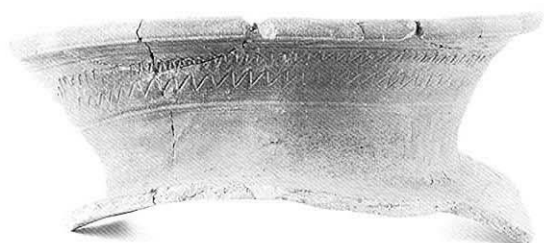
230



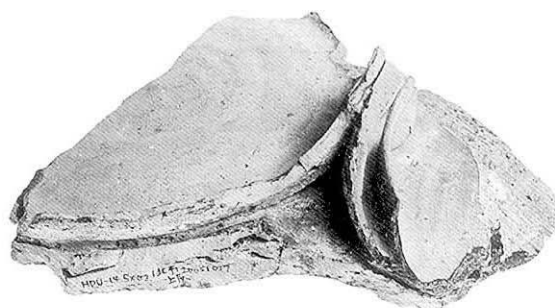
236



238



231



239



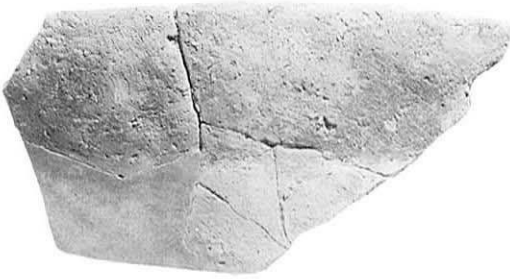
240



244



253



249



254



250



255



251



257



259



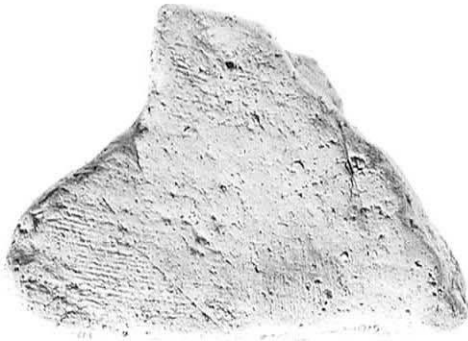
263



267凹



267凸



268凹



268凸



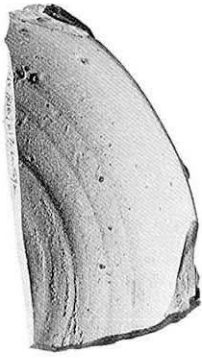
65



75



77



85



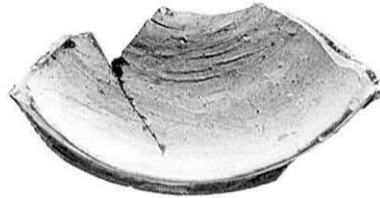
117



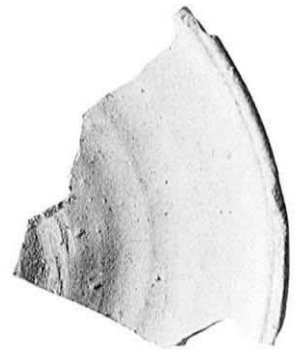
122



138



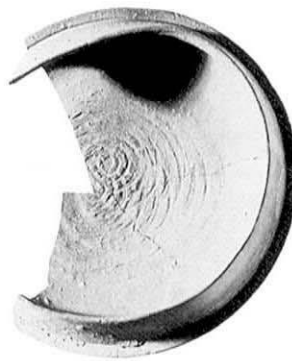
141



161



166



175



181



207



210



5



11



15



46



67



120



140



173



214



216



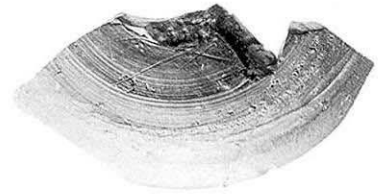
119



56



64



141



142



167



190



209



214



215



235

本堂遺跡14次調査地

野添6号窯跡



報告書抄録

[illegible]

大野城市文化財調査報告書 第83集

牛頸本堂遺跡群Ⅸ

平成20年9月30日

発行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 久野印刷株式会社
福岡県福岡市博多区奈良屋町3-1